
魔王と聖王と不屈の魔法少女

真王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と聖王と不屈の魔法少女

【Nコード】

N6923R

【作者名】

真王

【あらすじ】

1万年の眠りから目覚めし魔王と聖王。その二体は世界を更正させるべく立ち上がった。そして彼らは不屈の少女と出会う。若干エロっぽい表現があります。ご注意を。なおサブタイトルの最後に（●）が付いたのはムフフェツチな表現があります。見る自信がない人は見ない方が良いです。

プロローグ

????

どこかの遺跡、その場所である集団が集まっている。

??? 「グフフフ…ついに見つけたぞ。伝説の魔王と聖王の棺を」

いかにも悪っぽい面をしている老人が2つの棺を見ていた。

部下「ドルウク様、いかがでしょう」

ドルウク「私は運がいい、あの伝説を探し続け、そしてついにたどり着いた！」

ドルウクは笑いだす。

ドルウクは世界をすべて支配しようとするやつ、いわば世界征服をたくらむものらしい。

征服するために沢山の部下と、伝説の魔王を蘇らせてその力を利用するつもりらしい。

魔王とは世界を揺るがす邪悪な存在と象徴され、逆に聖王は光の象徴とされている。

世界の住人はおとぎ話レベルだと言っているが、実際に魔王と聖王は存在した。

ドルウク「歴史書曰く『魔王は世界の破壊を望む存在。目覚めの呪文と賛捧げるとき、魔王目覚めん』。魔王を目覚めさせる儀式と、それにふさわし生贄を連れて来たのだからな」

??? 「そのためにこの私をさらったのですの！」

部下に拘束されている女性が反応する。

おそらくドルウクの言う生贄にされる人だろう。

レフィア「世界で唯一魔法の天才と言われたこの私、レフィア・アースランドを生贄に捧げるだなんて！」

レフィアは言う。

彼女はある国のお姫様で、何より彼女は幼き頃から魔法が世界で一番高いと評価されている。

ドルウクはそんな彼女が適任していると確信し、さらったのだ。

ドルウク「お前の魔法は世界で頂点に立てるほどだからな。魔王の贄にはふさわしいものだろう？ 光栄に思え！」

ドルウクは部下に命令し、準備を進める。

ドルウク「魔王よ！我が願いを聞き、その身を現せ！」

ドルウクが叫び、部下が復活の呪文を唱え始めると、大きな魔方陣が展開される。

??? 1「おいおいあいつらなんて真似してんだ！」

どこかで誰かがドルウク達の行動を見て指差す。

??? 2 「あやつら、この先何が起こるか予想してないな」

??? 3 「ホント人間ってくだらないこと考えるわね」

??? 4 「じゃああいづら止める？」

??? 5 「それはいいですけどどうします？」

??? 1 「それを決めるのは魔王様さ」

それらはの一匹はニヤリと笑う。

呪文を唱える中、どんどん光が強くなり、大きな地震が起きる。

ドルウク 「目覚めよ！ 我らが魔王の復活だ！」

叫ぶと同時に黒い雷が棺に直撃した。

そして、棺がゆっくりと開き、中から黒い巨大ななにかが出た。
やがてそれは人の形になる。

レフィア 「あれが魔王……」

レフィアは黒い人型の何かを魔王だと確信する。

魔王 「地を這う愚かな虫けらよ。位と高き棺に眠る私をなぜ起こした？」

何やら魔王は叩き起されたせいなのか、覇気と怒気の混ざった声で威圧する。

部下達は威圧で恐怖したり気絶したりしているが、ドルウクは平然

として言う。

ドルウク「魔王よ！汝は世界を破壊する力を持っている。我と契約し、共に世界を支配しようではないか！」

ドルウクは高々と言い放つ。

魔王「私と契約？笑止！貴様のような軟弱な人間が私を利用して世界を手にする気だろうか？」

魔王が言うと、ドルウク少し顔をしかめるが、言う。

ドルウク「お見通しだったか。ならば話は分かるはずだ。我が願いを聞き入れ、その娘を生贄にささげる」

魔王はレフィアを見る。レフィアは少し恐怖を感じる。

ドルウク「魔王よ！真の姿を現し、生贄を存分に食らうがいい！」

ドルウクが叫ぶと魔王は黒い何かから蝙蝠の大群へと変わり、やがて蝙蝠が一ヶ所に集まると、一人の男が現れる。

ボサボサな黒い髪、金色の獣のような瞳、いかにも魔王と思わせるような黒い服装、そして背中に黒い悪魔のような羽があった。

魔王はレフィアに近づく。レフィアは縛られて動けない。

ドルウク「さあ魔王よ！生贄を存分に引き裂き、喰らうがよい！」

勇斗は犬歯と立ててレフィアに襲いかかった。レフィアは死を覚悟した。

すると魔王がレフィアの耳に小さく言った。

魔王「大人しくしてろ。すぐに終わらせる」
レフィア「え？」

魔王は羽を広げてレフィアと包み込んだ。
そして羽が開くとまた蝙蝠の大群が現れた。

ドルウク「ぬう、何だこれは？」

ドルウクは蝙蝠の大群に苦戦する。

ドシュッ！！

ドルウク「なあっ！・・・なぜ！」

ドルウクが大きな剣に刺された。刺したのは魔王だ。

魔王「ホントならこう言う娘を食べようとしたが、俺は後から頂くことにしてお前で我慢するさ。それに俺は世界を壊す気なんてない。お前は只の哀れな道化師にすぎん」

魔王は剣を抜く。

魔王「そして俺を叩き起しやがったお礼にこいつをプレゼントしよう」

魔王は手を上に向けると、後ろから大きな魔方阵が展開する。

レフィア（あれは召喚魔法！？しかも上級クラス！）

レフィアは驚く。

そして魔方阵の中から大きな黒い龍が現れた。
巨大な体とそれと同じくらいの大きさの翼の龍を。
ドラゴン

ドラゴン「ドラゴンノヴァ！」

ドラゴンは口から火の塊をドルウクに飛ばし、当たると爆発が起きた。

ドルウク「ぎゃあああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！」

ドルウクは一瞬にして無残に灰となった。

部下「ド、ドルウク様！！」

部下が悲鳴を出す。

魔王「…おい、いつまで寝てるつもりだ？」

魔王が棺に向かって言い放った。

すると、もう一つの棺から白い光がぼしゅつと飛びだし、地面に降り立つと、美しき白金の髪と赤い瞳、来ている服は何処となく聖なる白い服である。

レフィアはこの人を聖王だと確信する。

聖王「ごめんね。ちょっと寝ぼけちゃったみたい」

魔王「そんなんじゃ済むか？ さっさと片づけるぞ奏」

奏「分かったよ勇斗お兄ちゃん」

魔王・勇斗は暗黒大剣・バルバードを、聖王・奏は聖剣・エクスカリバーを持ち、

勇斗「死ぬ前にこいつを聞いて歴史に刻んどきな！俺は魔王・神道勇斗だ！」

叫ぶと暗黒の波動が部下達に襲いかかり、チリも残さず葬られた。
レフィアは哑然とする。
するとドラゴンが話しかける。

ドラゴン「久しぶりだな勇斗。どうだ？1万年も眠った気分は」

勇斗「そんなに寝てたのか？まあいい、久しぶりだなバハムート」
奏「バハちゃんお久々♪」

バハムート「今すぐ焼き殺すか？」

奏の悪ふざけに殺気立つバハムート。

勇斗「しかし1万年か。体が鈍くなったな。さっきのアレも威力が落ちた」

勇斗は肩を回す。

バハムート「まあそれぐらいの月日がたったのだ。感覚も鈍る。お主ら！サッサと前へ出ろ！」

？？？「ハイハイハイハイハイ！！！」

バハムートは別のところへ叫ぶと、石造のような魔物・ガーゴイルといかにも魔神みたいな人・カオスソルジャーと角と尻尾の生えた女性悪魔・サキュバスと白いローブと羽がある天使・エンジェルと

同じく白い羽があり銀髪の女性・ルシエルが現れる。

ガーゴイル「魔王様、お久しゅうございます」

勇斗「うむ」

エンジェル「聖王様、ご復活おめでとうございます」
奏「宜しい」

勇斗と奏は挨拶する。

レフィアは茫然と見てみると、勇斗が気づく。

勇斗「おい」

レフィア「（ビクッ）は、はい」

勇斗「お前はこれからどうするんだ？」

勇斗がきくと、レフィアは考える。

ドルウク達が襲撃して国はどうなったか知りたいが、レフィアはある夢があった。

外の世界へ歩きたいと。

レフィア「あなた方についていきます」

だからレフィアは勇斗に頼んだ。

勇斗「・・・いいのか？」

レフィア「いいの。あそこにはもう未練はないし。それに長年外の世界に歩くのが夢なの」

勇斗「・・・それはいいとしてもこの先厳しいぞ？」

レフィア「確かにこの先とてつもないことがおこるかもしれませんが、それでも私は行きますわ」

レフィアの決心は固い。勇斗はため息をつく。

勇斗「はあ…分かった。ならば契約しよう」

レフィア「契約？何かありますの？」

勇斗「いやいらん。その前に言っておく。契約するならお前の覚悟を調べさせてもらう。バハムート」

バハムート「うむ」

バハムートが顔を出す。

バハムート「娘よ。我が威圧に耐えた時に主は契約を許される。それが無理なら諦めろ」

レフィア「いきなりの高いハードルですね。でもここで止まりませんわ」

バハムート「…いいだろう。では耐えて見せよ」

バハムートはレフィアと威圧した。

レフィア「っ！！？！！？」

威圧を受けたレフィアは空気の重さと恐怖と受ける。

レフィアは根性で意識を保つ。

しばらくしてレフィアは意識の限界が来そうであると、

バハムート「うむ、宜しい」

バハムートは威圧を止める。

レフィアは安心してヘタレこむ。

バハムート「よくぞ我が威圧に耐え抜いた」

レフィア「そ、それはどうも…」

レフィアは疲れている。

奏「お疲れだね。直してあげる。エスパワー」

奏が魔法を唱える。するとさっきまでの疲れが嘘のように無くなった。

勇斗「お前に覚悟は見届けた。なら始めよう。神道勇斗が命じる。我が手と足となり、我が力を与え、しもべとなれ！」

勇斗が契約呪文を言うと、レフィアの周りに魔方陣が展開する。そしてレフィアの目の前に白い光が現れ、その光がレフィアの中に入った。

レフィア「うっ！くウウウウウウウウウ！」

レフィアは苦しみ始める。
しばらくして痛みが治まった。

レフィア「体が・・・なんだか力が強くなった気がする」

勇斗「これでお前は自由を手に入れた。同時に俺の部下になるわけだが」

レフィア「自由を手に入れただけで十分ですわ！それに私は同時にある物を手にしたいですわ！」

勇斗と奏はそれを聞いてもしゃと思う。

勇斗「・・・まさかと思うがそれ…」

レフィア「そうですわ！私はあなたの妻n「チェストー！ー！！」
グハッ！」

レフィアは奏に蹴られた。

ガーゴイル達は苦笑いを浮かべる。

奏「お兄ちゃんの妹たる私がそれを許すべからず。お兄ちゃんにも
のにしたいなら私の屍を越えて行けー！ー！！」

レフィア「いいですわ。新しい力の実験台にしてあげますわ！」

2人はにらみ合って技を炸裂：

勇斗「止めんか！」

奏・レフィア「いたっ！」

しなかった。勇斗が2人を止めた。

勇斗「全くお前らは……。俺のことで暴れんな」

奏「ごめん」

レフィア「ごめんなさいですわ」

奏とレフィアは謝る。

勇斗「まあいい、久しぶりに我が城に帰るぞ。俺らの復活イベント
だ」

奏「いえーい♪私無礼講大好き♪」

レフィア「ついでに私のもお願いしますわ」

バハムート「そう言うわけだ。知らせてこい」

ガーゴイル「はっ！」

エンジェル「了解しました！」

魔物と天使達は敬礼する。

勇斗「さあ、宴を始めるか」

魔帝界

ここは魔物たちがすむ世界。そしてそこは勇斗がおさめていた世界。復活した勇斗と奏は昔住んでいた魔王城に戻ると、部下だった者や城下の住人達が大いに盛り上げてくれた。

その後、無礼講な気分に住人達も天使達も盛り上がっている。

やがて勇斗が言いだす。

勇斗「者ども、よく聞け！俺の名は神道勇斗。1万年から目覚めし魔王だ！」

勇斗の言葉に答えるように魔物たちが騒ぐ。

勇斗「諸君らは1万年間俺達を待ち続けたことに感謝しよう。そして俺はここで宣言する！」

勇斗はマントを広げ、悪魔の羽に変えて言う。

勇斗「人間どもを、恐怖のどん底に落としてやろう！」

勇斗はそう言うと言明する。

勇斗「聞いた話によれば地上の人間どもは権力争いと戦争などで世界は傲気に満ちている。身勝手な権力はあつてはならない！ そうなれば地上の世界は崩壊してしまうであろう」

勇斗の話を聞いてレフィアは思った。

攫われる前に父親から外は権力争いが多いと聞かされた。

さっきのドルウクのような人がたくさんいることを理解する。

勇斗「そして俺はそんな腐った人間どもを許すわけにはいかない。者ども！俺と共に来れるか？」

[illegible]

魔物たちは勇斗の言葉に雄叫びをあげる。

勇斗「さあいくぞ。狩りの始まりだ！」

勇斗、奏、レフィアは魔物たちと天使達とともに歩きだした。

そして1000年後、彼らの物語は動き始める。

プロローグ（後書き）

こんにちは、作者をやっています真王です。

我が作品、『魔王と聖王と不屈の魔法少女』を読んでいただき、ありがとうございます。

勇斗「おい作者」

なんすか？

勇斗「なんすかじゃねえよ。お前昔にこれとよく似たもん作って俺らの消されたじゃねえか」

・・・面目ない。もうこの作品は完全なオリジナルだからその心配はいらないよ。

勇斗「・・・だといいたがな」

ホントすいません。それはともかく、『魔王と聖王と不屈の魔法少女』始まります。

メンバー設定（前書き）

メインキャラクターの設定です。

メンバー設定

（神道^{しんどう} 勇斗^{ゆうと}）

髪…ボサボサな黒

目…金色

服…茶色いズボンにファントムキングダムのゼダの服（胸のところは黒いシャツで）をイメージ。

マントはちよっぴりボロボロで悪魔の羽に変わることがある

体重…55キロ

性別…♂

種族…魔王神

魔力光…漆黑

好き…読書、辛いもの、寝ること、静かな時間、散歩、相手を茶化すこと

嫌い…権力者、命を無駄にする、弄ぶ奴、邪魔をする奴

性格…真面目、サディスト

レベル…9999

得意武器…剣（バルバード）、拳（アルムテン）、斧（アポカリプス）、槍（ロンギヌス）、銃（ヘルフアング）

スキル…バトルソウル（撃破した敵の数だけ強くなる）

魔王のカリスマ（美男子のオーラで女性を虜にする。本人はその気はないのだが、言わばフラグである）

詳細…1万年の眠りから目覚めた魔王。もとはある村に住んでいる普通の人間だったが、魔王の適性があり、魔王の後継者となってしまったが、本人は悪い気はなかったそう。1万年前人間が禁忌を犯して世界を破壊されるところを奏と共にそれを破壊し、1万年の眠りに入ったそう。

（神道^{しんどう} 奏^{かなで}）

髪…腰まである白金

目…赤

服…なのはVividの戦闘モードのアインハルトの服をイメージ

3サイズ…88／55／83

体重…あれ？何処行った？

性別…♀

種族…聖王神

魔力光…白金

好き…勇斗お兄ちゃん、平和、花、勇斗からのお仕置き、甘いもの
嫌い…権力者、命を大事にしない人、優斗との触れ合いを邪魔する人
性格…ちよっぴりめんどくさがり、サディスト（勇斗の前ではマゾ
ヒストになる）、ブラコン

レベル…9999

得意武器…剣（エクスカリバー）、 槍（グングニール）、 杖（
全知全能の杖）

スキル…聖王の加護（光りのオーラで魔法攻撃を半減する）

聖王の魅力（美しさに男達を虜にする）

詳細…1万年の眠りから目覚めた聖王で勇斗の妹。勇斗と同じく村
に住んでいて、聖王の適性があるため聖王の後継者にされた。（以
下、同文）

くレファイア・アースランドく

髪…腰まである赤

目…紺

服…STSのフェイトの服を黒を茶色に、白を黒にしたイメージ。
バリアジャケット

3サイズ…88／56／83

体重…焦げてる…

性別…♀

種族…魔女（元人間）

魔力光…紫

好き…勇斗様、読書、散歩、バトル

嫌い…権力者、命を弄ぶ者、勇斗様の関係を邪魔するもの、辛いもの、マナーを守らない者

性格…真面目、戦闘狂気味、
バトルマニア

レベル…8000

得意武器…剣（クリスタルソード）、 槍（ストライクランス）、

杖（魔女の杖）

スキル…王女の気迫（隣接する人の魔法力を上昇させる）

詳細…勇斗と契約して魔女となった女性。もとはある国の王女だったらしいが、勇斗に助けられ、ともに歩くことを選んだ。彼女は外の世界を歩くのが夢らしく、それ故か勇斗と買物したり野良の魔物と戦ったりと多くなっていくようだ。奏とは勇斗関係だとライバルだが、戦闘ではよいコンビネーションができる。

くレイナく

髪…膝までの紅、アホ毛あり

目…赤

服…なのはのエクシードを黒くしたイメージ

3サイズ…90／54／83

体重…誰だ破きやがったやつは！

性別…♀

種族…妖怪（元人間）

魔力光…紅

好き…勇斗、楽しいこと、動物

嫌い…邪魔する奴、楽しくないこと、勇斗を傷つける人

性格…マイペース、両刀使い？

レベル…8000

得意武器…魔物武器（サタンクロー）、剣（ブラッドカリバー）

スキル…禁忌の触手（撃破した相手に能力を奪う）

詳細…自称最強の使い魔（本人いわく）、もとは勇斗達とは違う村

の住人だが、はぐれ妖怪がレイナに取りついた際、融合して8本の

触手の化け物モンスターとなってしまうが、当の本人はこの姿って楽しめそ

う♪とポジティブ思考で気にしなかったらしい。勇斗と出会ったと

き勝負を挑んだが、敗れ、その時勇斗と一緒に来るかと誘われ、今

現在勇斗の使い魔（本人が無理やり）となった。

（聖せい華）

髪…背中までの銀髪

目…青

服…ヴァルキリーの服

3サイズ…85／53／85

体重…聖華「教えません！／／／／」

性別…♀

種族…ヴァルキリー乙女戦士

魔力光…銀

好き…勇斗、奏様、平和、お花、動物（特に猫）

嫌い…卑怯かつ非道な人間、無差別に傷つける人、サドモードの勇斗
性格…真面目、おしとやか、偶にドジあり

レベル…7500

得意武器…剣（ライトブレード）、槍（ヴァルキリーランス）、

杖（光の杖）

スキル…聖女のご加護（回復魔法と補助魔法の能力を大幅にあげる）
詳細…天界の住人で天界上トップクラスの实力を持つヴァルキリー。
ドジな一面もあるが、その実力は本物なため奏が採用した。勇斗と
奏が1万年眠ってる頃は彼女が天界を仕切っていたが、ドジなここ
は抜けてなかったそうだ。

（シーナ）

髪…腰までの若草色

目…黄色

服…コードギアスのC・Cの戦闘服（黒）をイメージ

3サイズ…91／54／87

体重…引き裂かれている

性別…♀

種族…^{サキユバス}夢魔

魔力光…緑

好き…勇斗、男弄り、甘いもの、ピザ（!?!）

嫌い…なし

性格…めんどくさがりだがやることはやる、冷静沈着、サディスト
レベル…9000

得意武器…剣（アロンドルト）、拳（デスサック）、槍（ハル
バード）、斧（グラビドアックス）、銃（ナイトメア）
スキル…魅惑の女王（敵の男の能力を下げる）

詳細…女悪魔たちの女王。常に冷静沈着な性格だが、時々サディス
ティックなことを思い出したりする。勇斗と出会ったとき、なぜか
一瞬で仲良くなった。本人いわく、似たところがあるんじゃないの
かとの事。

（メイ・リー）

髪…腰までの赤

目…青

服…まんま東方の美鈴の服

3サイズ…93／55／86

体重…潰されてます

性別…♀

種族…竜女族

魔力光…赤

好き…勇斗、寝ること、花、静かな時間

嫌い…勇斗のお仕置き、卑怯な事をする者、命を大事にしない者

性格…真面目、時折寝てしまいがち

レベル…8500

得意武器…拳（ドラゴンブレイカー）

スキル…竜女の闘士（ダメージを受けるごとに攻撃力が増す）

詳細…ドラゴンと共に住む女性だけの部族・竜女族の一人。中でも彼女はそのトップクラスの實力。勇斗と手合わせをして實力を評価され、今は勇斗達の一員となった。任務で暇になると寝てしまう癖があり、そのせいで勇斗からお仕置きをくらっていくのもしばしば。以後勇斗のお仕置きを喰らいたくないと頑張っているが、やはり眠る癖は直らないようだ。ちなみに姿はまんま東方の美鈴である。

（^{れんが}蓮牙）

髪…膝まである金髪

目…赤

服…まんま東方の勇儀の服

3サイズ…97／56／87

体重…破壊されています

性別…♀

種族…鬼女族

魔力光…茶色

好き…勇斗、酒、宴、戦い

嫌い…宴を台無しにされること、卑怯なことをする奴、邪道な道を進むやつ

性格…マイペース

レベル…9500

得意武器…拳（オーガハンド）、 鎚（鬼の棍棒）

スキル…怪力神の力（攻撃力と力を自由に換えられる）

詳細…女性型の鬼族のリーダー。周りから姉さんと慕われている。

勇斗と力比べして、勇斗が気に入ったので一員となった。大の酒好きで酒樽10個でも軽くいける。ちなみに姿はまんま東方の星熊勇儀である。あと角はない。

メンバー設定（後書き）

何か東方のキャラが出てる気がしますすが、そこは気にせず。

第一話：異世界へ訪問（前書き）

記念の第一話です。ではスタート。ちなみにA S 時期です。

第一話：異世界へ訪問

勇斗と奏が目覚めて1000年の月日が流れた。

「……目覚めて1000年か……。まずまずだな」

そう呟くのは、黒のボサボサ頭で1万年の眠りから覚めた魔王・神道勇斗だ。

あれから1000年間、勇斗達は地上の世界を回っては腐った人間（ゾンビのことではない）達を取り締まっていた。
麻薬買収、戦争、連続殺人などの不正なことを全て破壊した。

世界は平和になるも、影で不正な動きをする輩がいるらしく、長い月日がたったため人間側も魔術や兵器や武器を開発している。ほとんどの人間は悪いことを使っていないが、闇の人間は殺戮や折檻や欲望のために使われるケースも多い。地上の治安は善が9割を占めている。どちらにしる地上の世界は平和と言うことである。

とはいいつつも、最近地上のの魔物たちが悪さしている事もあるが、人間達が魔物たちを狩りをしてたり、その魔物を使い魔にしていたりと特にこれと言った悪いことはなかった。

「……平和になったね」

勇斗「……何でそんなところでくつろいでんだ奏」

勇斗はジト目でベッドでくつろいでいる奏を見る。

奏「いいじゃんいいじゃん、1万年間この場所でくつろいでなかったじゃん。それにお兄ちゃんの匂い久しぶりだし」

勇斗「明らかに欲望が出てるな」

勇斗は突っ込む。

すると奏はベッドから降りて勇斗に抱きつく。

奏「ウフフ、1万年間やってなかったこともできるしね」

奏はそのまま勇斗の顔に近d：

???「させるかーーーーー!!」

ドガッ！

奏「オプウツ！」

奏は誰かに蹴り飛ばされた。

犯人は赤いロングの髪的女性で、勇斗と契約したレフィアである。なぜ1000年たっているのに昔と変わっていないのは、契約の影響で成長できて老いない体となったからだ。

レフィア「私の知らない間に抜け駆けだなんて許せませんわ」
奏「おのれエエ、せっかくのスキシップを邪魔しやがって」

奏は殺気で威嚇する。

1000年間勇斗をめぐっては争うことの多い2人。
取っ組み合いを始めた2人に勇斗はため息をつく。

勇斗「全くあいつらは何やってんだかな」

「???」「ホントにね」

勇斗「・・・そう言うお前はドサクサにまぎれて何やってんだレイナ」

勇斗はジト目で隣に引っ付いている赤い髪にアホ毛が特徴の女性・レイナを見る。

レイナ「私は勇斗の使い魔だよ。でも恋とかできるからこういうのもいいかなって」

勇斗「あっそ」

レフィア「つてあなた！ドサクサに紛れて勇斗様に抱きつくんじゃないありませんの！」

奏「お兄ちゃんは渡さないぞ！」

レイナ「ハン！かかってこいよ！」

勇斗「全員揃って黙れ！」

そんなこんなでも魔帝界は平和である。

翌日

ある時奏が言った。

奏「どうせ暇だし、異世界でも旅しない？」

その一言に勇斗は考えた後承諾した。レフィアも付いてきて、レイナは面白半分に着いてきた。

勇斗「メーベル、準備は出来たか？」

メーベル「はい、いつでも行けますよ勇斗様」

金髪で2つのドリルロールの髪型の少女メーベルが答えた。

彼女は『時空の渡し人』という異世界へのゲート開く役目を持っている。

勇斗「さて、行き先は……これでいいか」

勇斗は適当に場所をいじる。

メーベル「それでは行ってらっしゃいませ」

奏「れっつゴー♪」

勇斗「調子に乗るな」

レフィア「どんな場所でしょうか」

レイナ「楽しいことあるかな？」

勇斗達はゲートを通り、異世界へと旅立った。

その世界は『地球 海鳴市』と。

地球・海鳴市

勇斗達は誰もいないビルの上で転移された。

勇斗「ほう？なかなか興味深いものだな？」

奏「眺めがいいね」

レフィア「あなた馬鹿ですの？眺めがいいのは高いところにいるからですわよ？」

奏「知ってるよ」

奏とレフィアはまたにらみ合う。

と入っても実際はコンビ組むほどの大の仲良しである。
するとレイナがある場所を見て言いだす。

レイナ「ねえねえ、こう言う世界ってドームがあるの？」

レイナはドーム状の黒っぽい何かに指をさす。

勇斗「違うぞレイナ。あれは結界だ」

奏「認識拒絶の結界だね。それに中で誰か戦ってるし」

勇斗「観光気分で来たんだが、面白くなりそうだ」

勇斗は笑って結界へ向かった。

結界内部

そこでピンクのポニーテールで騎士と思わせる雰囲気を出している女性と、赤毛に赤のゴスロリ？をきている少女が浮いていた。少女の周りに光の輪っかが縛られているが、バインドと呼ばれる拘束魔

法である。

??? 「どうしたヴィータ？ 油断でもしたか？」

ヴィータ 「うっせーよ。こっから逆転するところだったんだ！」

??? 「そうか。それは邪魔したな」

そう言って騎士の女性・シグナムは、赤毛の少女・ヴィータにかかっているバインドを破壊した。

シグナム 「だが、あまり無茶はするな。無茶をして怪我でもしたら、我らが主が心配する」

ヴィータ 「わーってるよ！」

ヴィータ はそっぽを向いてしまう。

シグナム 「ほら。落とし物だ」

シグナム はヴィータの頭に、帽子をかぶせた。

ヴィータ 「…ありがと。シグナム」

ヴィータ は俯きながら礼を言った。

シグナム は、ある屋上に降り立つ。そこに倒れてる金髪ツインテールの少女・フェイトに近づいた。

フェイト 「く…！」

フェイト は、目の前に立つシグナムを見た。

シグナム 「じっとしている。抵抗しなければ、命までは取らない」

そう言って剣を上に掲げる。

フェイト「だ…誰が…!!」

フェイトは足に力を入れて立ち上がろうとする。

シグナム「いい気迫だ。だが…残念だがここまでだ」

シグナムは剣を振り下ろす。

フェイトは目を閉じた。

直後、

キキキキキキー……!!

突然蝙蝠の大群が襲いかかってきた。

シグナム（馬鹿な!?!なぜ蝙蝠が!）

シグナムが驚いていると、蝙蝠の大群が横を通り過ぎる。

目を開けるとフェイトがいなくなった。

蝙蝠の大群はあるビルに向かい、1ヶ所に集まると、人に変わった。そこにいたのはフェイトを抱きかかえる勇斗だ。

フェイト「あ、あなたは一体?」

フェイトは聞くと、勇斗は答える。

勇斗「なに、只の通りすがりだ」

空中では青い犬耳生やした男・ザファイラと赤い犬耳の女性・アルフが戦っていた。

アルフ「ちっ！」

ザファイラの攻撃に押され、アルフは防戦一方だった。
その時、

???「シュート！」

ザファイラ「なに!？」

何処から魔力弾がザファイラに襲いかかり、とっさに障壁を張って防御したが、強力な攻撃なためビルに叩きつけられる。

アルフ「な、何だい今のは？」

アルフは驚いていると、

レイナ「はいはい。大丈夫かな？」

軽い口調でレイナがアルフの隣に降り立つ。

ザファイラ「くっ、貴様、一体何者だ」

ザファイラが起き上がり、レイナは答えた。

レイナ「私は自称最強の使い魔、レイナだよ！」
アルフ（自分から自称ってなんさ…）

アルフは心の中でつぶやく。
もちろんザフィーラも。

ユーノもヴィータの攻撃に押されていた。

ヴィータ「ぶっ潰せエエエ!!」

ヴィータがハンマーを振り上げた直後、

???「そこまですわ」

上空から声が聞こえた。

ヴィータ「えっ!?!」

ヴィータは上を見た。上空から光の球がヴィータに襲いかかった。
ヴィータは障壁で攻撃を防いだが、衝撃が大きく、近くの屋上に降りた。

ヴィータ「何だ、お前は、」

ヴィータは降りてきた人物・レフィアと対峙する。

レフィア「私はレフィア、恨みはありませんがお相手いたしますわ」

一方、白い服で魔法の杖・レイジングハートを持つ少女・なのはは屋上で皆を見ていた。

なのは「あ、あの人たちは一体？」

勇斗達の姿を見て、少し戸惑うが、奏がなのはの隣に降り立って言う。

奏「大丈夫だよ。アレ味方だから」

なのは「え？…と、あなたは？」

奏「私は神道奏、私達が来たからには安心して」

なのは「はい」

奏の言葉に、なのはは笑顔で頷いた。

ザフィーラはレイナに向かって拳を連打した。

ザフィーラ「うおおおおおお」

だが、レイナは当たる直前に、スラスラとよけ続けている。

レイナ「まだまだ遅いよ？」

ザフィーラ「くっ、ちょこまかと逃げるな」

今度はレイナが攻撃を仕掛け、ザフィーラは避けようとしたらそれはフェイントで腹に一撃を貰った。

ザフィーラ「ぐはっ！」

レイナ「まだまだ甘いね」

アルフ「っ、強い…」

アルフはザフィーラを倒したレイナに驚いた。

ヴィータ「シュワルベフリーゲン」

四つの鉄球を出し、レフィアに向かって放ったが、レフィアは障壁でいとも簡単に防ぐ。

ヴィータ「何」

レフィア「子供相手に戦うのはどうかと思いますが、これ以上抵抗するなら本気で相手してあげますわ」

ヴィータ「お前、まだ本気じゃなかったのか？」

ヴィータは冷や汗をかいた。今の攻撃は本気の力でやったはずなのに、簡単に防いだ。さらにまだ本気を出していないということは、

シグナムと同等、それかそれ以上の力を持っていると言うことになる。

ヴィータ「へっ、これでもあんたより年上だ。それにあんま舐めると、痛い目に合うぞ」

レフィア「あら？　そうですか？　ならその対応にお答えしてあげましょう」

シグナムは、屋上で勇斗と対峙していた。

シグナム（一体何者だ、この男は？）

剣を構えながら、シグナムは勇斗を見つめた。

シグナム（何者かは知らないが：只一つ言えることがある）

剣を握る手に力を入れる。

シグナム（この男：強い！）

鋭い眼光を勇斗にぶつける。

対する勇斗は、緊張した様子もなくシグナムを見ていた。

シグナム「貴様、名前は？」

勇斗「俺は神道勇斗だ。あんたは？」

シグナム「剣の騎士、シグナムだ。武器もなしに私に挑む気か？」

勇斗「アホか。丸腰で戦うような馬鹿はいねえよ。まあ格闘術を使うやつなら除くが」

シグナム「なるほど、確かにそうだな。なら容赦はしない。レヴァンティン」

レヴァンティン《YES》

カートリッジをロードし、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

シグナム「紫電一閃！」

炎の刀身で勇斗に斬りかかったシグナム、勇斗はマントから黒い槍・ロンギヌスを取り出して防ぐ。

勇斗「なかなかの技だな。俺はこう言う戦いが好きだな！」

シグナム「奇遇だな。私は少し心が躍るぞ！」

そして両者は一步も譲らない戦いを始めた。

そして・・・

勇斗「そこだ」

シグナム「ツツ!？」

ロンギヌスでシグナムの腹部をとらえ、柄で攻撃した。

勇斗「簡単に命はとらねえよ。まあ俺の勝ちだな」

シグナム「クツ、私の負けか…」

シグナムは膝をつく。

勇斗「そっちは大丈夫か？」

フェイト「え？あ、はい大丈夫です」

勇斗「そうか、2人揃ってしょげんなよ。可愛い顔が台無しだ」
フェイト・シグナム「か、可愛い！？／／／／／」

フェイトとシグナムの顔が赤くなる。

フラグ体質？いえ、勇斗はわざとからかってるのです。

なのは「ああ！」

その時、近くの屋上で回復していたなのはの悲鳴が聞こえた。

なのはの胸のところに、何者かの手が伸びていた。

なのは「あ、ああ、あ…」

奏「ち！、なんてことを…」

勇斗「シグナム、何だあれは？」

勇斗はシグナムに問う。フェイトはなのはの方を見て、心配そうに見ていた。

シグナム「あれは、魔力を蒐集している。命に別状はない。信じてくれ」

シグナムは力強く答えた。

勇斗「…わかった」

シグナムは一瞬で空に飛び立った。勇斗とフェイトはシグナムの姿が消えるまで見つめていた。気づくと他の二人もいなくなっていた。

第二話：解釈と八神家（前書き）

ちょっと遅れて後半のメインキャラ登場です。
もちろんはやても。

第二話：解釈と八神家

シグナム達との戦いを終えた勇斗達は、なのはを保護して、時空管理局本局にいた。

なのはは、魔力の源であるリンカーコアが縮小している以外に、特に外傷はないのですぐに良くなるそうだ。

フェイトは勇斗と通路を歩いている。

フェイト「あの、危ないところを助けていただいてありがとうございます」

勇斗「気にするな。たまたま通りかかったところを見つけたただけだ」

そう話し合っていると医務室にたどり着き、入るとそこには目を覚ましたなのはに、奏とレフィアとレイナがいた。

レフィア「あなたがフェイト・テストロッサですか、私はレフィアと申しますわ」

そう言って、レフィアはフェイトに向かって一礼をした。フェイトもつられて一礼した。

フェイト「えっと、レフィアさんですよ。すごい人だって聞きます」

レフィア「別に凄いといわれるほどではありませんわ」

レフィアはそう言うが、嬉しいらしい。

レイナ「私はレイナだよ。よろしく」

奏「私は神道奏だよ」

フェイト「神道？ってまさか」
奏「うん、兄妹」

フェイトとなのははそれを聞いて納得する。

なのは「えっと、勇斗さん、危ないところをありがとうございます」
勇斗「気にするな。怪我がなくてよかったな」

そう言って、勇斗はなのはの頭を撫でたが、なのはの顔は暗かった。

なのは「私は大丈夫だったんですが、レイジングハートとバルディッシュが」

フェイトも暗くなった。

フェイト「あの人達、すごい強かったね。もしあそこに勇斗達が来なかったら私たちどうなってたか…」

勇斗「そうだな。今はゆっくり休んで、向こうの執務官と相談する。いいな（ニコッ）」

勇斗は笑顔で言った。フェイトとなのはと奏達は勇斗の笑顔を見て、顔が真っ赤になった。

なのは（ふえ！？勇斗さん！？／／／／／）

フェイト（ゆ、勇斗！？反則だよそれ！／／／／／）

奏（出た！お兄ちゃんのガールキラーフェイス！そこに痺れる憧れるうう！／／／／／）

レフィア（勇斗様の笑顔：／／／／／）

レイナ（笑ってる勇斗：／／／／／）

5人そろって赤くしていると、勇斗は何か考えるしぐさをして、奏が聞いてみる。

奏「どうしたのお兄ちゃん」

勇斗「いや、後からついてきたあいつらを思ってな」

奏・レフィア・レイナ「あっ」

奏達はゲートを通る際勝手に付いてきたあいつらを思い出した。

一方、リンカーコアを蒐集し、離脱したシグナム達は八神家へ向かっていた。

シャル「シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、大丈夫？」

心配そうな表情で、シャルが三人に聞いた。

シグナム「ああ、大丈夫だ」

ヴィータ「全然平気だよ！」

ザフィーラ「我也問題ない」

三人はシャルに答えた。

ヴィータ「シャルこそ大丈夫かよ？その怪我」

シャルの左腕を見ながらヴィータが言った。シャルの服は少しだけ焦げ付いていた。

シャマル「大丈夫よ、直撃は避けたわ。」

実は言うところ、奏に居場所を発見され、砲撃を撃たれた。だが、ギリのところで直撃は避けていた。

ヴィータ「それにしても、一番無茶苦茶なのは、あの黒い奴だ！ 一対一の勝負でシグナムに勝ちやがった…！」

ヴィータが納得いかなかった顔する。

シャマルもザフィーラも、シグナムが一対一で負けるとは想像もしていなかった。

そのシグナムは、勇斗の事を考えていた。魔法を使わず槍だけで自分を倒した男。勇斗の姿が頭から離れない。いつの間にか、シグナムの頬は少し赤くなっていた。

シャマル「シグナム？」

シグナム「えっ？ あ…ああ、どうした？」

隣にいるシャマルに声をかけられ、シグナムは慌てて答えた。

シャマル「大丈夫？ 顔が少し赤いけど」

シグナム「だ…大丈夫だ。心配いらない」

平静を装ってシグナムが答えた。

一行は八神家に到着した。ドアを開けて中に入る。

シグナム「主、只今戻りました」

ヴィータ「ただいま」

中に入って挨拶をする。

はやて「みんなお帰り」

車椅子に乗った少女・はやてが玄関に来た。

その時、シグナム達は目を細めた。はやてに変わった所はない。シグナム達は、はやての後ろに立っている女性達を見て目を細めたのだ。

ヴィータ「：誰だよ前ら？」

ヴィータが、はやての後ろに立ってる女性達に尋ねた。

銀髪で明るさがある服を来た女性と、若草色の長髪で黒い服の女性と、緑の中華っぽい服の女性と、金髪で体操服っぽい服に若干薄そうなロングスカートを着ている女性がヴィータに聞かれ、自己紹介をする。

聖華「えっと、はじめまして、聖華と言います」

シーナ「私はシーナだ」

メイ「メイ・リーと申します」

蓮牙「あたしは蓮牙だ」

はやて「この人たちは私の家の前に倒れててな。泊まる所もない言うから、家に泊めてあげる事にしたんや」

はやてがみんなに説明した。

はやて「みんな仲良くしてな」

蓮牙「とりあえずよろしくな」

シグナム「あ、ああ」

こうして、八神家に四人ほど居候が増えたのだった。

真夜中に蓮牙とシーナは目が覚めた。
聖華とメイはぐっすり眠っています。

リビングに明かりがついているので、二人は物音を立てないように静かに近づいた。

リビングにはシグナム達が集まって、何やら話合いをしている。

蓮牙「こんな時間に何をしているんだ？」

蓮牙が声をかけた。

シグナム「えっ!？」

驚いたシグナム達は、シーナと蓮牙へ顔を向けた。

ヴィータ「な…何もしてねーよ!」

言いながらヴィータは、持っている闇の書を背中後ろに隠した。

シーナ「?おいヴィータ。今後ろに何を隠した？」

ヴィータ「何も隠してねーよ!」

シーナに向かってヴィータは叫んだ。

シーナ「まあ落ち着け。別にソレをどうこうしようと言うワケじゃない。ただ、深刻な表情をしていたので気になっただけだ」

真剣な顔になってシーナが言った。

シーナと蓮牙の真剣な顔を見て、シグナム達は顔を見合わせた。やがてシグナムが口を開いた。

シグナム「…話を聞いてくれるか？」

シーナ・蓮牙「ああ」

シーナと蓮牙は頷いた。

シーナと蓮牙はシグナム達から闇の書についての説明を聞き終えた。

蓮牙「…なるほどな」

シーナ「つまりこの闇の書。空白の666ページ全てを埋めれば、所有者は大いなる力を得る。そういう事だな？」

ザフィーラ「そうだ」

シーナの言葉にザフィーラが頷いた。

蓮牙「しかしはやては力を欲している様子は全くないが…なんでお前らは闇の書を完成させようとしているんだ？」

シグナム「…闇の書を完成させなければ、主はやてが死ぬからです」

険しい表情でシグナムが答えた。

蓮牙「何？」

シグナム「主はやての足は病気ではなく、闇の書の呪いなのです。それは徐々に上の方に進行している。それを止めるために、私達は蒐集を行っているのです」

シグナムが説明を終える。

シーナと蓮牙も表情を陰しくした。

シーナ「自らの主を呪うとは…皮肉な話だな」

蓮牙「…聞いてくがに他の方法はないのか？」

シグナム「ありません」

シグナムは苦悶の表情で答えた。

答えを聞いたシーナと蓮牙は目を閉じて、腕を組んで考えた。しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

シーナ「わかった。私達も闇の書の蒐集に協力するでしょう」

シグナム達「えっ!!!？」

シーナの言葉にシグナム達は驚いた。

シーナ「なに、私達はこう見えて強い。今頃寝ているメイと聖華も同じだ。足手まといにならないぞ」

シャマル「あの…本当にいいんですか？」

シャマルが桂に尋ねた。

蓮牙「ホントのそこ、やり方には反対だが…はやてを助ける手段がそれしかないのなら仕方ないからな」

と蓮牙が言った。

シグナム「貴方達の協力は嬉しいが…何故そこまで？主はやてとは今日会ったばかりでは？」

シグナムが理由を尋ねた。

蓮牙「はやては素性も知れぬあたし等を家に泊め、飯まで世話をしてくれたんだ。受けた恩はきつちりと返す。それがあたしの流儀だ」

蓮牙はハッキリとそう言った。

シグナム「…わかりました。では、これからよろしく頼む」

シグナムが頭を下げて言った。

こうして話合いは終わり、シーナ達も闇の書を巡る戦いに参戦する事となった。

時空管理局本部医務室

勇斗達のはなは達と話しているとそこに黒い服と髪の執務官・クロノ・ハラオウンが入ってきた。

クロノ「神道勇斗、ちょっといいか？」

勇斗「ん、クロノ・ハラオウンか」

クロノ「クロノと呼んでもいいぞ。それでちよつといいか？」

勇斗「いいぞ。奏達は待っていてくれ」

奏「いいよ」

クロノ「じゃあ、着いてきてくれ」

勇斗はクロノの後を付いて行った。

勇斗はクロノの後ろ歩いてる。勇斗の隣にはフェイトもいる。

フェイトが、「私も一緒に行っていていいかな？」と言ってきたのだ。

特に断る理由もなかったので、同行する事になった。

クロノの案内で、勇斗とフェイトは部屋に入った。中には一人の老人が座っていた。

クロノ「グレアム提督。彼を連れてきました」

グレアム「やあクロノ。ご苦労だったね」

老人の名は、ギル・グレアム。時空管理局顧問官だ。

ふと、フェイトは勇斗の顔を見た。何故か勇斗は表情を険しくしていた。フェイトは、何故勇斗がそんな顔をしているのかわからなかった。

グレアムに促された勇斗とフェイトは、椅子に座った。

グレアム「私はギル・グレアム。君が神道勇斗君か」

勇斗「…ああ、神道勇斗だ」

勇斗は返事をした。

しかし勇斗の隣に座ってるフェイトは、勇斗の態度に違和感を感じた。

勇斗「で？俺に何の用なんだ？」

グレアム「用という程の事ではない。あの槍だけで正体不明の魔道士を退けさせた君の姿を一度見てみたくてね」

穏やかな口調でグレアムが言った。

勇斗「それだけか？もうないなら帰らせてもらう」

言いながら勇斗は立ち上がった。

クロノ「ゆ…勇斗!？」

部屋を出ようとする勇斗に、クロノが叫ぶ。

フェイト「ま…待ってよ勇斗!」

慌ててフェイトが後を追う。

二人はそのまま部屋を出てしまった。

クロノ「アイツ…！提督に対して…!!」

グレアム「いいんだクロノ。私なら気にしていない」

そう言いながら、グレアムは珈琲を一口飲んだ。

勇斗とフェイトは通路を歩いていた。

フェイト「ねえ勇斗」

勇斗「ん？」

フェイト「勇斗は…グレアム提督が嫌いなのか？」

フェイトは、さっきから気になっていた事を聞いた。

グレアム提督を見てから、勇斗の態度は少しおかしかった。

勇斗「別に嫌いとかそういうんじゃない」

フェイト「え？」

嫌いとかじゃない？じゃあどうして。

フェイトが考え込んでると、勇斗が言った。

勇斗「グレアム、あいつはどうも辛気臭いな」

フェイト「辛気臭い？」

フェイトは首を傾げた。

勇斗「まあな（過去に縛られた老人か。・・・哀れだな）」

勇斗はそう思いながら頭を掻いた。

第三話：聖祥大付属小学校

今回の『闇の書事件』も、クロノ・ハラオウンの母で現役提督・リンディ・ハラオウン率いるアースラメンバーが捜査を担当する事に決定した。

なのはも起きて、フェイトと勇斗達は、リンディ達と共に地球に赴いていた。アースラは整備中なので司令部はなのはの近所になった。

なのは「うわ?! 凄い近所だ♪」

フェイト「本当?」

なのは「うん。ほら、あそこが私の家♪」

なのはとフェイトは、ベランダから仲良く街を見ている。勇斗達は部屋の中で荷物を運んでいた。

レフィア「な…何故私達が引っ越しの手伝いをしなければ…いけないのですの?」

奏「あいつら…私達を便利屋か何かと勘違いしてんじゃないの?」

荷物を運んで、汗を流しながらレフィアが不満を言い、奏が文句を言う。

クロノ「貴方達の馬鹿力を有効に活用してるんですよ」

クロノが奏達に笑みを浮かべながら言った。

奏「レフィア。後でこの子にヤキ入れましょ」

レフィア「憂さ晴らしに的にしてくださいわ」

レイナ「どうせならサンドバッグに」

クロノ「スマン冗談だ。勘弁してくれ」

クロノは謝った。

そしてリビングで休むと、リビングにいるエイミィは、アルフとユーノを見つけた。

エイミィ「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿なんだ」

アルフ「新形態子犬フォーム！」

ユーノ「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと…」

アルフは可愛い子犬姿で、ユーノは久々のフェレット姿になっていた。

フェイト「わーアルフちっちゃい！どうしたの？」

なのは「ユーノ君もフェレットモード久しぶりー！」

フェイトは子犬フォームのアルフに驚き、なのはは嬉しそうにフェレット姿のユーノに近寄る。

アルフ「可愛いだろ♪」

フェイト「うん！」

アルフがフェイトの頬を舐める。

ユーノは、なのはに頬ずりされて苦笑している。

勇斗「成程。犬か」

アルフ「ってイヤ確かに子犬フォームだけどあたしオオカミだから
奏「自分で子犬って言った時点で犬扱いよ」

アルフ「……………」

アルフは奏の一言に沈黙する。
なのは達は苦笑いを浮かべる。

勇斗「そっちのフェレットは？」

ユーノ「あ、はい。僕はユーノ・スクライアです。はじめまして」
勇斗「神道勇斗だ。よろしくなユーノ」

勇斗はユーノと挨拶する。

クロノ「なのは、フェイト。友達だよ」
なのは・フェイト「はい！」

クロノの言葉に、フェイトとなのはは嬉しそうな笑顔になった。

すずか「こんにちは！」
アリサ「きたよ！」

玄関に行くと、金髪の少女・アリサと紫髪の少女・すずかがいた。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん」

フェイト「はじめまして……って言うのもちょっと変かな？」

すずか「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

フェイト「うん。でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

二人を見ながら、フェイトは嬉しそうに笑った。

すずか「うん！」

アリサ「私も！」

アリサとすずかも嬉しそうに笑う。

すずか「えっと…ところであなた方は？」

すずかは勇斗達に聞く。

勇斗「はじめまして、俺は神道勇斗だ」

奏「その妹の神道奏だよ。よろしく」

レフィア「私はレフィアと言いますわ」

レイナ「レイナだよ」

すずか「そうですか。あ、私は月村すずかです」

アリサ「私はアリサ・バンニグスよ」

勇斗達は挨拶した。

勇斗はすずかを見て思った。

勇斗（この子供はまだ幼いのに一族の血を引くのか…）

そう、すずかは吸血鬼の一族、通称“夜の一族”の末裔。

勇斗はすずかを見て一瞬で見破ったのだ。

すずか（何だかこの人…力を隠しているような気がする。何と言うか…神話に出てくる魔王のような…）

対するすずかも勇斗の力に気づく。

2人はそれぞれそう思ったが、とりあえず気にしないことにした。

勇斗達はリンディがなのはの両親に挨拶に行くという事で、喫茶翠屋へきていた。

すずか「ユーノ君も久しぶりだね」

ユーノ「キューキュー」

アリサ「こっちの犬も可愛い！」

アルフ「アンツ」

外のテラスでなのは達は、アルフやユーノと一緒に談笑していた。ちなみに勇斗達はというと。

勇斗「お？このケーキなかなかの出来栄えだな」

士朗「それは今回作った新作なんですよ。よかったらお一つ食べてみますか？」

奏「え？マジ！？じゃあ一口」

レフィア「このタルトもなかなかですわね」

レイナ「どれにしようかな」

翠屋のケーキに目を奪われながら、なのはの父親・士朗と仲良く話をしていた。

リンディ「……そんな訳で、これから暫くご近所になります。よろしく願います」

桃子「こちらこそ願います」

リンディと桃子が挨拶をしてる。その時、店の扉が開かれて、フェイト達が入ってきた。フェイトは両手で小包を抱えていた。

フェイト「リンディていと……リンディさん」

リンディ「はい。なあに？」

フェイト「…あの…コレ…」

戸惑いながらフェイトは、小包の中を見た。中に入っていたのは白い制服だった。

勇斗「学校の制服か？」

勇斗がフェイトの方を見た。

リンディ「転校手続き取つといたから。週明けからなのはさんのクラスメイトね」

笑顔でリンディが言った。

桃子「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。ね、なのはなのは「うん！」

桃子「良かったわねフェイトちゃん」

優しく微笑みながら、桃子が言った。

フェイト「あの…えと…はい、ありがとう…ございます」

恥ずかしがりながらも、フェイトは嬉しそうに制服の入った小包を抱きしめた。

リンディ「あと勇斗君達も手続きしときましたから」
奏「へっ？なんの？」

勇斗「……………」

勇斗達は嫌な予感がしていた。
そしてフェイトが、なのは達が通ってる小学校に転校する日。聖祥

大付属小学校。なのはのクラスはざわついていた。

先生「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさん、どうぞ」

フェイト「し、失礼します」

先生に呼ばれ、フェイトが教室の中に入ってきた。なのは達と同じ白い制服を着て、教卓の前に立った。

フェイト「あの…フェイト・テストロッサと言います。よろしくお願いします」

恥ずかしがりながらも、フェイトは自己紹介をした。クラスの皆は拍手をして、フェイトを笑顔で迎え入れた。フェイトは嬉しそうに微笑んだ。

先生「もう一つ皆さんにお知らせがあります。実は今日からしばらくボランティアにきた学生さんを紹介しますね」

他の生徒達はざわついていたが、なのはとフェイトは同じことを考えた。扉を開くとそこから勇斗と奏がやってきた。

勇斗「今日からしばらくボランティアにきた神道勇斗だ。よろしくな」

奏「同じくボランティアに来た奏だよ」

なのはとフェイトは一緒に苦笑いをしていた。2人がここにいる理由はデバイスを持っていない二人の護衛のためだった。

マンション

レフィア「そういえば、闇の書って一体どんなものなの？」

留守番をしているレフィアとレイナが、クロノと一緒に調査の手伝いをしていた。

クロノ「闇の書は魔力蓄積型のロストログア。魔導師の魔力の根源であるリンカーコアを食って、全666ページを埋めるとその魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」
エイミィ「本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻って別の世界で再生する」

クロノが説明をして、エイミィが補足をした。

レイナ「壊しても無理なの？」

レイナが尋ねた。

クロノ「ああ。様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護騎士によって守られ、魔力を食って永遠を生きる。破壊しても何度でも再生する、停止させる事ができない危険な魔導書」

クロノが険しい表情で説明した。

レフィア「なるほど、私たちがやることは完成する前に、闇の書の

主の捕獲ですね」
クロノ「そう言うことだ」

夕方

帰りでアリサやなのは達と別れたすずかは、一人で図書館にきていた。

すずか（勇斗さんか……。不思議な人だな）

勇斗のことを思いながら、本を探していると隣の人にぶつかった。

すずか「あ、ごめんなさい」

????「いや、こっちもよそ見してた」

ぶつかった人を見ると、その人は勇斗だった

勇斗「ん、すずかか？」

すずか「勇斗さん、どうしてこんな所に？」

勇斗「暇つぶしに来てただけだ」

勇斗とすずかは近くの椅子に座った。

すずか「あの、勇斗さん、ちょっといいですか？」

勇斗「なんだ？」

すずか「私勇斗さんみてて思ったんですけど、勇斗さんって……」

勇斗「人間とは違うって言いたいのか？」

勇斗の一言にすずかはビックリする。

すずか「え、いやそんなつもりじゃ」

勇斗「俺の前では誤魔化さん方がいいぞ」

勇斗の鋭い眼光がすずかを見抜く。

すずかは確信する。

この人は自分の正体を知っていると。

すずか「・・・まさか私を・・・」

勇斗「ああ、俺は勘が鋭いからな。血の匂いや特徴ぐらい分かる」

すずかの顔が暗くなる。

勇斗「安心しろ。とって喰う気はないし、秘密を漏らす気などない」

すずか「そうなんですか？」

勇斗「ああ、すずかだけじゃ不公平だから俺の正体も教えてやる」

勇斗は教える。1万年から目覚めた魔王だと。

すずか「そうですか。どおりですごい力があるなって」

すずかは納得したようだ。

勇斗「ま、仲良くしようや」

すずか「…はい！」

すずかは元気に答えた。

すると、遠くの方で車椅子の音がした。すずかは音のする方を見た。車椅子に乗ったはやてと、後ろで車椅子を引いてるシグナムとメイと蓮牙が何故かいた。

すずか「はやてちゃん!」

すずかが、はやてを呼んだ。

はやて「あっ、すずかちゃん!」

はやてもすずかに気付いた。シグナムもすずかの方に顔を向けた。するとシグナムとメイと蓮牙が勇斗に気がついた。

シグナム「なっ!」

メイ「あっ!」

蓮牙「お?」

勇斗「あ、お前ら」

勇斗も三人に気がついた。はやても勇斗に気がついた。

はやて「すずかちゃん、この人は?」

すずか「私の学校のボランティアさん」

シグナム（ボランティアって、こいつ、本当に何者なんだ?）

シグナムが考え込んでいると、メイが勇斗に近づいてきた。

メイ「勇斗さm…ゲフン、勇斗さん!」

蓮牙「おい勇斗、一体何してるんだ?」

勇斗「おまえらこそ、何でこんなところにいるんだ?」

はやて「メイさん、蓮牙さん、お知り合い?」

メイ「そうですよ」

はやて「初めまして、八神はやてです。えっと」

勇斗「神道勇斗だ。よろしく」

はやて「よろしく、勇斗さん」

はやては勇斗に向かって微笑んだ。

第三話：聖祥大付属小学校（後書き）

これからすずかと勇斗は仲良くなるな。

第四話…2度目の戦い

すずかとはやては公園のベンチに座って、楽しそうに座っていた。
勇斗達はその二人から少し離れたベンチの前にいた。

シグナム「まさか、またお前に出会うとはな」

勇斗「シグナム、もしやあのはやてって子が闇の書の主なのか？」

シグナム「……………」

勇斗の間にシグナムは黙っていた。すると蓮牙が口を開いた。

蓮牙「ああ、あの子供がお前のいう闇の書の主だ」

シグナム「蓮牙」

蓮牙「大丈夫だ、こいつは信用出来るから安心しろ」

勇斗「闇の書は完成させると力が手に入るって聞いた、だがはやてのやつは何か力を欲しているようには見えないが…」

シグナム「……闇の書を完成させなければ、主は死んでしまうからだ」

険しい表情でシグナムは答えた。

勇斗「あいつが、死ぬ？　どういうことだ。」

勇斗はシグナムを見る。今あんなに元気に笑っているはやてが死ぬようには見えなかった。

メイ「はやてちゃんの足は病気じゃなくって、闇の書の呪いなんです。その呪いは日が経つに連れて体中を蝕んでいくの。それを止めるためには闇の書を完成させる必要があるんです」

シグナム「そのために、我々は蒐集しているんだ。だから今は管理局員には黙っていてくれ」

シグナムは勇斗に頭を下げた。今この場で勇斗と戦うとはやてに被害が及ぶかもしれない。

勇斗「頭を下げるな。今俺らが管理局にはやての事を言っても、あいつは救われない。救うためにはあのやり方しか無い。それがはやてに悲しい思いをさせることになるが、あいつの笑顔がなくなるのはご免だ」

シグナム「勇斗」

勇斗は力強い瞳でシグナムに向かっていった。
するとはやてとすずかが近づいてきた。

すずか「勇斗さん、どうしたのですか？」

勇斗「いや、何でもない。それでどうした？」

すずか「私、そろそろ帰ります」

勇斗「そうか」

シグナム「主はやて、我々も」

はやて「そやな、それじゃあ、勇斗さん。またな」

そう言って、はやてとシグナムとメイと蓮牙は帰っていった。

勇斗「八神はやて…か」

勇斗はクロノたちのマンションに戻った。

部屋に戻るとなのはとフェイトが一緒にいた。

フェイト「あ、勇斗」

勇斗「おう、なのはも一緒みたいだが、なにかあったか？」

勇斗の間にフェイトとなのはは嬉しそうに言った。

なのは「レイジングハートとバルディッシュが戻ってきたの」

フェイト「新しい機能もついてるって」

勇斗「ほうくよかったな。奏とレフィアとレイナはどうした？」

フェイト「奏はレイナといっしょにどっかへ出かけたよ。レフィアさんはクロノといっしょだけど」

奏「あ、お兄ちゃん、おかえり」

レイナ「勇斗、おかえり」

勇斗「ああ…」

突然、室内に緊急警報機が鳴り響いた。

エイミー「至近距離で緊急事態発生！」

エイミーが皆に叫んだ。

奏「例の守護騎士ってやつかしら？」

エイミー「うん、みんなお願い出来る？」

なのは「はい」

勇斗「さて、あいつらはどんなことをするんだ？」

エイミー「皆お願いね」

勇斗達は現場に向かった。

海鳴り市 結界内

街の上空にヴィータとザフィーラ、それに二人を取り囲む十人の管理局の魔導師がいた。更に結界も張ってある。

ザフィーラ「管理局か」

ヴィータ「でもチャライよ、コイツら。返り討ちだ！」

ヴィータがグラーフアイゼンを構える。すると魔導師達は、一斉にヴィータ達から離れた。

ヴィータ「え？」

魔導師達の行動に、ヴィータは訝しげる。

ザフィーラ「上だ！」

上を見てザフィーラが叫んだ。ヴィータも上を見た。上空に無数の青い魔力の刃があった。無数の刃の中心に、クロノがいた。

クロノ「ステインガーブレイド！エクスキュージョンシフト！！」

クロノは杖を振り下ろし、魔力の刃の雨がヴィータとザフィーラに降り懸かる。

ザフィーラ「ちっ！」

ザフィーラがヴィータの前で障壁を張る。障壁に無数の刃の雨がぶつかり、青色の爆発が起きた。

クロノ「…少しは通ったか？」

煙が晴れてきて、ザフィーラ達の姿が見えてきた。ザフィーラの左腕に、数本の刃が刺さっていた。

ヴィータ「ザフィーラ！」

ザフィーラ「気にするな。この程度でどうにかなる程…ヤワじゃない！！！」

ザフィーラは、腕に力を入れて刃を破壊した。

ヴィータ「上等！」

ヴィータは上空にいるクロノを睨んだ。クロノも杖を構える。その時、エイミーから通信が入った。

エイミー「クロノ君、現場に助っ人を転送したよ」

クロノ「え？」

クロノは視線をヴィータ達から外した。屋上を見ると、フェイトとなのは、勇斗達がいた。

ヴィータ「あいつら」

ザフィーラ「この前の奴らもいるな」

ヴィータとザフィーラは勇斗達を見た。

なのは「レイジングハート！」

フェイト「バルディッシュ！」

なのは・フェイト「セーットアップ!!」

なのはとフェイトは、待機モードのデバイスを上に掲げた。

なのは「レイジングハート・エクセリオン!!」

フェイト「バルディッシュ・アサルト!!」

二人は自分のデバイスの新しい名前を叫んだ。二人の体が光に包まれ、新しいバリアジャケットを身につけ、生まれ変わったデバイスを手に持つ。

ヴィータ「あいつらのデバイス……アレってまさか!？」

二人のデバイスを見て、ヴィータは驚いた。二人のデバイスに新たに付けられたのは、カートリッジシステムだった。

フェイト「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

なのは「どうして闇の書を完成させようとしてるの？」

フェイトとなのはがヴィータ達に尋ねた。

ヴィータ「あのさあ、ベルカの諺にこういうのがあんだよ」

腕を組みながら、ヴィータが言った。隣にいるザフィーラが、ヴィータを見た。

ヴィータ「和平の使者なら槍は持たない」

それを聞いたなのはとフェイトは、顔を見合わせて首を傾げた。勇

斗達も、わからないと言う風に首を傾げた。

ヴィータ「話合いをしようってのに、武器を持ってやって来る奴がいるか馬鹿って意味だよ。バカ！」

なのは「なっ!?! い、いきなり有無を言わず襲い掛かって来た子がそれを言う?」

ヴィータの言葉に、なのはが反論した。勇斗達も頷く。

ザフィーラ「それにソレは諺ではなく、小話のオチだ」

ザフィーラがヴィータにツツコんだ。

ヴィータ「うっせー! いいんだよ細かい事は!」

ツツコまれてザフィーラに怒鳴る。

レフィア「あのこ私達より年上そうなのに子供ですわね」

勇斗「レフィア、何時から来たんだ?」

レフィア「ついさっきですわ」

ヴィータ「何だ? あの変な赤髪は?」

レイナ「あのちっちゃい子变って言ってるよ」

ヴィータ「おい、その奴。誰がちっちゃい子だ」

レイナ「だってどう見ても…ねえ」

ヴィータ「てめえ、ぶっ叩くぞ」

レイナとヴィータが怒鳴り合っていると、急にピンク色の雷が落ちた。そこにはシグナムがいた。

勇斗「派手に登場のしかただな」

なのは「ユーノ君、クロノ君。手を出さないでね。私あの子と一対一だから！」

ヴィータを見ながら、なのはが言った。なのはの言った言葉が気に入らなかったのか、ヴィータはなのはを睨みつけた。

フェイト「うん、私も」

シグナムを見つめながらフェイトは言った。

勇斗「俺達は手を出さないぞ。行ってこい」

フェイトは頷き、シグナムのところに向かった。

アルフ「じゃあ、私はあの野郎を相手するよ」

勇斗「前回の借りを返すのか」

アルフ「まあね」

そして、それぞれの戦いが始まった。

ヴィータ「でええええい！！」

ヴィータがグラーフアイゼンで、なのはに攻撃する。なのはは障壁を張って防御する。障壁は以前より硬く、グラーフアイゼンの攻撃を防いだ。なのははアクセルシューターを使って、ヴィータを追い詰める。

フェイトとシグナムも激しい空中戦をしていた。バルディッシュとレヴァンティンが火花を散らせてぶつかり合う。フェイトが、複数の金色の魔力の槍『プラズマランサー』を放つ。それをシグナムは、レヴァンティンの炎で掻き消す。

空中でアルフとザフィーラは、互いに拳をぶつけ合って戦っていた。ザフィーラ（状況はあまりよくないな。言われた通りあの者たちは観察しているだけだから避けられた。だが魔導師達のデバイスが強化されていて、シグナム達も苦戦している）

ザフィーラは表情を険しくした。

勇斗「やるなあいつら」

奏「やるね、なのはちゃん」

レフィア「そこそこの実力ですわね」

レイナ「みんなグルグル飛んでるね」

聖華「やりますね、彼女達も」

シーナ「こりゃ将来大物になるな」

メイ「どちらも引けを取ってません」

蓮牙「何時か手合わせ願いたいな」

気がつくと屋上の扉の前に聖華とシーナとメイと蓮牙がいた。

勇斗「お前らか」

奏「んなっ！？いつの間にここにいるのよ！」

蓮牙「そう言うな。だがその前に一つ言いたいことがある」

勇斗「なんだ」

聖華「シグナム達を逃がしてほしいんです」

結界の外

シャルは屋上から様子を見ている。

シャル（私の力じゃこの結界は破れない…）

シャルは闇の書を使って、結界を破るか迷っていた。今日は、はやてちゃんとの大事な約束がある。ソレを護るためにも、一刻も早く結界を破って離脱しなければいけない。その時、背後に気配を感じた。

クロノ「搜索しているロストロギアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します」

シャルの背後で、杖を突き付けて言ったのはクロノだった。その時、乱入者が現れた。突然現れた仮面を付けた男が、クロノを蹴り飛ばした。クロノは隣のビルの屋上まで飛ばされた。

クロノ「な…仲間!？」

クロノは仮面の男を睨みつけた。

シャル「あ…貴方は？」

シャルが仮面の男に尋ねた。

仮面の男「使え」

シャル「え？」

仮面の男「闇の書を使って結界を破壊しろ」
シャル「でもアレは…！」

シャルは闇の書を使う事を戸惑った。

仮面の男「使用して減った頁はまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かろう」

少し戸惑ったが、仮面の男の言葉でシャルは、闇の書を使う事にした。

シャル（みんな、闇の書で結界を破壊するわ！うまくかわして撤退を！）

シャルが念話でシグナム達に伝えた。

シグナム「くっ、皆撤退の準備を」

勇斗「大切な約束？」

メイ「そうです、今日はすずかって子が来るんですけど、ほら、こはやっぱりみんな一緒の方がいいんじゃないでしょうか」

レフィア「ですが、彼女らは一応悪役ですけども」

勇斗「そうだな、勝手に結界を破壊するのは駄目。遅れさせるのも駄目。・・・ならやることは・・・」

蓮牙（シャル、闇の書を使うのを待て）

シャル「え、蓮牙さん。どうしてここに？」

蓮牙（細かいことはいい、今からあいつが破壊する）

勇斗と蓮牙は結界の壁の近くにいた。

勇斗「いくぞ」

勇斗は右手で蓮牙に殴りかかろうとしたが、蓮牙はあっさりと避けた。

勇斗の右手は結界に当たると、結界は見事に砕けた。

勇斗「あ、やっちゃった」

結界はヒビは入り、砕け散った。ヴィータ達は、結界が破壊された事を確認した。

ヴィータ「ヴォルケンリッター『鉄槌の騎士』ヴィータ。あんたの名は？」

なのは「なのは。高町なのは」

互いに名を名乗った。

ヴィータ「高町なぬ……なの……えーい、呼びにくい！」

なのは「逆切れ!？」

ヴィータ「ともあれ勝負は預けた。次は殺すからな! ぜってーだ!」

そう言い残して、ヴィータは離脱した。

なのは「あ…えっと…ヴィータちゃん!」

ザフィーラ「悪いが我も離脱する。勝負はお預けだ」
アルフ「あっ！」

ザフィーラも離脱した。

アルフ「もう！勇斗！何で結界を破ったんだい！？」

アルフは結界を破った勇斗に怒った。

シグナム「すまん、テストロッサ。この勝負預ける」
フェイト「シグナム！」

シグナムもフェイトから離れた。フェイトは勇斗の方に向かった

フェイト「勇斗、何してるの？」

勇斗「悪い、あいつらの仲間みたいな奴がいて、戦ってたんだが、間違っって結界壊しちゃった」

悪びれた様子なく勇斗は答えた。

第四話：2度目の戦い（後書き）

誰か感想が来るのをお待ちしております。

第五話：束の間の休息

戦闘が終わった後、勇斗達はリンディに呼ばれ、リビングに集まっていた。

リンディ「まったく。どうして結界を破ったんですか？」

リンディがため息をつきながら、勇斗達に尋ねた。

勇斗「すまん。敵が張った結界だと思って、間違えて壊してしまっ
た」

謝る勇斗だが、反省してる様子は全く伺えない。

クロノ「貴方の無茶苦茶な行動はいいとして：周りの貴方達は彼を
止める事が出来たはずだ！どうして結界を破壊させたんですか！？」

今度はクロノが尋ねた。

奏「いやゝごめんねゝ」

奏が頭を下げて謝った。が、こちらも反省の色が全くない。

シグナム「なるほど、彼に協力してもらったのか」

メイ「はい、お陰で間に合ったですね」

シャマル「シーナさん、聖華さん、メイさん、蓮牙さん、ありがとうございますね」

シーナ「私は何もしてないぞ」

八人は扉を開けるとはやてとすずかりビングで待っていた。

はやて「おかえり、皆一緒やったんだね。」

シャマル「ええ、ばったり会ってね。すずかちゃんこんばんわ」
すずか「あ、お邪魔してます。」

その後、はやてとすずかとヴィータは一緒にお風呂に入っていた。
シグナム庭に出て星を見ていた。

シーナ「よかったな。間に合って」

シグナム「シーナか、感謝する。主の大切な約束のためにあんなことを…」

シーナ「いや、私ではなく蓮牙が『約束を破るのは駄目だっ!』ってうるさいからな。それにしてもすずかって優しいんだな」

シグナム「やさしいとは?」

シーナ「はやての足の事何か気にせずにああいうふうに接してることだ」

シグナム「…そうだな」

シーナ「そういえば、闇の書一回見せてもらっていいか?」

シグナム「いきなりどうしたんだ?」

シーナ「ちょっと気になるからな」

シグナム「ああ、いいだろう」

そう言って、シグナムはシーナに闇の書を渡した。

シーナ（意外と普通……？）

その時、シーナは闇の書から微かに鼓動を感じた。

シーナ「なあ、闇の書って、何か鼓動とか感じるのか？」

シグナム「？いや特にそのような事はないが」

もう一回触ってみたが、鼓動が感じなくなった。

シーナ（気のせいならいいのだが・・・）

翌日

聖祥小学校。なのはのクラス。

授業が終わって帰りの時間。教室に、フェイト、なのは、すずか、アリサがいた。

フェイトの手には、様々な種類の携帯電話が載ってる本があった。

フェイト「な…なんだか、いっぱいあるね」

アリサ「まあ最近はどれも同じような性能だし、見た目を選んでいいんじゃない？」

とアリサが言った。

なのは「でも、メール性能がいいヤツがいいよね」
すずか「カメラが綺麗だと、いろいろ楽しいんだよ」

なのはとすずかも、それぞれの意見を言った。

フェイト「ん」

フェイトは真剣な表情で、どれにするか迷ってる。
そこへ、

勇斗「何やってるんだ？」

勇斗と奏がやってきた。

すずか「あっ、勇斗さんに奏さん！」

なのは「フェイトちゃんの携帯電話をどれにするか、みんなで相談してたんです」

勇斗「携帯電話？」

なのは達の言葉に、勇斗は聞いてみる。

アリサ「やっぱり色とデザインが大事でしょう」

なのは「操作性も大事だよ」

アリサとなのはが意見を言い合う。

勇斗「ふむ、どれ、俺がフェイトの携帯を探してやるか？」

フェイト「え！？いいの？」

勇斗「ああ、お？こいつがいいか」

勇斗が一つの携帯を指差す。

それは黒色をベースに稲妻のマークがある携帯だった。
しかし値段はと言うと、

アリサ「うわっ、これ高いじゃない！」

すずか「確かにフェイトちゃんなら似合うかもしれないけどこれは
ちょっと・・・」

勇斗「そうか？ やっぱ子供には高すぎるもんか？」

勇斗が少し悪戯気味な顔で言う。

フェイト「あはは、でもやっぱ高いから別のにしようかな」

勇斗「ほれ」

勇斗がフェイトに紙きれを渡した。

それは何と1万円札だった。

しかも20枚。

フェイト「え！？これって…」

アリサ「に、20万円ですって!？」

なのは「ゆ、勇斗さん！いいんですかこれ!？」

なのは達は驚きながら聞く。

勇斗「ああ、そいつはあまりもんだからな。好きに使っていいぞ」
奏「だからって調子に乗って買いすぎたりしないようにね」

奏がなのは達に注意する。

フェイト「ありがとう勇斗！大事に使うよ！」

勇斗「ああ」

フェイトはお礼を言った。

勇斗「さて、レフィアはなにをしてるんだか」

勇斗はポケットから漆黒色で龍の印が付いた携帯を取り出す。

すずか「わあ、勇斗さんの龍の印がある」

アリア「うわー、違和感がないわ」

なのは「かっこいいかも」

フェイト「うん、私もそう思う」

なのは達が勇斗の携帯のことを話しているが、勇斗はそんなことなど気にしなかった。

時空管理局本局。

ユーノとクロノ、エイミィは通路を歩いていた。

ユーノ「じゃあ僕は闇の書について調査すればいいんだね」

クロノ「ああ、これから会う二人は、その辺に顔がきくから」

そして三人は部屋の中に入った。

部屋には猫の耳と尻尾を持った、二人の女性がいた。

クロノ「リーゼ。久しぶりだ。クロノだ」

クロノが挨拶した直後、

ロッテ「わぁお！クロすけ、お久しぶりぶり〜！」

いきなりロッテが、クロノの顔を胸の方に抱き寄せた。

クロノ「ロッテ！離せコラ！」

ロッテ「何だとコラ！久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ〜」

クロノが抵抗するが、ロッテから逃げられない。

クロノ「アリア！これを何とかしてくれ！！」

アリアに手を伸ばして、クロノは助けを求めた。

だが、

アリア「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない。それに、満更でもなさそうだし」

と、あっさり見捨てられた。

クロノ「そんな訳ないだ…」

ロッテ「ニャー！！」

クロノが言いかけた所で、ロッテがクロノを押し倒して何かいろいろやっている。

ユーノは呆然とその様子を見つめて、エイミーはアリアと会話をしながら見ている。

やっと騒ぎが落ち着き、クロノは二人に事情を説明した。

ロツテ「ああ、なるほど闇の書の搜索ね」

アリア「事態は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」

話を聞いた二人は、協力を承諾した。

クロノ「よろしく頼む」

クロノは協力してくれる事に礼を言った。

するとユーノが、隣に座ってるエイミィに小声で話し掛けた。

ユーノ「エイミィさん。この人達って？」

エイミィ「クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様たち。魔法教育担当のリーゼ・アリアと近接戦闘教育担当のリーゼ・ロツテ。グレム提督の双子の使い魔。見ての通り、素体は猫よ」

エイミィが二人を紹介した。ロツテが笑いながらユーノに手を振ると、ユーノは苦笑いしながら手を振り返した。

クロノ「実は、彼の事で頼みがあるんだ」

ロツテ「食っていいの!？」

クロノが言った瞬間、ロツテはユーノを見た。フレットに変身できるユーノから、鼠の匂いでも嗅ぎつけたのか。ユーノは怯えている。

クロノ「ああ。作業が終わったら好きにしてくれ」
ユーノ「なっ!?!おい!ちよつと待て!」

クロノの言葉に、ユーノは慌てて立ち上がる。
その姿にみんな笑ってしまった。

アリア「それで頼みて?」

アリアがクロノに尋ねた。

クロノ「彼の無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

世界の全ての書籍やデータが納められてる超巨大データベース『無限書庫』。

そこでユーノ達は、闇の書の情報を集める事にしたのだ。

勇斗はフェイトの携帯電話を購入して、途中で食材の買物をしてマ
ンションに戻った。

エイミイ「たっだいま!」

しばらくしてエイミイが帰ってきた。

エイミイ「艦長、本局に出掛けちゃった?」

フェイト「うん。アースラの武装追加が済んだから試験航行だって」

エイミイの問いに、フェイトが答えた。

エイミイ「武装って言うと、アルカンシエルか。ふう。あんな物騒な物、最後まで使わずに済めばいいんだけど」

ため息をつきながらエイミイが言った。

なのは「クロノ君もいないですし。戻るまではエイミイさんが指揮代行だそうですよ」

と、なのはが言った。

勇斗「ん？エイミイが指揮代行？大丈夫か？」
奏「責任ジューダイだね！」

勇斗と奏が、からかうように言った。

エイミイ「ふっ、まあそれも物騒といえば物騒かな。まっ、とはいえ早々非常事態なんて起こるわけが…」

エイミイの言葉が言い終わらない内に、警報が鳴り響いた。
レイナが口を開いた。

レイナ「エイミイ。非常事態、起きたね…」
エイミイ「…マジで…？」

呆然となってエイミイが呟いた。
とりあえず勇斗達は、司令室に向かった。モニターを見ると、シグナムとザフィーラが映っていた。

エイミィ「文化レベル0。人間は住んでない砂漠の世界だね。境界を張れる局員の集合まで最速で四十五分。むく、まずいなあ」

困った顔をするエイミィ。

フェイトとアルフはジッと画面を見つめ、顔を合わせると頷いた。

フェイト「エイミィ。私が行く」

フェイト「あたしもだ」

二人は出勤を申し出た。

エイミィ「うん、お願い。」

エイミィは了承した。

エイミィ「念のために、勇斗さんも一緒に行ってくれろ?」

勇斗「俺か?仕方ないな」

勇斗は了承した。

第五話：束の間の休息（後書き）

フエイトがやられるあのシーン・・・それと勇斗はいいセンスしてるな。

第六話…卑怯者には鉄槌を

砂漠の世界

シグナムは巨大な蛇のような生物と戦っていた。

シグナム「少々厄介な相手だな」

シグナムがカートリッジをロードしようとした時、背後に巨大蛇の尻尾が出現した。

シグナム「はっ！」

シグナムは、巨大蛇の尻尾から現れた触手に捕まってしまう。

シグナム「く…しまった」

巨大蛇がシグナムを睨む。巨大蛇の触手がシグナムを締め付ける。

シグナム「ぐう…うわぁ！」

締め付けられ、シグナムが悲鳴を上げる。巨大蛇が、先端の尖った尻尾をシグナムに突き刺そうとする。

その時、数本の金色の魔力刃が巨大蛇に突き刺さり、シグナムを縛る触手も切った。シグナムは上を見た。そこには、金色の魔法陣を展開してるフェイトがいた。

フェイト「ブレイク！」

フェイトの言葉と共に、魔力刃が爆発して巨大蛇を倒した。

ザフィーラは、爆発音がした方を見つめた。

アルフ「ご主人様が心配かい？」

ザフィーラは声がした方を見た。そこにいたのはアルフだった。

ザフィーラ「お前か」

ザフィーラとアルフが睨み合う。

ザフィーラ「シグナムは我らの将だが、主ではない」

睨み合ったまま、ザフィーラとアルフは構える。

フェイトにやられた巨大蛇は、砂の中に逃げていった。フェイトとシグナムが空中で対峙する。その時、

エイミー「フェイトちゃん！助けてどうするの！捕まえるんだよ！」

エイミーが通信で怒った。

フェイト「あっ、ごめんなさい。つい…」

フェイトはエイミーに謝った。

シグナム「礼は言わんど、テストロッサ」

フェイト「お邪魔でしたか？」

シグナム「蒐集対象を潰されてしまった」

言いながらシグナムは、カートリッジをロードする。

フェイト「まあ、悪い人の邪魔が私の仕事ですし」

シグナム「そうか…悪人だったな、私は」

司令室では、ヴィータの姿を確認した。

エイミィ「本命はこっち。なのはちゃん！」

なのは「はい！」

エイミィの言葉に、なのはは頷いた。

その頃勇斗は、

勇斗「これで俺を殺そうとするとは、舐められたもんだな」

勇斗の周りには巨大蛇の死体があった。それも3体。

勇斗「さて、フェイトを探すか」

勇斗は先に行ったフェイトを探しに行った。

なのははヴィータと対峙していた。何とかヴィータの話を聞こうとするが、ヴィータは話す気はないらしい。ヴィータは赤い魔力球を出した。グラーフアイゼンで赤い魔力球を碎き、赤い閃光を放つ。閃光で目くらましをして、ヴィータはなのはから離れた。転送魔法で離脱するためだ。だが、ここで予想外の事態が起きた。遠くにいるなのはが、レイジングハートをヴィータに向けて魔力を溜めているのだ。

ヴィータ「まさか…！撃ってくるのか！？」

ヴィータは、なのはの射程距離を見誤ったようだ。なのはのレイジングハートから、桜色の閃光が放たれた。閃光は真っ直ぐにヴィータに迫る。閃光が当たり、爆発した。煙が晴れていく。煙の中から、障壁を張った仮面の男が姿を現した。

ヴィータ「あ…あんだ…」

仮面の男の後ろにいるヴィータは戸惑っている。なのはも驚いている。仮面の男は、ヴィータに少し顔を向けた。

仮面の男「行け。闇の書を完成させるのだ」

フェイトとシグナムの激闘は続いていた。フェイトはスピードを活かした攻撃を繰り返し、シグナムは剣と鞘を巧みに操って攻撃を防ぎ、反撃する。両者は、一旦距離を離して動きを止めた。二人とも息が乱れている。

シグナム（流石に速いな……目で追えない攻撃が出てきた）

フェイト（今はスピードで翻弄してるけど、長くは続かない）

両者は、次の一撃で勝負を決めようとする。

シグナム「強いな、テストロッサ。それにバルディッシュも」

フェイト「シグナムとレヴァンティンも」

二人は、互いの強さを認め合う。シグナムはレヴァンティンと鞘を構える。フェイトもバルディッシュを構える。

フェイト（この人に勝ちたい。だから全力を尽くす！）

二人が動き出そうとした瞬間、ヤツが……仮面の男が現れた。仮面の男は、背後からフェイトのリンカーコアを取り出した。

フェイト「え……？」

フェイトは呆然となって、自らの体を貫いてる腕を見た。

シグナム「貴様!!」

シグナムが仮面の男に向かって叫ぶ。だが仮面の男はそんな事、気にも止めない。

仮面の男「さあ、奪え」

仮面の男が、フェイトのリンカーコアを差し出す。

シグナムは、仮面の男を睨んだ。

確かに、主はやてのためにもリンカーコアは必要だ。だが、こんな形で手に入れる事は望んでいない。

仮面の男「どうした？早く奪え」

仮面の男が、シグナムにリンカーコアを奪うよう促した時、

グワシッ！

誰かが仮面の男の頭を鷲掴みにした。

それは巨大蛇を3体倒した勇斗だった。

シグナム「勇斗！」

シグナムが勇斗に駆け寄ろうとしたら、勇斗からとてつもない殺気を感じた。

勇斗の目はまるで獣が獲物を狙うような目をしていた。

勇斗「おい」

勇斗は掴んだまま仮面の男に言った。

勇斗「テメエのような隠れて襲う卑怯者には、鉄槌を受けなければならんな！」

仮面の男「グハッツツ！！」

仮面の男は顔面をぶん殴られた。

その力はまるで巨大岩をぶつけられたようだ。

仮面の男「グ…何と言う力だ…！？」

そして飛ばされた仮面の男は立ち上がろうとする。

しかし体中がガタガタ震えて立ち上がり辛くなっている。

仮面の男「ば…馬鹿な！？…あ…足にまで…来ている…だと！？」

顔面を殴られたことが体全体にまで影響したことに驚く仮面の男。

勇斗「どうした？立てないのか？」

ドス黒い殺気と重圧プレッシャーの混ざった声が聞こえ、仮面の男はビクツと震えた。

顔をあげると、目の前に魔王ゆうじがたっていた。

魔王は仮面の男を片手で持ち上げて、

勇斗「何も手出ししなければひどい目にあわずに済んだのになあ？」

どす黒い声と殺気を仮面の男に声をかけると仮面の男は恐怖に支配された。

勇斗「・・・死ね」

バガツ！！

仮面の男「ゴハッ！！」

仮面の男はぶっ飛ばされた。

飛ばしてもそれを許さない勇斗は追撃を行い、重いラッシュを浴びせる。

仮面の男「グああっ！！」

またもぶっ飛ばされ、追撃を止めない勇斗に障壁を張るが、今度は一撃ではなく、連打を繰り返す。仮面の男は障壁と両腕で辛うじて防御する。

仮面の男（な…なんてスピードとパワーだ！！本当に人間か！？なんて無茶苦茶な攻撃だ！！）

まさに防戦一方。

仮面の男は勇斗の猛攻を受けて、反撃する事が出来ない。

勇斗は、容赦のない猛攻を続ける。

勇斗「俺を怒らせたことを後悔するがいい」

勇斗は、拳を思いっきり振り下ろす。

障壁と両腕の防御を破って、仮面の男の頭に当たった。

仮面の男「ぐあ…！！」

仮面の男は、なんとか意識を繋ぎ止める。

ここで倒れたら計画が水の泡だ。逃げなくては。この男には、どうやっても勝てない。強すぎる。今はとにかく逃げるんだ。

仮面の男は勇斗から離れて、拳を振り上げた。

仮面の男「はあっ!!」

砂漠の地面に拳を振り下ろし、砂を巻き上げた。

勇斗「姑息な…」

勇斗は羽で顔を覆い、開けると仮面の男はいなくなった。転送魔法か何かで逃げたらしい。

勇斗「…まあいい、俺の覇道を邪魔するなら容赦はしないぞ? クソ猫が…」

そしてシグナムとフェイトの方を向いた。

勇斗「フェイトは無事か?」

勇斗はシグナム達に駆け寄った。

シグナム「心配ない。気を失っているだけだ」

シグナムが勇斗に言った。

勇斗「そうか…」

フェイトが無事で、勇斗はとりあえず安心した。

勇斗は、シグナムからフェイトを受け取る。

シグナム「では勇斗。私はもう戻る。いつまでも此処にいたら管理局の連中がくるからな」

シグナムは、いつもの表情に戻って勇斗に言った。

勇斗「ああ、あいつらがいるから安全だと思うがな」

勇斗は返事をした。

勇斗の返事を聞いた後、シグナムは去っていった。砂漠には勇斗とフェイトだけが残った。

勇斗「・・・さて、あの道化師の野望もここまでにしてやるか」

しばらくしてアルフがやってきて、帰ることにした。後でエイミィに、シグナムを逃がした事で怒られたが、勇斗はそれを可憐にスルーした。

第六話：卑怯者には鉄槌を（後書き）

勇斗の怒りにふれちゃった！さて、次回はどのようなやら。

第七話…身近な真実

会議室。

勇斗達やリンデイ、クロノ、なのは達が集まっている。その中には、グレアム提督の使い魔のロッテもいた。

エイミィ「勇斗君達が出動してしばらくして、管制システムがクラッキングであらかたダウンしちゃって…それで指揮や連絡が取れなくて…ごめんね。私の責任だよ」

エイミィが皆に謝った。

ロッテ「んなことないよ。エイミィがすぐシステムを復帰させたから、アースラに連絡が取れたんだし、仮面の男の映像だって残せた」

ロッテがエイミィを励ましながら、仮面の男の映像を出した。

リンデイ「でもおかしいわね。向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに、それを外部からクラッキングできる人間なんているものなのかしら」

エイミィ「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて…ユニットの組み替えはしてるけど…もっと強力なブロックを考えなきゃ」

リンデイの疑問にエイミィも意見を言った。

なのは「それだけ凄い技術者がいるって事ですか？」

なのはが尋ねた。

二人の話の内容は、なのはには複雑だったが、大変な事だという事はわかった。

一方、勇斗はイラついていた。

これだけの人数がいて何故誰も『内部犯行』を思いつかないのか。フェイトが被害に遭った事で、勇斗は少し熱くなっていた。多分仮面の男は、管理局内部に仮面の男、もしくははその仲間がいるかもしれないから、余計な事は言わないつもりだったが、我慢できなかった。

勇斗「あのなあ」

勇斗が頬杖をつきながら口を開いた。
皆の視線が勇斗に集まる。

勇斗「内部犯行だって誰も思わないのか？」

イラついた声で勇斗が言った。

クロノ「内部犯行だって!？」

クロノが驚きの声を上げた。

他の皆も驚いている。

勇斗「あいつが普通の犯罪者でも、システムのクラッキングも楽に出来るわけがない。エリートでもそうだ。・・・管理局内部の人間なら話は別だ」

リンディ「そんな…管理局の人間が……」

勇斗の意見に、リンディは驚きを隠せなかった。

他の皆も信じられないと言った顔をしている。どうやら本当に誰も、内部犯行を考えていなかったようだ。その事に勇斗は少し呆れた。

リンディ「…だけど…どうして管理局の人間が、捜査の邪魔をして闇の書の完成の手助けを？」

リンディが勇斗に尋ねた。

勇斗「さあな。…一つの仮説だが、そいつは闇の書に執着を持つものかも知れんがな」

ため息をつきながら、勇斗は答えた。

リンディ「そうですか…アレックス。アースラの航行に問題はないわね？」

アレックス「ありません」

リンディ「うん。では予定よりも少し早いですが、これより司令部をアースラに戻します」

アレックスに確認してリンディが言った。

リンディ「各位は所定の位置に」

全員「はい！」

リンディの言葉に、勇斗達以外の全員が応える。

奏「ところでクロノ」

クロノ「ん？」

奏に呼ばれ、クロノは顔を向けた。

奏「あの人、誰？」

ロッテを指差しながら、奏が尋ねた。

クロノ「リーゼロッテ。僕の師匠で、グレアム提督の双子の使い魔だ」

クロノが答えた。

勇斗はそれを聞いた考え込んだ。

勇斗（グレアムの双子の使い魔…双子…仮面の男…ハッキング…内部犯行……やはりそうか）

勇斗は仮面の男の謎を解いた。

翌朝

八神家

シグナム達は、朝早くにリビングに集まっていた。

シーナ「あの仮面の男が現れたのか？」

話を聞いたシーナが聞いた。

シグナム「ああ」

シグナムは頷いた。

シャル「助けてもらったって事で…いいのかしら…？」

戸惑いながらシャルが言った。

シグナム「…だが、私は仮面の男のやり方は気に入らない」

シグナムが嫌悪感を露にして言った。

蓮牙「そうだな。あたしも気にいらねえ」

蓮牙も嫌悪感を抱く。

その時、はやての部屋からガシャンと何かが倒れる音がした。シグナム達は、すぐにはやての部屋に駆け付けた。

部屋の中ではやては、苦しそうに胸を押さえながら倒れていた。

ヴィータ「はやて…!!」

ヴィータがはやての名を叫ぶ。

聖華「シグナムさん！救急車を呼んでください！」

シグナム「ああ！」

聖華に言われ、シグナムは電話で救急車を呼ぶ。

タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

病院

石田先生「もう大丈夫みたいね。良かったわ」

はやての治療を担当している、石田先生は安心した。はやては病室のベッドにいて、今は落ち着いた様子をしている。シーナ達とシグナム達は一緒に病院に来ていた。ザフィーラは家で留守番をしている。

はやて「はい。ありがとうございます」

はやてが石田先生にお礼を言う。

メイ「いきなり倒れたからビックリしましたよ」

はやて「せやから、ちょい目眩がして胸と手がツツただけって言うたやん。もう、皆して大事にするんやから」

メイ「いやいや、あの様子を見たら誰でも焦ります！」

シグナム「はい。何かあってからでは遅いですから」

メイとシグナムが言った。闇の書の侵食が進んでいる。どうやらあまり時間は無いようだ。

石田先生「まあ来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりしてたってね」
はやて「はい」

石田先生の言葉に、はやては返事をした。

石田先生「さて、シグナムさん、シャルさん。ちょっと……」

石田先生が二人を呼んだ。恐らく入院の話とかならう。三人は病室を出た。石田先生との話で、はやては入院することになった。

その夜、勇斗は聖華から電話を受けた。

勇斗「はやてが入院だど？」

聖華「はい、症状はまだ大丈夫ですので今のところは」

勇斗「・・・闇の書か」

勇斗は頭を抱えた後言った。

勇斗「実は仮面の奴らの正体ともくろみを掴んだ」

聖華「と言うことは闇の書を？」

勇斗「十中八九、まずは先手を打たねばならないな」

聖華「分かりました。勇斗様も気を付けて」

勇斗はああ、といって電話を切った。

勇斗「・・・さて、奴らはどう動くか？」

第七話：身近な真実（後書き）

感想が来るのを待っています。

第八話：悲劇のクリスマス

12月23日。

すずかはメールを打っていた。

『明日の終業式の帰りの件。みんな大丈夫ですか？』

メール送信。

『はやてにプレゼントを渡しに行くんだよね』

と、フェイト。

『でも、内緒で行って大丈夫かな？』

と、なのは。

『まっ、もし都合が悪かったら、石田先生に渡してもらえばいいし』

と、アリサ。

『それじゃ、勇斗さん達も誘って、また明日ね。おやすみ』

最後にすずかが送信して、メールのやり取りは終わった。

12月24日。はやての病室。

シグナム、シヤマル、ヴィータがお見舞いに来ていた。シーナ達も一緒だ。ザフィーラは家で留守番をしていた。

ヴィータ「はやて…ごめんね。あんまり会いに来れなくて」
はやて「ううん。元気やったか？」

ヴィータ「めっちゃめっちゃ元気！」

はやてがヴィータの頭を撫でて、ヴィータは元気に答えた。シグナムとシヤマル、シーナ達も微笑みながら、その光景を見ていた。その時、ドアがノックされた。

すずか「こんちには」

ドアの向こうから、すずかの声が聞こえた。シグナム達は焦った。連絡がなかったので、今日は見舞いに来ないのだと思っていた。

はやて「あれ？すずかちゃんや。はーい、どうぞ」

はやてがすずかに返事をして、中に入るように促す。

すずか「こんにちは」

ドアが開かれて、すずか達が病室に入ってきた。

すずか「あ、今日は皆さんお揃いですか？」
アリサ「こんにちは、はじめまして」

と、すずかとアリサが言う。

なのは・フェイト「あっ!？」

なのはとフェイトは、シグナム達に気付いて思わず声を上げた。

シャル「えっ!？」

フェイト達の後ろにいた勇斗達も驚いた。

勇斗（ちっ、まさかシグナム達がいるなんてな）

奏（やばいよ…雰囲気悪くなったよ…）

奏は凄く焦っていた。聖華とメイも焦っていた。

シグナムとヴィータは、敵意の目でフェイト達を睨んでる。気まずい雰囲気になる。

アリサ「あ、すみません。お邪魔でした？」

と、アリサが言った。

蓮牙「あ、いや、いきなり来たから驚いただけだ」

シグナム「あ…ああ…そうだ」

シャル「本当に驚きました。いらっしやい」

蓮牙が何とか誤魔化した。それに合わせてシグナムとシャルも合わせた。

アリサ「なんだ。よかった」

すずか「驚かせてすみません」

すずかとアリサが安心する。

はやて「ところで、今日はみんななどないしたん？」

はやてがすすか達に尋ねた。すすかとアリサは、笑顔で互いに顔を見合わせ、

アリサ・すすか「セーの！」

二人は同時に、コートで隠していたプレゼントを出した。

アリサ・すすか「サプライズプレゼント！」

プレゼントをはやてに差し出した。はやては嬉しそうな笑顔になる。

すすか「今日はイヴだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」
はやて「わあ、ほんまか。ありがとうな」

お礼を言いながら、はやては二人からプレゼントを受け取った。

アリサ「みんなで選んできたんだよ。後で開けてみてね」

アリサ達は楽しそうに話をしている。ヴィータはまだなのはを睨んでいて、なのはは困った顔をしている。隣にいるフェイトも同じ表情をしている。

シャル「ああ、みんなコートを預かるわ」

そう言ってシャルは、すすか達からコートを預かる。小声で勇斗がシグナムに話しかけた。

勇斗「今日に限って、ザフィーラ以外全員集合とはな…」

シグナム「すまない。主に心配掛けたくなくって……」

勇斗はヴィータの方を見ると、ヴィータはなのはのことを睨んでいた。

奏「やばいよ、ヴィータスゴイ睨んでるよ」

なのは「えと…あの…そんなに睨まないで…」

ヴィータ「睨んでねーです。こういう目つきなんです」

睨みながらヴィータが言った。なのはは戸惑った。すると、はやてがヴィータを怒った。

レフィア「どうするんですの？このまま一触即発ですわよ」
すずか「さようなら」

すずかとアリスが手を振りながら挨拶した。シグナムとシャルルは病院の玄関口で、すずか達を見送った。夜になって辺りは暗くなっていた。

シグナム達はなのは達にこのあと近くのビルの屋上に会う約束をした。勇斗は思った。

勇斗（夜が長くなりそうだな……）

近くの屋上で、勇斗と奏、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、シャルルがいた。

なのは「はやてちゃんが、闇の書の主…」

シグナム達から、話を聞いたなのはが呟いた。フェイトも困惑の表情を浮かべている。

シグナム「悲願は後わずかで叶う」

シャマル「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも」

シグナム達が敵意を放ちながら言う。

勇斗「待て」

勇斗はシグナム達となのは達の前に出た。

勇斗「これ以上、戦ってもだ…」

勇斗が言いかけた瞬間、ヴィータが勇斗の頭目がけてグラーフアイゼンで殴ろうとしたら勇斗が止める。

勇斗「言いかけたところを邪魔すんな」

ヴィータ「悪いが、アタシたちはもう止まることが出来ないんだ」

ヴィータは下がって、シグナムの隣に立つ。シグナムも、レヴァンティンを出して右手に持つ。

勇斗「おまえら…」

シグナム「シャマル。お前は離れて通信妨害に集中してる」

シャマル「うん」

言われた通りに、シャマルは後ろに下がった。シグナムは両手でレ

ヴァンティンを構える。

シグナム「すまない、勇斗、我らを許してくれとは言わない。だが……」

シグナムは悲痛な顔をする。前髪に隠れている目から、一筋の涙が零れる。

シグナム「我ら守護騎士は……主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた」

目から涙が溢れ出る。そして、シグナムはバリアジェケットに着替えた。ヴィータは鉄球を出し、なのはに向かって放ったが、その攻撃はなのはに直撃しなかった。

なのは「勇斗さん……」

ヴィータ「勇斗……」

勇斗が右手で鉄球を防いだ。

勇斗「笑顔のためなら捨てる？ふざけるな。許すも何も俺は最初からお前らのことを許してる。それにお前らだけで背負うとするな。

なのはかフェイトかに頼れ」

ヴィータ「勇斗」

なのは「勇斗さん」

奏「お兄ちゃん」

勇斗「俺らはお前らの敵じゃない。なのは達もだ。今からでも間に合う。止まる事だって出来る」

フェイト「勇斗」

シグナム「勇斗……私たちは……」

シグナムとヴィータは武器をおろそうとした瞬間、勇斗に青いバインドが掛かった。

仮面の男「まずは、一人」

シグナムが仮面の男に立ち向かおうとするが、青いバインドに拘束されてしまう。奏達やフェイト達やヴィータ達も全員、バインドに捕まってしまった。

仮面の男「よくやった」

そこへ、もう一人仮面の男が現れた。

なのは「えっ！？二人！？」

仮面の男達を見て、なのはは驚きの声を上げた。

仮面の男「では、始めるとするか」

仮面の男が右手を上げた。すると闇の書が現れた。

シャマル「いつの間に！？」

闇の書を見て、シャマルが驚く。
闇の書が開いて、紫色に光る。

シグナム「う…うああっ！！」

シグナム達から、それぞれ光の玉が現れる。

ヴィータ「シグナム!!」

仮面の男「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出す」
ヴィータ「何なんだ？何なんだよテメーら!？」

仮面の男達に向かってヴィータが怒鳴る。

仮面の男「プログラム風情が、知る必要はない」

仮面の男は静かに言った。その瞬間、仮面の男の顔に衝撃が走った。

仮面の男「な!？」

勇斗「……………今シグナム達をプログラム風情と言ったな」

勇斗が怒気の含んだ声で言う。

そしてその目は相手を見下す獣の目をしていた。

勇斗「ふざけるなあっ!!!!!!」

全員「(ゾクッ!!) つつつつ!!!!!!???」

勇斗の怒りの声が放たれた。

怒り出した勇斗の殺気になのは達やヴィータ達は全身に恐怖が走った。

勇斗「シグナム達は人間だ!!魔法で作られた存在だろうがれっきとした人間だ!!」

シグナム「ゆ、勇斗…」

勇斗「そしてシグナム達ははやてと言う人間に出会い、今やはやての家族として幸せにしているんだ!!」

シグナム達それを聞いては驚いた。

勇斗「それを貴様らは…救えなかった友の件でやつあたりでもしているのか！どっちなんだ！！リーゼロッテ！リーゼアリア！」

仮面の男「な！？気付いてたのか！？」

勇斗「双子の使い魔なら変身するすれば同じ姿になることがあるかな。先入観で瞬間移動したのもうなずける。それに内部犯行が出来ることも入れればお前らがやろうとしたことが納得できたしな」

仮面の男「其処まで見抜いたのか…。だが！」

仮面の男達は勇斗に攻撃しようとしたら、勇斗のバインドが壊され、顔を驚掴みにされた。

それとバインド付きで。

勇斗「今から化けの皮をはがしてやる。強制解除」キャンセルリリース

仮面の男「ぐああああああああああ！！！！」

掴んだ手から電流みたいなものが流れ、仮面が外れ、仮面の男達の変身魔法が解け、正体を現した。仮面が床に落ちる。

仮面の男の正体は、グレアム提督の使い魔の、アリアとロッテだった。

勇斗「チェックメイトだ。そして二度と動くな」

剣を突き付けて脅す。

奏達はいつの間にかバインドを外した。

アリア「く…」

アリアとロッテは苦い顔になる。

勇斗「聞こえているかグレアム」

勇斗が言うと、モニターが現れ、グレアムが映る。

グレアム「やはり感ずいていたのか」

勇斗「当然だ。舐めては困る」

マントを広げて言う勇斗。

勇斗「お前は闇の書の転生先を調べていたんだろ。そしてたどり着いたのは闇の書の現在の在処と今の主である八神はやてを」

グレアム「…両親に死なれ、体を悪くしたあの子を見て、心は痛んだが…運命だとも思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる」

グレアムは語った。奏は冷たい表情を保ちながら、内心怒っていた。悲しむ人は少なくなる？数でしか人を理解出来ない最低な人間の考えだわ。そんな事を思いながら、怒りを抑え続けた。

奏「彼女の生活の援助をしていたのも貴方？」

グレアム「永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった…」

グレアムは目を閉じて、少し顔を下げた。

レイナ「偽善だね」

レフィア「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間にでも閉じ込める。そんなところかしら？」

グレアム「ああ。それなら闇の書の転生機能は働かない」

レフィアの問いに、グレアムは答えた。答えを聞いた勇斗は顎に手を当てて考えた。すると、ロッテ達と言う。

ロッテ「これまでの闇の書の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わんない！」

アリア「私達を解放して。凍結がかけられるのは、暴走が始まる数分だけなんだ」

勇斗「それは単なる復讐だ。八神はやては貴様らの復讐の道具ではないぞ」

グレアム「そうだな。自分たちがやろうとした事がただの復讐でしかない。今更許されることではないがな…」

勇斗はそれを聞いて、考えるしぐさをして、ある事を言い出した。

勇斗「仕方ない。レイナ、闇の書を出してくれないか？」

第八話：悲劇のクリスマス（後書き）

次回は闇の書と戦闘だ。

第九話：勇斗VS闇の書（前書き）

ちよっとおくれてすいません。闇の書戦の始まりです。

第九話：勇斗VS闇の書

勇斗「仕方ない。レイナ、闇の書を出してくれないか？」

レイナ「これ？」

勇斗はレイナに闇の書を出してくれと言い、レイナは勇斗に闇の書を手渡す。

勇斗はそれを持った後、指をパチンと鳴らし、魔方陣が現れてはやてが現れる。

なのは「ふえ！？」

フェイト「はやて！？」

アリア・ロツテ「なっ！？」

シグナム「主！？」

ヴィータ「はやて！？」

シャマル「はやてちゃん！？」

はやて「あれ？ここどこや？て言うかなのはちゃんにシグナム？なんでみんなが？」

勇斗達以外は全員驚いているが、はやて自身はなにがなんだかわからない様子である。

勇斗「はやて」

はやて「勇斗さん？」

勇斗「一応話しておこう」

勇斗は闇の書のこと、シグナム達がやっていたこと、なのは達が魔法使いであること、勇斗達もその類だとの事（自分が魔王だとの事は伏せた）を話した。

はやて「ふーん、そうなんや…」

はやてはシグナム達に黒い気を出す。

シグナム達は冷や汗を流す。

勇斗「で、この闇の書・・・いや、夜天の書の管理プログラムがいるんだが、そいつは闇と言う鎖に縛られている。助けたいか？」

はやて「なんやようわからんけどうちに覚悟を決めろっちゅうことやな？シグナム達が出てきた時点で凄いいことやと思ったんやけどな」

勇斗「話が早くて助かる」

勇斗はそう言って右手を胸に当てる。

すると手から黒い光の球が出る。勇斗のリンカーコアだ。

シグナム「アレが勇斗の…」

ヴィータ「あいつすげえ！一気に666ページ埋まりそうな量だぞ！」

シグナム達は勇斗のリンカーコアに驚いた。

勇斗「最後の警告だ。はやて、夜天の書の運命を断ち切りたいか？」

真剣な顔ではやてに聞く勇斗。

はやては考えた後真剣な顔で言った。

はやて「ほんならうちはその子を救うために立ち向かったるで！」

勇斗「・・・いい覚悟だ。行くぞ」

勇斗は闇の書に魔力を蒐集させる。

そして、闇の書のページに666ページ分埋まった。

闇の書「666ページ、コンプリート」

すべて埋まった闇の書は光り始め、はやては苦しみ始めた。

はやて「くううううう!!」

ヴィータ「はやて!」

レフィア「安心して、勇斗様は絶対に助けてあげるから、あの子を」
はやて「…うああああああああ!!!!」

悲鳴を上げた後、はやては姿が変わった。

白く染まった長い髪、黒いバリアジャケットを身に纏い、背中には
3対の6つの黒い羽の女性へと変わった。

なのは「はやてちゃん!」

フェイト「はやて!」

二人は、はやての名を呼んだ。

闇の書「また、全てが終わってしまった。決して終わらせる事が出
来ない悲しみ…」

闇の書は涙を流しながら言った。闇の書は片手を上に掲げると、黒
い球体を作り出した。

闇の書「デアボリック・エミッション」

闇の書の言葉の後に、黒い球体が大きくなっていく。

フェイト「空間攻撃！」

闇の書「闇に…染まれ……」

黒い球体はどんどん大きくなる。

勇斗「お前らは離れてろ！」

勇斗は転移魔法でなのは達を近くのビルの上まで転移する。
そして勇斗は右手に魔力を溜めて放つ。

勇斗「イマジンプレイク！」

勇斗は大きくなる黒い球体をかき消した。

闇の書「あなたは…勇斗？」

勇斗「しっているのか？」

闇の書「私は騎士たちとリンクしてますから」

勇斗は険しい顔をする。

勇斗「一つ聞くんが、あんたの目的は何だ？」

闇の書「主の願いを叶える事です」

勇斗「はやての願い？」

闇の書「はい。この世界を破壊し、主に穏やかな永遠の眠りを……
！？」

目を閉じ、胸に手を当てながら闇の書は答えると、勇斗から溢れんばかりの殺気を感じた。

勇斗「…それははやての願いではない。単なるお前の自己中な考えだろうが」

闇の書「…あなたに主の願いを知っていると言うのですか？」

勇斗「ああ、あいつは、ただ、皆幸せに暮らしたい。悲しみも争いのないただ、平凡な日常を望んでる。それをお前の歪んだ考えをあいつの願いと勘違いするなよ」

闇の書「……だが、私は止まることが出来ない。私が止まれば私の中にいるアレが出てきてしまう」

勇斗「ならそれごとお前を止めてやる。覚悟しろ！」

勇斗達がいる場所から少し離れた場所になのは達がいた。

なのは「あれ、勇斗さんじゃない？」

フェイト「うん、無事でよかった」

なのは「私たちも行こう」

なのはとフェイトは勇斗のところへ向かおうとしたら、奏達が止めた。

奏「2人とも何言ってるの。お兄ちゃんは一人で十分だっての」

蓮牙「そうだぜ。あんな奴勇斗一人で十分だ」

なのは「それはそうですけど…ってあなたは誰ですか？」

蓮牙「ああ、初対面だな。あたしは蓮牙、勇斗の仲間って思えばいい。それと他にも3人…」

シーナ「シーナだ」

メイ「私はメイと言います」

聖華「聖華です」

なのは「あ、はいこちらこそ。高町なのはです」
フェイト「フェイト・T・ハラウンです」

とりあえず挨拶したったなのはとフェイト。

勇斗は両手から魔力弾を出し、闇の書に投げる。

闇の書はそれを避け、魔力で強化した拳で勇斗を殴ろうとしたが、片手だけで防がれ、勇斗も闇の書に殴りかかるが、障壁で防がれる。

勇斗「やるな」

闇の書「ハアアアアアア」

闇の書は勇斗のハラを殴り（この時勇斗は魔力でダメージを押さえた）、追撃にブラッティーダガーを放った。

勇斗「甘いな」

だが勇斗は羽で防いだ。

勇斗「おまえに力はその程度か？もっと本気で来い」

中指をあげて挑発する勇斗。

闇の書「……咎人達に…滅びの光を」

ユーノ「まさか、あれは…」

なのは「私のスターライトブレイカー」

なのはも信じられないと言った顔をする。

フェイト「なのはは一度、闇の書に蒐集されてる。その時に魔法をコピーしたんだ！」

その時、エイミィから通信が来た。

エイミィ「大変、結界の中に取り残された一般人が…」

フェイト「早く助けに行かないと」

レフィア「アルフ、ユーノ、なのはとフェイトと一緒に避難を…」

なのは「え、でも勇斗さんは…」

蓮牙「勇斗なら大丈夫だって言ってるだろ？。今は一般人の避難だろ」

なのは「分かった。フェイトちゃん行こう」

フェイト「うん」

なのは達は安全なところに避難することにした。

闇の書「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」

魔力がどんどん溜まっていく。

なのはとフェイトは逃げ遅れた人がいる場所に来ていた。すると、建物の隅に何かが動いた。

なのは「あの、すみませーん、危ないですから、そこでジツとしてください！」

人影に向かって叫んだ。二人の人影は足を止めて、振り返った。

すずか「え？」

アリサ「今の声って…」

二人は、声の主を見た。

アリサ「なのは！？」

すずか「なのはちゃん！？」

なのはを見て、二人は驚いた。二人を見て、なのはとフェイトも驚く。

なのは「アリサちゃん！すずかちゃん！」

人影は、アリサとすずかだった。

すずか「なのはちゃん、それにフェイトちゃんも」

アリサ「ねえ、これってどうなってるの？」

アリサがなのはに聞く。なのはとフェイトはどう説明するか迷った。

闇の書「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」

魔力がどんどん溜まっていく。

勇斗「さてと、来いよ。相手してやる」

闇の書「貫け…閃光、スターライトブレイカー」

闇の書はスターライトブレイカー放ち、勇斗は至近距離でスターラ

イトブレイカーを喰らうことになった。

遠くでスターライトブレイカーの閃光を見ていたなのはとフェイト、だがその光景は異様だった。スターライトブレイカーはなのはたちがいる場所に届かず、勇斗がいる屋上で止められていた。

フェイト「勇斗」

アリサ「ねえ、一体何が起こってるの？」

シーナ「あれは魔法攻撃が止められてるからさ」

いつの間にかシーナが後ろに立ってアリサとすずかに言う。

すずか「あ、あなたは」

シーナ「私はシーナだ。それにしても幸運だな」

アリサ「どういうこと？」

シーナ「今あそこにお前達の王子様・勇斗がいるのだぞ？」

アリサ・すずか「お、王子様！？／／／／／」

アリサとすずかか顔を赤くした。

なのはとフェイトは嫉妬の念を抱いた。

なのは「コホンッ、とにかく、2人ともここから避難させるからね」

なのはは咳払いして言うが、

すずか「私もう少しここに残ろうかな？」

すずかがいきなりの発言をした。

アリス「それどういこと…!?! まさかすずかドサクサに紛れて勇斗と!?!」

フェイト「はっ! いくらすずかでも優斗はあげないよ!」

なのは「フェイトちゃん何言ってるの!?! それと勇斗さんは私のものだよ!」

勇斗争いで口げんかする4人組。

周りは少し苦笑いを浮かべる。

メイ「将来が不安になりますね」

聖華「私もそう思います」

シグナム「…なんだか私は置いてかれた感覚がする」

シャル「シグナム、元気出して」

煙が晴れるとそこには驚いた表情の闇の書がいた。目の前には無傷の勇斗がいた。

闇の書「な、何故、倒れない。至近距離で、防ぎきれないはずだ」

勇斗は闇の書に近づいた。

勇斗「おい、何泣いてるんだ」

闇の書の眼から涙がこぼれていた。

闇の書「こ、これは、主の涙だ」

勇斗「泣くぐらいならするな」

勇斗「この際なんだ。お前を縛り続ける闇を引きちぎってやろう」

そして大きな魔方阵から全身黒い体をした2足歩行のドラゴン・バムートが現れた。

雄叫びをあげるバムート。

闇の書（な、なんだあのドラゴンは！？押しつぶされるような重圧
プレッシャーだ…）

なのは「な…何あれ…」

アリサ 「……………これは夢よね！絶対あり得ないよね！！」

137

状態になっている。

対してすずかはバハムートに脅えるどころか逆に酔い痴れているのだ。

『竜族の王者』バハムート

その偉大なる姿にすずかは酔い痴れている。

バハムート「グルルルルルルルウウ・・・」

勇斗「『貴様は美味しそうだな。食ってみたいものだ』だってよ」

バハムート「勝手に違う訳をするな馬鹿もの！」

なのは達「し、しゃべったあッ!!?」

バハムートがしゃべったことに驚くのはたちはスルーして闇の書に向き合う。

バハムート「人間モドキよ、我が相手してやる。かかってこい」

第九話：勇斗VS闇の書（後書き）

後半戦に入ります。

第十話：祝福と夜天の復活

バハムート「フンッ！」

闇の書「ぐあっ！」

バハムートは回転して尻尾で闇の書を撃ち飛ばす。

闇の書は耐え切って止まる。

バハムート「ファイア！！」

ドラゴンでお馴染みの口から炎を吐くバハムート。

その威力は鉄でも溶かす。

闇の書は障壁を展開するも、炎が闇の書ごと飲み込む。

闇の書「グ、焼けるように熱い…」

障壁を張っているのに暑さを感じる闇の書。

家電のオーブンに焼かれるような暑さである。

炎がはれると、いつの間にかバハムートが闇の書に接近してきた。

バハムート「フレア！」

闇の書「ぐあっ！」

炎の塊が出て、それが爆発し、闇の書は吹き飛ばされた。

闇の書「く…」

バハムート「その程度か？」

上から目線で言うバハムート。

はつきり言って闇の書は遊ばれている。
目の前にいるバハムートは比べ物にならないほど強いのだ。
すると勇斗がやってきた。

勇斗「少し面白いものを見せてやろう、魔チェンジ」

勇斗がバハムートに触れて言うと、バハムートが光り出して形を変え、ドラゴンの上顎の様な剣になった。

闇の書「それは？」

勇斗「魔チェンジ、魔物が武器に変化する名前だ」

勇斗は剣を振り上げ、

勇斗「ドラゴンスラッシュ！」

炎を纏いし剣を闇の書に切る。

闇の書「うああああ！！！」

切り飛ばされた闇の書は海まで飛ばされた。

とっさに立て直して魔法の準備としようとしたら勇斗がマッハの如く接近して、

勇斗「痺れ止まる時計」
タイムマヒ

そう言うと、闇の書は時が止まったかのように動かなくなった。

闇の書（か、体が動かない）

勇斗「行くぞ」

動かなくなった闇の書に、勇斗は手を前に出して闇の書の中へ入った。

なのは「勇斗さんが」

レフィア「あれは干渉する心エンターハーツの世界、闇の書の心の中に入って説得する気ですわね」

闇の書の中

真っ暗な空間。そこに銀色の女性と茶髪の車椅子の少女・はやてがいた。

勇斗「見つけたぞ」

闇の書「神道勇斗、あなたどうして…」

勇斗「お前の中の闇を取り除きにな」

勇斗の言葉を聞いて、闇の書はただ、泣いていた。

闇の書「神道勇斗、今私の体には、主の呪いの原因を作っている物が眠っている。主が助けるとソレが復活してしまう」

勇斗「ならそれを止めてやるよ。お前らが始まろうとする事を妨害する奴を破壊してやるからな」

はやてが目を覚ますと真っ暗な空間にいた。目の前には勇斗と闇の書がいた。

はやて「勇斗さん。ここはどんなんや？それにその子は？」

闇の書「私は闇の書です。ここは私の中です」

闇の書がはやてに答えた。

はやて「えっ？あなたが闇の書！？」

はやては驚いた。それから闇の書は、はやてに今までの事を全て話した。はやては真剣に闇の書の話聞いた。話を聞き終えたはやては頷いた。

はやて「わかった。ほんなら名前をあげる。闇の書なんて名前は、貴女には似合わへん。私は管理者や。私にはそれが出来る」

闇の書「主…」

はやて達の足下に白い魔法陣が展開される。

外の世界では、突然闇の書の動きが鈍くなった。その時、

はやて（外の方！管理局の方！）

なのは達は念話を受けた。

はやて（そこにいる子の保護者、八神はやてです！）

なのは「はやてちゃん!?!」
フェイト「はやて!?!」

念話を受けた二人は驚いた。

はやての声を聞いて、二人は少し安心した。

はやて（ゴメンなのはちゃん、フェイトちゃん。何とかその子止めてあげてくれる?）
なのは「え?」

はやて（魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が走っていると管理者権限か使えへん。今そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから。管理者権限が使えるば、勇斗さんも外に出せる）

はやてがなのは達に説明した。

フェイト「わかった。魔力ダメージを与えればいいんだね」
なのは「やろう、フェイトちゃん!」
フェイト「うん!」

二人は、闇の書に向けてデバイスを構えた。デバイスの先に魔力を溜める。

闇の書の中

はやて「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る」

はやては両手を闇の書の顔に添える。

はやて「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール。リインフォース」

闇の書に新たな名を贈り、魔法陣は強く輝いた。

なのは「スターライト・ブレイカー!!!!」
フェイト「プラズマ・スマッシュャー!!!!」

桜色の閃光と金色の閃光が同時に放たれた。二つの閃光は闇の書を飲み込んだ。

リインフォース「新名称『リインフォース』認識。管理者権限の使用が可能になります」

はやて「うん」

リインフォース「ですが、防御プログラムは止まりません」
はやて「まあ何とかしよ」

はやての前に一冊の本『リインフォース』が現れた。

はやて「行こか。リインフォース」

はやてはリインフォースを抱いた。

リインフォース「はい。我が主」

はやては光に包まれた。

外にいるなのは達に、エイミーからの通信が入る。

エイミー「みんな気をつけて！闇の書の反応、まだ消えてないよ！」

海に黒い球体が現れた。闇の書の防御プログラムだ。すると、なのは達のすぐ近くに白い光が現れた。

光の中には、はやてとリインフォースがいた。

はやて「リインフォース。私の杖と甲冑を」
リインフォース「はい」

はやては黒いバリアジャケットを見につけ、杖を手にした。直後、光は消えて、中からはやてが姿を現した。

はやて「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風リインフォース。セーフトアップ！！」

髪の色が変わり、騎士甲冑をイメージしたようなバリアジャケットを身に纏い、背中には翼のようなものが出た。

遠く離れた場所には、奏達とアリサ、すずかが海上の光景を見ていた。

ちなみにシグナム達はすぐはやて達のところへ向かった。

レフィア「どうやら、はやてちゃん復活したみたいですね」

レイナ「ねえ、勇斗がいらないんだけど…」

蓮牙「どっかで出てくるんじゃないのか？」

シーナ「まああいつがくたばるのは全然想像できんがな」

4人がそう言うと、アリサが言う。

アリサ「勇斗がいないのに心配じゃないの？」

蓮牙「アホ、信じているからこそ待っているんだよ」

すずか「勇斗さんを信じている？」

奏「そ、あんなことでやられるようじゃお兄ちゃんやってけないしね」

アリサ・すずか（どんだけ強いんだろう勇斗さんって…）

2人は少し勇斗のことを不思議に思った。

奏「でもここから先はあの子たちの領域よ。見守ってみましょ」

第十話：祝福と夜天の復活（後書き）

次回は闇の書の闇の登場だ。

第十一話：暴走する闇

ヴィータ「はやて…」

ヴィータは目に涙を浮かべている。はやては優しく微笑んだ。

シグナム「すみません」

シャル「はやてちゃん……あの……ごめんなさい」

シグナムとシャルが、はやてに謝った。はやては首を横に振った。

はやて「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かい事は後や」

はやては嬉しそうに微笑んだ。

はやて「おかえり。みんな」

ヴィータ「う……うああああ!!」

はやての温かい言葉を聞いた後、ヴィータが泣きながら抱き付いた。

ヴィータ「はやて! はやて! はやてええええ!!」

涙を流しながら、ヴィータははやての名前を叫んだ。はやては優しくヴィータを抱いて、頭を撫でた。

そこへ、なのはとフェイトがやってきた。

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんもゴメンな。ウチの子達がいろいろ迷惑掛けてもうて」

なのは「ううん」

フェイト「平気」

なのはとフェイトは笑顔で答えた。

リインフォース「主、申し訳ありません」

はやて「ん？」

いきなりリインフォースが、はやてに謝った。

リインフォース「勇斗を少し離れた所に出してしまいました」
はやて「あっ！そういえば勇斗さんがおらん！！」

慌ててはやては辺りを見回した。

なのは「どこに出したんですか？」

なのはがリインフォースに尋ねた。

勇斗「俺を呼んだか？」

なのは達「わあっ！！」

いきなりなのは達の前に現れたから驚いた。

フェイト「ゆ、勇斗！いるならいるって言ってよ！」

なのは「いきなりだから心臓止まるかと思ったよ」

勇斗「そうかそうか、悪かったな」

そこへクロノがやってきた。

クロノ「すまないが。水を差してしまうんだが、時空管理局執務官
クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する」

クロノは視線を黒い球体に向けた。

クロノ「あそこの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある」

クロノは待機状態のデュランダルを取り出した。

クロノ「まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲『アルカンシエル』で消滅させる」

クロノやアースラの皆では他に案が浮かばなかった。

クロノ「これ以外に他にいい手はないか？」

クロノが他に意見を求めた。シャルマルが手を挙げた。

シャルマル「えーと：最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

シグナム「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらん」

シャルマルとシグナムが渋い顔で言った。

ヴィータ「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所でアルカンシエル撃ったら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか！！」

ヴィータがアルカンシエルに反対する。

なのは「そ…そんなに凄いの？」

なのはがユーノに尋ねた。

ユーノ「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。っていうと大体わかる？」

ユーノが説明した。

なのは「あの、私もそれ反対！」

フェイト「同じく！絶対反対！！」

アルカンシエルの説明を聞いた、なのはとフェイトも反対した。確かにそんなものを撃ったら、はやての家どころか街まで消滅してしまう。

クロノ「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより、遥に大きくなる」

エイミィ「はい、みんな！あと十五分しかないよ」

エイミィが通信で伝えた。

クロノ「何かないか？」

守護騎士達に尋ねた。

シグナム「すまないが、無い。あまり役に立てそうも無い」

悔しそうにシグナムが言った。

ザフィーラ「暴走に立ち会った経験が、我等には殆どないのだ」

と、ザフィーラが言った。

アルフ「ああ！なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ！みんなでズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの？」

焦れたアルフがそんな事を言った。

ユーノ「ア：アルフ。そんな単純な話じゃ…」

ユーノが言った。

勇斗「ところでクロノ、その『アルカンシエル』は攻撃範囲が限られるのか？」

勇斗がこんなことを言ってきた。

はやて「攻撃範囲って、それってどこでも撃て…あ！」

なのは「クロノくん。アルカンシエルってどこでも撃てるの？」

なのはが尋ねた。

クロノ「どこでもって…例えば？」

フェイト「今、アースラがある宇宙空間とか」

話を聞いていたエイミィは、得意げな笑みを浮かべた。

エイミィ「管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなあ」

右手の親指を立てる。

エイミィ「撃てますよ。宇宙だろうが、どこだろうが！」

自信満々に答えた。

クロノ「オイ！ちょっと待て君ら！ま…まさか……！」

三人の意見にクロノは驚いた。三人は満面の笑みを浮かべた

遠く離れた海岸で、

奏「あの子たちいいことを始めそうね」

レフィア「やり方は荒いですけどね」

メイ「私達が勇斗さんを信じたように、あなた達のお友達の事も信じてもいいですよ？」

みんなの言葉を聞いて、すずかとアリサは不思議と不安はなくなり、表情が明るくなった。

すずか「はい。なのはちゃん達を信じます！」

アリサ「私も！私達は友達だもん！」

リンディ「まあ、発想があの子達らしいわね」

リンディは驚き半分呆れ半分の、複雑な笑みを浮かべた。

エイミィ「計算上では実現可能というのが、また恐いですね。クロノ君。こっちのスタンバイはオーケー。暴走臨界点まであと十分！」

エイミィはキーボードを操作しながら言った。

クロノ「個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが……やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。僅かでも可能性があるなら、それに賭けるしかない。

はやて「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはソレを破る」

フェイト「バリアを抜いたら本体がむけて、私達の一斉攻撃でコアを露出」

なのは「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送！」

リンディ「あとはアルカンシエルで蒸発」

リンディが言った。グレアムは、現地の様子をモニターで見ている。

リンディ「アルカンシエル、チャージ開始！」

局員「はい！」

リンディの指示に局員が応える。アルカンシエルの発射準備をする。

海上では、なのは達が防衛プログラムを止めるために、それぞれのデバイスを構える。防衛プログラムの周辺に、数本の禍々しい黒い柱が立つ。防衛プログラムが暴走を開始する。

はやて「ところで勇斗さんは参加せんのか？」

勇斗「これはお前達の戦いだ。拝見させてもらおう。はじめをつけろ」

はやてはそれを聞いて防御プログラムに向き直る。

はやて「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の『闇』」

はやてが呟いた。黒い球体が消え、中から防衛プログラムが姿を現した。カニのような足があり、カラスのような黒い翼が生えていて、獣のような鋭い爪を持った前足、幾つかの動物を合わせたような機械の怪物だった。頭部には、紫色の女性のようなモノがあった。

アルフ「チェーン・バインド!!!」

ユーノ「ストラグル・バインド!!!」

アルフのオレンジ色のバインドと、ユーノの緑色のバインドが、防衛プログラムの周りにある尻尾のようなモノを捕らえる。

ザファイラ「鋼のくびき!!!」

ザファイラから白い魔力の線が出る。白い線は複数の尻尾を斬った。

なのは「レイジングハート!エクセリオンモード!!!」

レイジングハートの形が変形する。ヴィータがグラーフアイゼンを

構えて近寄る。

ヴィータ「ちゃんと合わせろよ！高町なのは！！」

なのは「ヴィータちゃんもね！！」

ヴィータ「『鉄槌の騎士』ヴィータと、『鉄の伯爵』グラーフアイゼン！！」

撃鉄を起こし、グラーフアイゼンは巨大なハンマーになる。

ヴィータ「轟天爆碎！！」

叫びながら、巨大ハンマーを振り上げる。

ヴィータ「ギガント・シュラアアアク！！！！」

巨大ハンマーを、防衛プログラム目掛けて振り下ろす。防衛プログラムはバリアを張って、巨大ハンマーとぶつかる。衝撃で波が荒れる。バリアは、ヴィータの巨大ハンマーによって碎かれた。

なのは「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます！！」

足下に桜色の魔法陣を展開する。カートリッジロードをする。レイジングハートから桜色の翼が出る。防衛プログラムに向けて構える。

なのは「エクセリオンバスター！！」

先端に桜色の魔力が溜まる。

なのは「ブレイク・シュート!!!!」

桜色の閃光を放ち、防衛プログラムのバリアに直撃した。桜色の閃光はバリアを破った。次はシグナムとフェイトの番だ。

シグナム「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン！」

レヴァンティンを上に掲げる。

シグナム「刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

鞘とレヴァンティンを合わせる。撃鉄を起こして、レヴァンティンと鞘は合わさって『弓』になった。

魔力で矢を作り、防衛プログラムに向けて構える。

シグナム「翔けよ、隼!!!!」

矢は紫色に輝き、防衛プログラムに向かって放たれた。バリアに当たった矢は爆発し、バリアを砕いた。

フェイト「バルディッシュ！ザンバーフォーム!!!」

バルディッシュの形が変形する。金色の刃が出て、剣の形になる。

フェイト「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー！行きます!!!!」

足下に金色の魔法陣が展開される。バルディッシュを上に掲げ、撃鉄を起こす。

フェイト「撃ち抜け、雷神！！！！」

バルディッシュを振り下ろし、金色の魔力刃が伸びる。伸びた金色の魔力刃は、バリアを破って防衛プログラムを斬った。防衛プログラムからミミズのようなモノが現れ、光線を放とうと魔力を溜める。

ザフィーラ「『盾の守護獣』ザフィーラ！攻撃など撃たせん！！」

ザフィーラが白い魔法陣を展開する。白い魔力の柱が、ミミズのようなモノを貫いて動きを止めた。

はやて「彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！！」

はやては白い魔法陣を展開する。防衛プログラムの上空に、七ツの白い光を出す。

はやて「石化の槍、ミストルティン！！！！」

白い槍は防衛プログラムを貫き、防衛プログラムを石化させる。すると、石化した防衛プログラム内から、獣の顔をした機械やら尻尾やらが無茶苦茶に出てきた。

アルフ「うわ？！なんか凄い事になってるよ！」

アルフは若干引いた。

エイミィ「やっぱり並の攻撃じゃ通じない！」

クロノ「だが、攻撃は通っている。プラン変更はなしだ!」

クロノが氷結の杖・デュランダルを構えて、エイミィに応えた。

クロノ「悠久なる凍土、凍てつく柩の地にて、永遠の眠りを与えよ」

クロノがデュランダルを振った。直後、海が凍っていく。

クロノ「凍てつけ!!!」

そのまま防衛プログラムまで凍らせた。それでも、まだ防衛プログラムは止まらない。

なのは「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん!」

フェイト・はやて「うん!」

なのはの言葉に、二人は頷いた。最後は、三人による一斉攻撃だ。なのはの前に魔法陣が展開され、桜色の魔力が集束される。

なのは「全力全開! スターライト——」

レイジングハートを振り上げる。

フェイト「雷光一閃! プラズマザンバー——」

足下に金色の魔法陣を展開し、バルディッシュを構える。空から紫色の雷が落ちて、金色の魔力刃に当たる。はやては杖を空に掲げて魔力を溜める。

はやて「ごめんな…おやすみな……」

防衛プログラムを見つめ、はやては辛い顔をして呟いた。

はやて「響け終焉の笛、ラグナロク――」

三つの白い魔力の弾を作り出す。

三人「ブレイカー！！！！」

三人が同時に叫び、桜色と金色と白色、三つの閃光が防衛プログラムに向けて放たれた。閃光は直撃し、大爆発を起こした。防衛プログラムの中で鼓動が強くなった。そして鼓動は防衛プログラムから消えた。

シャル「捕まえた！」

シャルが防衛プログラムのコアを捕らえた。

ユーノ「長距離転送！」

アルフ「目標軌道上！」

ユーノとアルフが転送準備をする。

シャル「転送！！！」

シャル、ユーノ、アルフの三人によってコアは転送された。

エイミィ「アルカンシェル、バレル展開！」

キーボードを操作しながらエイミーが言った。リンディの前に発射装置が現れた。

リンディ「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を！」

局員「了解！」

局員が応える。そしてアースラの前に、防衛プログラムのコアが転送された。リンディは発射装置にキーを差し込む。

リンディ「アルカンシエル発射！」

キーを回す。アースラからアルカンシエルが発射された。光の中に飲み込まれ、コアは完全に消滅した。

退避したアースラは、コアの消滅を確認した。

エイミー「現場のみんな、お疲れ様！無事に終了しました！」

エイミーが通信でみんなに知らせた。みんな安心し、喜びで笑顔になる。なのはとフェイトとはやては、ハイタッチした。

勇斗「良かったな、はやて」

勇斗はそう言っではやての頭を撫でる。

その時はやては顔を赤くする。

なのは「あ！ずるいよはやちゃん！私も撫でて！」

フェイト「なのはもダメ！私が！」

はやて「ふふふ、世の中早い者勝ちや、勇斗さんのナデナデはうちのもんや」

ヴィータ「ば、はやて！あたしも撫でられてえぞ！」

シグナム「騎士として屈辱かも知れんが、恋人ならOKなのか？」

シャルを除く女性陣が勇斗のナデナデをめぐって口げんかした。

すずか・アリサ・奏「はっ！」

蓮牙「どうした？」

3人がなにか電波を感じ取った感じになり、蓮牙が聞いてみる。

すずか「今何かが盗られた気がする」

アリサ「私もよ」

奏「お兄ちゃん、一体あそこでなにを…？」

蓮牙はちよつとばかり呆れた。

第十一話：暴走する闇（後書き）

モテモテだな勇斗は…。次回でAS終了だぜ。

第十二話：別れの時（前書き）

A Sの終わりが来たようだ。

第十二話：別れの時

闇の書の闇消滅後、家にははやて、シグナム達とリインフォースがいる。

はやて「まだ雪が降つとるな」

はやては、窓から外を眺める。

雪は、昨日の夜から降り続いていて、もう随分積もっている。

ヴィータ「そういえば今日、勇斗達が来るんだよね？」

シグナム「ああ。授業が終わったら、高町達を連れてくると言っていた」

勇斗は、なのは達の学校でボランティアを続けている。

シャル「そろそろ来る頃じゃないかしら」

時計を見ながらシャルが言った。

はやて「ほな、外に出て待ってようか」

はやてが車椅子を動かす。

リインフォースが、はやての首にマフラーを巻いた。
玄関の扉を開ける。

すると門の前で勇斗達が雪だるまを作っていた。

奏「どお？ なかなかの出来栄えでしょ？」

奏が普通の雪だるまを作っている。

レフィア「あら？まだ幼稚な作品ですね？私なら勇斗様の胸像を作りますわ」

勇斗「そのセルフは後頭が出来てからな」

レフィア「うっ！すいませんでした」

対するレフィアは勇斗の胸像を作って対抗しようとしてたが、製作途中のようで勇斗の突っ込まれた。

レイナ「ねえねえ！私のはどう？」

勇斗「ほお？ずいぶん繊細なもんだな？」

奏・レフィア「いや繊細過ぎるよ（ますわ）！！」

レイナも雪だるま…と言うより細い8本足の蜘蛛足の生物の雪像を作っていた。

はやて「おもしろいことやってんな」

勇斗「ん？はやてか」

勇斗ははやてに気付く。

奏「はやてちゃん、あなたならこのシンプルな物がいいよね？」

レフィア「何言ってるっしやいますの？私の雪像の方が断然いいに決まっていますわ」

レイナ「あんたは未完成でしょ？私の方がいいよね？」

3人がどの雪だるまがいいかはやてに詰め寄る。

勇斗「やめんか」

奏・レフィア・レイナ「いたっ！」

勇斗は3人にチョップで止める。

勇斗「悪いな。こんな馬鹿三人組で」

奏「っってお兄ちゃん一緒にしないでよ！」

レフィア「私は馬鹿ではありませんわ！」

レイナ「痛いよ…」

3人は反論する。

勇斗「だ・ま・れ。んで、どうだ足の方は」

はやて「少し治って来たで」

リインフォース「これも勇斗のおかげだな」

はやてとリインフォースが感謝する。

防御プログラム破壊後、勇斗がなんやかんやではやての足を直したのだ。（適当でごめんなさい）

すると、なのはやフェイト、アリサ、すずか、シーナ、聖華、メイ、蓮牙がやってきた。

なのは「あ、はやてちゃん」

フェイト「勇斗も来てたんだ」

勇斗「来ちゃだめなのか？」

フェイト「いやそう言うことじゃなくて…」

勇斗「嘘だ」

フェイト「もう勇斗！」

からかわれたフェイトは勇斗に怒る。

蓮牙「元気そうだなはやて」
はやて「おかげさんでな」

するとなのはが、蓮牙の背中にある物を指差す。

なのは「あの、蓮牙さん。その背負っている壺はなんですか？」

蓮牙「これか？飲んでみるか？」

勇斗「止めとけ。子供に酒は禁止だ」

アリサ「お、お酒？」

蓮牙「何言ってるんだ。こんなちっこい姿でも飲める奴だって…」

勇斗「お前らとこいつ等鬼共なのは達を一緒にするな」

蓮牙「…分かったよ」

蓮牙はしぶしぶ従った。

なのは「そう言えば勇斗さんクロノくんと呼ばれたみたいだけど」

勇斗「ああ、もう話のケリは着いた」

数時間前、アースラ

そこで勇斗達と、リンディとクロノがいた。

クロノ「君たち全員に話がある」

勇斗「その様子だと、俺達のことを知りたいようだな？」

クロノ「単刀直入にそうだ」

クロノは肯定する。

クロノ「先ず君らのことを聞きたい」

奏「まさか乙女のプライバシーに入るつもりなの？」

レフィア「おとといいきやがれですわ」

レイナ「死ね」

ゴスツ！

勇斗は奏とレフィアとレイナを殴る。

勇斗「話が進まん。続けろ」

クロノ「あ、ああ…。まずきみらの…いや、勇斗のあの力はなんなんだ？」

勇斗「召喚の方か？それとも俺の魔力の方か？」

クロノ「両方もそうだがまずあのドラゴンが剣になったことだが」

クロノは勇斗に問いて見る。

勇斗「魔チェンジ。魔物が武器に変化する魔物自身の能力だ」

クロノ「ではあのドラゴンは自ら？」

勇斗「そうだ」

クロノ「もう一ついいか？君等は一体何者だ？」

勇斗はそれを聞いて表情を険しくする。

勇斗「…なぜそれを聞く？」

クロノ「君らの魔力値は調べたところEXランクに相当するし、あの黒いドラゴンは他の召喚ドラゴンよりも強い。挙句君らの持ち物

はほとんどロストログア級に近いものばかり、聞かない方がおかしいだろう？」

勇斗「・・・そうだな」

優斗は息を整えた後、言う。

勇斗「もしそれを知りたいなら一つ約束しろ」

リンディ「なんでしようか」

勇斗「俺達のことを知った後、俺達の世界の事を管理局に話すな」
クロノ「な！？どういうことだ！」

クロノが怒鳴ると、レフィアが説明した。

レフィア「私達の住む場所に問題がありましてね。管理局が干渉してはあまりいい感じがしないのですわ」

メイ「実は私達の世界にはあなた達と同じく人はいますが少し裏があるんですよ」

シーナ「我々の世界には3つの世界があつてな。人間に住む地上界。天なる者がすむ天界。そして魔と邪悪がはこびる魔帝界があるんだ」
勇斗「地上界以外は一定の奴だけが行き来できる場所だな」

クロノ「・・・それとこれとどう関係があるんだ？」

クロノはジト目で見ると、勇斗が答えた。

勇斗「バハムートを見たら？あいつも俺達のとこの住人だ」

それを聞いたリンディとクロノは驚いた。

クロノ「な！？あのドラゴンが君らのとこの出身なのか！？」

奏「微妙な違いだけど・・・、ちなみにバハムートだけじゃなくて他に

強いのもいるからね」

クロノ「あのドラゴンの他にもだと!？」

勇斗「ああ、言っておくが奴らは魔帝界にいるから襲われることはない。だが最初に言ったのはそこじゃない」

勇斗は教える。

勇斗「もしあそこのことを管理局に報告したらそれに興味を示したマッドな奴が無許可でそこに入ってなにをするか分からんからな」
クロノ「管理局はそんなことはしない!」

勇斗「一人や二人いるんじゃないのか？」

クロノ「そんな人……いたような……」

マリエル「ハクション!……誰か私の噂をしたような……」

クロノ「とにかく! 君達の世界の件だg「分かりました」艦長っ!」

リンディ「その口からすると、管理局を驚かす技術があると言ってもよろしいでしょうか？」

勇斗「そう思ってもらっても構わない」

勇斗は目を閉じて言う。

リンディ「では質問します。なぜあなたは私達にそのことを話したのですか？」

勇斗「管理局であんた達が信用できるからな」

リンディ「成程、そうですね」

リンディは少し笑う。

シーナ「そっちにチビっこは微妙だがな」

クロノ「僕はチビじゃない！後微妙ってどういう意味だ！！」

シーナの悪戯な言葉にクロノは怒鳴る。

勇斗「全く、リンディ、一応守っとけよ」

リンディ「分かったわ」

現在、

勇斗「さて、もうそろそろか？」

なのは「え？なにが？」

勇斗「迎えだ」

勇斗が言うと、渦のようなゲートが現れ、そこから時空の渡し人・
メーベルが現れる。

メーベル「勇斗様、そろそろお帰りになられた方が」

勇斗「あい分かった。だがその前に少し済ませたいものがある」
フェイト「帰っちゃうの？」

なのは達が寂しそうな顔をする。

勇斗「まあな。だからと言って永遠の別れとかじゃないぞ。勘違いすんな」

なのは「だ、だよねえ…」

なのは達は少し安心する。

奏「あ、どうせだからみんなで自己紹介しない？」

蓮牙「ああ、それいいな。あるときグダグダだからあんま紹介してないし」

シグナム「む、確かに」

リインフォース「そうだな」

はやて「ほんなら始めよっか」

そしてそれぞれ自己紹介を始めた。

勇斗「改めて言うぞ。俺は神道勇斗だ」

奏「その妹の奏だよ」

レフィア「私はレフィア・アースランドですわ」

レイナ「自称最強の使い魔、レイナだよ」

シーナ「おい…シーナだ」

聖華「私は聖華と言います」

メイ「私はメイ・リーと申します」

蓮牙「あたしは蓮牙だ」

続いてはなのは達。

なのは「私は高町なのは。小学三年生！」

フェイト「私はフェイト。フェイト・T・ハラオウン」

アリサ「アリサ・バンニグスよ」

すずか「私は月村すずかです」
はやて「次はうちか。八神はやてや」
リインフォース「リインフォースと申します」
シグナム「烈火の将・シグナムだ」
ヴィータ「あたしはヴィータだ」
シャマル「シャマルと申します」
ザフィーラ「私はザフィーラだ」

互いに自己紹介が終わり、別れの挨拶に移る。

奏「それじゃあみんな、また会おうね」
レフィア「いつか会えることを祈りますわ」
レイナ「それ縁起でもないよ」
シーナ「そろそろ帰るか」
聖華「安直過ぎます!」
メイ「ありがとうございましたみなさん」
蓮牙「また会おうな」

受け取りながら、なのはとフェイトは勇斗達を見る。

なのは「・・・奏さん・・・レフィアさん・・・レイナさん・・・」
フェイト「・・・シーナ・・・聖華・・・メイ・・・蓮牙・・・」

そしてなのはとフェイトは最後に自分の大好きな人物を見る。

なのは・フェイト「・・・勇斗(さん)・・・」

勇斗の名前を呼んで、フェイトとなのはは顔を俯いた。
涙がポロポロと床に落ちていく。

勇斗「元気でな。なのは、フェイト」

勇斗は優しく微笑んで、なのはとフェイトの頭を撫でた。

勇斗「それとお前達もな」

アリサ「う．．．はい．．．」

すずか「勇斗さん．．．ありがとうございました」

はやて「ホンマおおきにな、勇斗さん」

アリサ、すずか、はやても涙を流し、勇斗は3人の頭を撫でる。

メーベル「勇斗様、そろそろよろしいですか？」

勇斗「ああ、いいぞ」

勇斗はなのは達から離れて、奏達とゲートに向かうと、

なのは「待って勇斗さん！！」

なのはが、バツと勢いよく顔を上げた。

なのはは勇斗に向かって走り出した。

勇斗「ん？」

勇斗は振り返ると、なのはは思いっきりジャンプして、勇斗の胸の中に飛び込んだ。勇斗は思わずなのはを抱いた。

勇斗「なんだなのは．．．」

なのはの行動に勇斗が聞いてみると、なのはは顔を勇斗に近づけ、次の瞬間、なのはは自分の唇を勇斗の唇に重ねた。

勇斗「ん？」

奏・レフィア・レイナ・シグナム「んなっ!？」

フェイト・アリサ・すずか・はやて・ヴィータ「あっ!」

シャル「あらあら…」

なのはの行動にフェイトやアリサやすずかやはやてやヴィータや奏やレフィアやレイナ、普段驚かないシーナ、聖華、メイ、蓮牙、シグナム、リインフォースも啞然としている。

キスをした後、なのはは下りて勇斗から離れた。顔を真っ赤に染めながらも、真っ直ぐに勇斗を見つめた。

なのは「勇斗さん。貴方が好きです」

微笑みながらなのはは、皆の前で告白した。

勇斗「…別れのファーストキスとはな。以外に大胆な奴だ」

なのは「えへへ・・・／＼／＼／＼」

なのはは褒められたと思って顔を赤くする。

そして最初に復活したアリサが、

アリサ「はっ!、なのはあ!!目の前で堂々と勇斗にキキキキスだなんてっ!!」

すずか「ずるいよなのはちゃん!!私だって勇斗さんと!!」

フェイト「駄目だよ2人とも、ファーストはとられたけどセカンドは私が」

はやて「ちょいまちい!!うちを差し置いてあんたらに勇斗さんは渡すかい!!」

なのは「勇斗さんは私の者だよ?」

なのは達は勇斗をめぐって口げんかした。
勇斗はため息をついてなのは達に近づき、

バシッ！×5

なのは「にやっ！」

フェイト「はわっ！」

アリサ「イタッ！」

すずか「キャッ！」

はやて「いたっ！」

勇斗「誰がいつお前らの所持物になった？」

ジト眼で見る勇斗。

勇斗「だが、おまえらが俺の嫁にふさわしいなら考えてやらないこともない」

奏「お兄ちゃん！？」

レフィア「勇斗様！？」

レイナ「どゆこと？」

蓮牙「ハッハッハッ！こりゃ恋ライバルが増えるな」

シーナ「ふふっ、勇斗は渡さんぞ？」

メイ「ようは勇斗さんが認める大人になれば許可するってことです
ね」

5人娘「やった~~~~~！！！！」

なのは達はそれを聞いて大はしゃぎした。

すずか「それじゃあ私が先にキスを」

アリサ「ば、こらっ！先に抜け駆けすんじゃないの！」

フェイト「駄目だよ！次は私が先！」

はやて「なにおう！うちが先や！」

なのは「勇斗君は絶対に渡さないよ！」

また喧嘩を始めた。

勇斗「お前ら？」

なのは・フェイト・はやて・アリサ・すずか「はい、大人しくします！」

勇斗「宜しい」

勇斗が一言口開いただけで5人は大人しくなった。

勇斗「じゃあな、元気でやれよ？」

奏「さよなら」

なのは「さよなら勇斗さん！」

フェイト「また会おうね勇斗」

はやて「ホンマおおきにな勇斗さん」

アリサ「いつか会いなさいよね勇斗！」

すずか「勇斗さん、お元気で」

勇斗は手を振ってゲートに入り、勇斗達は消えていった。

なのは・フェイト・はやて・アリサ・すずか「また会おうね（な）、勇斗（さん）」

魔帝界・時空ゲート入口

聖華「戻ってきましたね」

メイ「そうですね」

懐かしの輪が故郷・魔帝界へと帰って来た勇斗達。
とはいっても本の一カ月程度だが。

シーナ「しかしあのなというのは子には驚かされたな。大胆にキスとはな」

蓮牙「あたしああいう奴が好きだな」

レイナ「蓮牙って百合っ子？」

蓮牙「いっぺん死ぬか？」

勇斗「止めんかお前ら」

シーナはなのはの大胆さに感心し、蓮牙も同意するが、レイナの冗談交じりで殺気立つ。
そこに勇斗が止める。

勇斗「ま、あそこに行って俺達は良い友が出来たな」

奏「お兄ちゃん…」

城に向かって歩き出す勇斗。

すると立ち止まって奏達に言う。

勇斗「お前ら何やってんだ？早く着いてこい」
奏「あ、まって」

奏達は勇斗の後をついていった。

勇斗（…また会おうぜ）

〈第一章〉

〈完〉

〈次回予告兼おまけ〉

奏「少女達の別れを告げ、我が城へと帰った勇斗一行。しかし、事件はこれで終わりではなかった!」

勇斗「おい何やってんだコラ」

奏「どういうわけか魔帝界に住んでいた魔物たちがなのは達の世界に襲撃を始めたのだ!」

なのは「え!?! 私たちどうなるの!?!」

奏「けれど安心して！地球がピンチになった時、そこに地球ヒーロー・アースライダーが現れて平和を取り戻すのよ！」

レフィア「ちなみにアースとは英語で地球と言いますわ」

レイナ「あ、それって病院にいる人？」

シーナ「それはナースだ」

奏「次回『聖王少女大戦記』第二話、『地球ヒーローVSモンスター軍』明日を切り開け！我らが英雄！」

蓮牙「なあ、そのヒーローって強いのか？」

聖華「それは架空の存在ですのでいません」

メイ「っていうか奏さん。なんでこんな企画を？」

奏「成り行き？」

勇斗「なんでだ」

奏「あ、そうそう、次回から質問コーナーを始めようと思いますので何かあったら質問をください」

メイ「質問は一人3つまで、2つでも1つでもいいので」

勇斗「俺達に関する質問を何でもいいからくれよな」

シーナ「では読者の者よ。また会おうぞ」

第十二話：別れの時（後書き）

質問・感想お待ちしております。

第十三話：建設！魔天大学院！（前書き）

日常編のようなものです。第二章始め！

第十三話…建設！魔天大学院！

勇斗となのは達が別れた数カ月の日が流れた。

魔帝界のあるところ

ゴブリン「なあなあ、しってるかあの噂」

ゴースト「『勇斗様と奏様達が異世界へ渡った』ってことか？」

ガーゴイル「それもそうだが、その異世界に勇斗様に対して想い人が出来たって話だぜ？」

サキュバス「え！？勇斗様に！？」

ハーピー「それって10代に満たない子供でしょ？」

アルラウネ「それ唯の子供じゃん」

グリフォン「っていうか俺その世界に興味があるんだが」

ゴーレム「ゴー？その場所に強い奴がいるのかゴー？」

サイクロプス「俺そこ行きてー！」

ドラゴン「興味あるな…」

スライム「そこで遊べるのかな？」

コカリトス「俺達も行きたいな。でも勝手に行ったら怒られるな」

ウルフ「行くにはまず勇斗様に聞くべきじゃないのか？」

マリオネット「それもそうだな」

マーメイド「…勇斗様が現れるのはいつになるやら」

魔王城・魔王室

そこで一人に忍者らしきものが勇斗と密会していた。

??? 「勇斗様、いかがなさいましょう」

勇斗「…少し考えさせてくれ、下がっていいぞ、影夜」

影夜「はっ！」

影夜と呼ばれた忍者は手レポートしたかのように消えた。
そして勇斗一人になる。

勇斗「…全く、誰だろうな、俺達が異世界へ行っただという馬鹿な噂を流した奴は…」

勇斗はため息をつく。
帰ってから魔帝界や地上界や天界に噂が絶えなくなっている。

勇斗「ま、どの道何時かばれることでもあるな」

そう言って昔なのはの世界で買った携帯を取り出す。

勇斗「奏」

奏『お兄ちゃん？珍しいね。もしかして噂のこと？』

勇斗「ああ、一応お前の部下どもと住人達を集めてくれ」
奏『え？それって…』

勇斗「詳細は後だ。じゃあな」

そう言って電話を切る。

勇斗「さて、小うるさい奴らを少し遊ばせるのもいい機会だな」

魔帝界・イベント会場

そこでたくさん魔物たちが集まっていた。

それだけでなく、天界からの住民や奏の部下達もいる。

そして勇斗が現れ、住民たちはざわめく。

勇斗「静粛に」

たった一言で静かになった。

勇斗「まず初めにこのイベントは行われたのは他でもない。どっかの馬鹿が『俺達が異世界へ行った』という噂を流してたということだ」

蓮牙「それなら勇斗、その馬鹿な奴はあたしが捕まえた」

蓮牙が犯人を引きずりだす。レイナだった。

レイナ「いやゝ、どうせなら面白い方がいいと思って…」

グワシッ！

勇斗「自称最強の使い魔はそんなに口が軽いのか？ あん？」

黒い気を発してレイナの頭を鷲掴みして睨む勇斗。その気に周りの

人はおびえる。

レイナ「いや、あの、す、すいませんでした・・・」

頭から血を流し、その場に捨てられるレイナ。

勇斗「全くお前は、だがまあ、こいつらがその世界を知るいい機会だ」

レイナ「え？それって……」

周りがざわめく。

勇斗「この際はつきり言おう。『異世界の移住を許可する!』」

[illegible]

しばらくの沈黙後、魔物軍は嬉しそうに雄叫びをあげた。

勇斗「た・だ・し！」

優斗が待ったをかける。

勇斗「異世界へ行くにはそれなりのルールを守らなきゃいけないぞ？分かったな？」

魔物軍「分かったぜ（わ）（ツス）！」

魔物軍は承諾した。

アテネ「あの、奏様」

奏「?何?」

金髪で赤スカートで聖なる槍を持つ女神・アテネが奏に声をかける。

アテネ「ずっと言い辛かったのですが、私達も行ってもよろしいでしょうか?」

奏「いいんじゃない?自由にあそこ行っても」

ラムウ「かーっ!何とありがたきこと。魔物軍だけあそこに行かなくてはなにをしかすか分からんからの」

オーデイン「ようやく我々の出番が出来るな」

ペガサス「メタなことだけどやっと活躍出来るぜ」

天界組もうれしそうだ。

ルドラ「よし!まずは俺様が第一にひと暴れして…」

ズドッ!

ルドラ「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!」

炎の魔神・ルドラが勇斗から魔力玉をぶつけられた。

勇斗「アホか、その世界で派手なことをするなつての。怪談程度ならいいが」

全員(そこはいいんだ・・・)

オーガ「ところで、俺達は一体どこに住めばいいんだ?」

オーガが何げなく言った一言に周りの住民はあっ!と思い出す。

異世界へ移住するなら住む場所が必要なのだ。

だが勇斗は笑う。

勇斗「安心しろ。手配は出来ている。まずはその場所を案内するか」

勇斗達や住人達はゲートを通って行った。

地球・海鳴り市の隣町・誰もいない学校

勇斗達は学校らしき建物の前に降り立った。

しかしその学校はどこもかしこもボロボロでとても人がいる気配はない。いわば廃校舎だ。

勇斗「あれくらいならお前達も文句はないだろう？」

サキュバス「ほえ、たしかに広いです」

ガーゴイル「廃墟学校か？」

オーガ「お、おれにも見せろ」

サハギン「どんなところなんだ？」

なぜかバッグの中から魔物の住人が顔を出して言った。

なぜモンスターがバッグの中にいるかというと、バッグの正体は『ベースバッグ』と呼ぶ魔物等どんな人でも入れるアイテムなのだ。そして持ち運びに大変便利。

ゴースト「あれに住むんですかい？」

勇斗「そうだ」

勇斗が答えると、少女のような植物モンスター・アルラウネが苦い

顔をする。

アルラウネ「って言うかあのままにするって言わない？」

勇斗「アホ、再改築するんだよ」

アルラウネに突っ込む勇斗。

蓮牙「ようはあれを立派にさせて住みやすくするってことさ。お前ら、仕事を始めるぞ」

邪鬼族「ヘイ、姉さん」

3、4メートルくらいある慎重で角がある邪鬼族のオーガが出てくる。

勇斗「お前達も手伝った方がいいぞ」

魔物軍・天界軍「はい」

ベースバッグからどんどん魔物と天使達が出てくる。

みんなで作業を始めた。

ちなみにレフィアは結界を張って作業をした。

みんなと改築して数時間が立った。

途中でサボる奴や遊びに行く奴や一部壊す奴やセクハラされる奴などいたが、立派な学校が出来ました。

ほとんどの仕事は鬼系の皆さんですが。

ニースヘッグ「ずいぶん立派に出来たな」

ゴ布林「俺たち専用の学校だぜ！」

レディーファイター「立派になったわね」

ヒーラー「保健室の設備も出来たし」

アーマーナイト「トレーニングルームも完ぺきだ」
バウンサー「警備システムもある」
ビーストテイマー「こりゃ楽しそうだねえ♪」

亜人族の者は満足そうに見る。

勇斗「さてと、こうして俺らの住む場所が決まったわけだが、名前をつけよう。魔天大学院な」

勇斗は新しく変えたこの学校を魔天大学院と名付けた。

奏「いいねそれ。魔天大学院」
レフィア「異論はありませんわ」
シーナ「賛成だ」

奏達も他の者も魔天大学院の名前に高評価している。

勇斗「よし、これを記念して宴を起こすか？」
蓮牙「いいねえ！それは大歓迎だ！」

蓮牙はどっから持ってきたのか10個の酒瓶を持ってきた。

勇斗「またかお前は・・・」
奏「とはいっても満更じゃなさそうじゃん」
サキュバス「勇斗様。私と一緒にお酒を注ぎましょうよ」
ネコマタ「あたし酒嫌いニャ。マグロをとってくるニャ」
プリニー「日本酒、焼酎、そして団子を持ってくるッス」
ドラゴン「酒ならこの『龍火』をお勧めだ」
イエティ「アルコール率105%の酒か！なら飲み比べするか？」
蓮牙「飲み比べなら負けないね！」

フェアリー「誰か木の実持ってる？
キメラ「肉を持って来い！」

その後、なんやかんやで宴が始まり、そして終わった。
その時シーナ含む夢魔達が勇斗に夜這いをしに来たが奏達が全力で
阻止したとか。

第十三話：建設！魔天大学院！（後書き）

感想と質問を待つッス。銀八先生みたいに。

第十四話：噂の魔法少女達（前書き）

なのはサイドです。では。

第十四話：噂の魔法少女達

魔天大学園が改築されて数日後、季節は春中旬、

そこで仲良く歩く5人の少女達がいた。

『闇の書事件』を解決したエースたち、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてなのだ。

後二名のアリサ・バンニグスと月村すずかは一般人です。

アリサ「なんか失礼なことを言われた気がするけど」

すずか「気にしたら負けだよアリサちゃん」

すずかはアリサをなだめる。

なのは「にやはは、それより早く行こうか」

はやて「そやな」

なのは達は学校へ向かおうとすると、

ドンッ！

なのは「にゃっ！」

???? 「ん？」

誰かにぶつかった。

フェイト「大丈夫？なのは」

なのは「うん、あの、ごめんなさい」

なのははぶつかってしまった人に謝る。

その人は黒い髪に学生服を着ているようで、大学生かと思える。

男子学生「なんだ貴様ら？我に対してそn「セイヤアアア！」おごっ！」

男子生徒が何か言おうとしたら後ろから赤いロングの女性がチョップをしてきた。

その女性も学生服を着ているようだ。

なのは達は哑然としている。

女子生徒「ごめんね、この子は口が悪い性格だからあまり気にしないでね？」

なのは「え？あ、はぁ・・・」

なのはは声を掛けられて正氣に戻る。

男子生徒「いつつ、なにをする気」「はいはいあんたはこっち来なさい」「ぐおっ」

女子生徒は男子生徒を引っ張ってひそひそ話をする。

女子生徒「あんた自分からばらす気？いくら誇り高い竜族でも普通ダメでしょ？」

男子生徒「・・・仕方ないであろう、思わず口が出てしまったのだからな」

女子生徒「まだ慣れないのはどうかと思うけどもう少し耐えてよね」
男子生徒「・・・善意する」

ひそひそ話が終わった頃、奥からバンダナつけた男子生徒と、茶色

い短髪の女子生徒が走ってきた。

バンダナ生徒「おい、そこで道草しないで早くしろよ！」

女子生徒2「早くしないと遅刻するよ！」

女子生徒「はっ！やばっ！急がないといけないわ！」

男子生徒「ちっ！遅れて罰受けるのはご免だ！」

大学生達はみんなして走り出した。

フェイト「な、何なんだろうあの人たち」

はやて「うちにはよう分からん」

アリサ「って今思い出したんだけど学校に遅れるじゃない！」

なのは「にゃっ！そうだった！」

すずか「早く急ごうよ！」

なのは達も気付いて学校へ走った。

聖祥大付属小学校・四年生教室

なのは達はなんとか間に合い、現在屋上で昼食の時間である。

生徒1「なあなあ知ってるか？あの学校の話」

生徒2「それって『魔天大学院』って名前の？」

生徒1「そうそう」

なのは「ねえ、何の話してるの？」

なのは達は同級生の生徒の話に興味を示した。

生徒1「最近噂の魔天大学院の話だよ。ちょうど今日の新聞にそれが乗ってるから、はい」

生徒がなのは達にかばんに入ってた新聞を見せる。

『特報！魔天大学院生徒不良グループ撃退！？』

そのタイトルと、写真に10人の魔天大学院の生徒らしき人がボロボロ状態で映っていた。

背後に病院送りされた不良が映っていた。

なのは達は写真に魔天大学院生徒達を見て、なのはにぶつかったあの男子生徒が映っていた。

なのは「あ！この人知ってる！」

アリサ「あ！なにはがぶつかった奴じゃない！」

生徒1「え、っ？魔天大学院の人に会ったの？」

なのは達はコクッと頷いた。

その時話を聞いた同級生たちが群がった。

生徒3「その人に会ったの？」

生徒4「その心境を教えて！」

生徒5「そいつって怖い奴だったのか？」

などなど質問攻めするのでなのは達は困惑する。
すると一人の生徒がなのは達に質問した。

生徒6「じゃあ、魔天大学院の理事長に会った？」

なのは・フェイト・はやて・アリサ・すずか「理事長？」

なのは達は首をかしげる。

生徒6「なんでも魔天大学院の理事長って20代ぐらいの人らしいよ。そんでもってスツゴイイケメンな人だって。あと特徴は確か黒い髪で服も黒かったね」

説明を受けたなのはは少し考え込む。

なのは（黒い人・・・もしかして・・・）

なのははある想い人を想像する。

自分もフェイトちゃん達も好きなあの人を。

放課後の帰り道

アリサ「で、その魔天大学院の場所調べたら隣町にあるってことじゃない」

フェイト「まさか行く気なの？」

アリサ「何言ってるの。見学よ」

なのは達は魔天大学院へ寄り道した。

魔天大学院・正門

なのは達は今魔天大学院の正門の前にいる。

なのは「ふえ〜」

はやて「こりゃ大きいな〜」

アリサ「さすが、大学なだけあって大きいわね」

なのは達は魔天大学院を見て驚く。

すると、魔天大学院のガードマンらしきスーツを来た仏顔の男が現れる。

ガードマン「なんだお前達は？この魔天大学院になにようだ？」

フェイト「あ、いえ、私たちこの魔天大学院を見ているだけです」

ガードマンの質問にフェイトが答えると、

ガードマン「冷やかしなら帰れ。ここはお前達が来るところではない」

無表情で帰るように言うガードマン。

アリサ「んなっ！子供に対してその口のきき方と態度は何！」

すずか「あ、アリサちゃん落ち着いて！」

ガードマン「言っておくが俺は子供にも厳しい性質でな」

ガードマンの態度に怒りだすアリサを必死に抑えるすずか。

ガードマンはどうでも好きそうに答える。

??? 「あら？あなた達朝あった子じゃん」

門の扉から朝あの男子生徒をチョップで止めたあの女子生徒がのぞいていた。

なのは「あ、あなたは」

ガードマン「おい、そこでなにしてる。早く戻れ」

女子生徒「いいじゃんちよつとくらい。よつと」

手をひらひらさせて言う女子生徒。

そして扉から飛び降りる。

女子生徒「あんた達見学するのはいいけどあまりここに干渉するのは良くないよ？」

なぜか女子生徒がなのは達に忠告して来た。

なのは「え？どういうことですか？」

女子生徒「それはね、志村く、後ろく」

おふざけに言う女子生徒は無視して後ろへ振り替えると、

男「ヘッヘッヘッ」

明らかにガラの悪そうな男達数十人がいました。

アリサ「えく・・・」

はやて「アレのことかいな・・・」

すずか「え、えっと・・・」

フェイト「か、囲まれてるよ」

なのは「こ、怖いよ・・・」

なのは達は一ヶ所にかたまって震える。

リーダーらしき男が指差して言う。

リーダー「テメエラ！俺達の友を痛めつけたお札をしに来たぞこの野郎！！」

女子生徒「ダチ？ああ、この前ぼこったあの奴らのこと？」

女子生徒が言ったあの奴らとは、魔天大学院生徒10人でケンカ（という名の半殺し）にしたあの不良グループのことである。

リーダー「うっせえよテメエら！！ダチの仇を取ってやるうううう！！！！」

男達「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

なのは達「えひひひひひひひひ！！！！！！」

リーダーが怒り出して仲間と共に一斉に襲い掛かった。
が、女子生徒は余裕な顔をして、

女子生徒「みんな、この人たちが焼きを入れて欲しいって！」

シュッ！ズドドドドドドドドドド！

不良組「うぎゃああああああああ！！！！」

女子生徒が学校に向かって叫んだ後、影が通り過ぎて不良グループを半分倒した。

リーダー「な、なんだ？」

「????」「ワリいなお前ら。精神的にあの世に行くことになるぜ?」

現れたのは魔天大学院の男子生徒十数人。

しかも見ただけで分かるほどかなり強そうだ。

リーダー「な、なんだお前ら！」

不良「あ、兄貴! あいつのマークを見てくたせえ!」

すると一人の不良が一人の魔天大学院生徒の額に黒いオーブを持つドラゴンのようなマークがあった。

しかもそのマークは少しアルファベットのGに見える。

リーダー「ま、まさか、“ギドラギルド”!?!?」

リーダー含めマークを見ておびえる。

ギルド員「言っとくが俺達もな」

一人に男子生徒が言って、男子生徒全員がマークを見せる。

ギルド員「さあ、お仕置きの時間だ!」

ギルドメンバー達はお仕置きという名の半殺しを始めた。

なのは「あの、あのマークって?」

女子生徒「ギドラギルド、私達魔天大学院の正義集団でその強さはどんなプロの連続殺人者でも相手にならない」

女子生徒が語り始める。

女子生徒「そしてその者に狙われた者は、決して生きて帰れないってね」

そう言って右肩に書かれたマークを見せる。

フェイト「え！？あなたも！？」

「？？」「つというか私達もだけどね」

つと、それぞれ同じマークが付いた女性生徒達が現れた。

女子ギルド員「それじゃあ、お仕置きね」

そして女子達もお仕置きという名の半殺しに向かった。

そして1分もたたないうちに終わった。

アリサ「早っ！」

すずか「瞬殺…」

アリサは驚き、すずかは少し苦笑いを浮かべる。

女子ギルド員「そんなわけで巻き込まれないうちに帰った方がいいわ。って言うかもう夜近いし」

なのは「ああ！早く帰らないと！」

はやて「えつとあれや、さようなら〜！」

すずか「お元気で〜」

生徒達「じゃあね〜／またな〜」

なのは達は慌てて家に帰りました。

???「全く、相変わらずしか言えんな、なのはは」

遠くから見つめる魔天大学院の理事長・勇斗はなのはを見続けるのだった。

そして帰ったなのはたちは家族に少し怒られたそうだ。

第十四話：噂の魔法少女達（後書き）

次は転生者が現れる？

第十五話..イレギュラーハンター(前書き)

転生者VS勇斗。まあ結果は見えていますかね。

第十五話…イレギュラーハンター

ここは天界、神族、天使族が住む世界である。

そしてそこに2つの迷える魂が神族のアテネの前にいた。

魂（男） 「なんてこった、こんな理不尽な死に方というより終わりはあんまりだ！俺はやり直しを要求するぞ〜！」

魂（女） 「……………」

声からして男性の魂は、死んだことに否定している。

実は神族のゼウスという者が、誤って「あ、手が滑った」などというノリで人間界の人間二人、つまり目の前にいる魂になった二人を殺してしまったからだ。

女性の方の魂はなんだか無言である。

アテネは頭を抱える。

アテネ 「確かにこちらのゼウス様のミスのせいで死んでしまったのは非礼を詫びますが、魂を戻したところで肉体に戻りません」

魂（男） 「え？俺らの体もうないの？最悪だー！！」

男はショックを受けた。

魂（男） 「普通にデートやってただけで死ぬだなんてそりゃないよ〜」

男と女はデートの最中交通事故に会って死んでしまったようだ。アテネはため息を吐いて言った。

アテネ「今回はミスで死んでしまったので異世界の転生を行います」
魂（男）「なに！二次作品でよくあるあの転生だど！？」
魂（女）「・・・・・・・・・・・・・・・・」

転生という言葉に反応する男。

男は漫画・アニメが好きなオタクなのだ。
女の方はどうでも好きそうな感じである。

魂（男）「ならば転生場所は『リリカルなのは』にしてくれ！！」
アテネ「それは構いませんが、何のためにそこへ？」

アテネは真剣な顔で男を見る。

魂（男）「もりゃもちろん！なのはちゃん達を俺の物にしたいからさ！！！」

男は本音を明らかにした。

アテネは表情を険しくする。

アテネ「・・・・・・・・まさかあなたも？」

アテネは女の方を見る。

魂（女）「違う、こいつが馬鹿なだけ・・・」

魂（男）「馬鹿って言うな！紳士と呼べ！」

女は興味なさそうに言う。

アテネは安心な感じになった。

魂（男）「まったく、いつも内気なところは相変わらずだな」

魂（女） 「あなたもオタクなところも相変わらず」

男と女は話し合った後、アテネは男に言う。

アテネ 「話はよく分かりました。女性の方はいいとして、あなたはこちらでプリニーとなってもらいます」

魂（男） 「・・・・・・え？ すいません、今、プリニーになれって言いましたか？」

アテネ 「はい」

しばらくの沈黙後：

魂（男） 「ナニイイイイイイイイイイ！！！！？ プリニーだとオオオオオオオオオオオ！！！！？」

男は絶叫した。

魂（男） 「ちょ、待て、プリニーってまさかペンギンの姿で一生働き続けるというあのプリニーか？」

アテネ 「はい、そうです」

アテネは普通に答えた。

魂（女） 「いいじゃない？ 痩せれるわよ？」

女がそう言うと、男はキレる。

魂（男） 「体型の問題じゃない！ プリニーは一日20時間労働でボinasがイワシ一匹なんだぞ！」

魂（女） 「あんたの頭が腐ってるからじゃないの？」

魂（男）「ちっがう！プリニーになる位なら・・・無理やり転生してやる！」

魂（女）「え、ちよっ」

アテネ「あ！あなた！」

男は女を無理やりひきつれて転生してしまった。

アテネ「・・・仕方ありません、あの方に任せるしかありませんか、
イレギュラーハンター
異能者の狩人に」

地球・海鳴り市

??? 「はー、やっと撒いたぜ」

??? 「・・・・・・・・・・」

男は安心したような顔をする。逆に女は納得いかなさそうな顔をする。

しかも2人は前世より変わっていた。

まず男の方は某魔道士ギルドのラクサスとほぼそっくりの姿である。そして女の方はロングの茶色い髪に以外とおしとやかな女性である。しかも胸はかなりでかい。

男転生者「まあ慌ててたから名前決めてなかった。姿がラクサスだからラクサスにしとくが、お前はなんにするんだ？」

女転生者「別に、強いて言えばラストね」

ラクサス「ラスト、最期って意味か」

ラスト「・・・・・・・・・・（ちがうよ）」

ラストは内心ラクサスの言ったことを違うと思う。

????「おまえらか?イレギュラー異能者ってのは」

ラクサス「ん？」

声が聞こえたので振り返ると、闇の衣をまといし魔王、勇斗がいた。

ラクサス「なんだあんたは！」

勇斗「俺は勇斗。決まりから外れたあんたらを狩りに来た」

剣を構えて殺気を放つ。

ラストはなぜか避難していた。

ラクサス「なに!? プリニーになってたまるか! ライトニング!」

ラクサスは電気のスフェアを勇斗に投げる。

しかし勇斗は右手を前に出して当たった途端にスフェアが消えた。

ラクサス「き、消えた?」

勇斗「イマジンブレイク、異能の力をかき消す力だ」

ラクサス「イマジンブレイカーかよ! ならこいつで」

ラクサスは少し滅龍魔法者化してブレスの構えをとる。ドラゴンスレイヤー

ラクサス「くらえ! 雷龍の咆哮!」

電撃の砲撃のような攻撃を繰り出した。

勇斗「レイナ」

レイナ「ハイ参上！」

何処からかレイナが勇斗の前に現れた。

ラクサス「誰が現れようが無駄だ！！」

そして電撃の砲撃は2人に直撃した。

ラクサス「ふはははは！どうだ俺の電撃の力は！」

ラクサスは高笑いする。

が、目の前に異変が起きた。

レイナ「いい能力持つてるね」

ラクサス「なっ！？電撃を吸収しているだど！？」

レイナの体から生えた8本の触手が電撃を吸い取ってるのだ。
そして全部吸い取ると、

レイナ「喰ったら力が湧いてきた！」

ラクサス「オオイ！もろパクッてねえかそのセリフ！」

ラクサスは突っ込む。

レイナ「それじゃあ、ライデンボウ雷電砲！」

ラクサス「ぐあああああああああ！！！！」

触手を合わせて砲台のような形になり、発射された黄色い砲撃でラ

全力で拒絶するプリニーだが、地獄へ転移されました。

勇斗「さて、次はお前だが」

ラスト「……………」

勇斗はラストを見る。

勇斗「お前も違反者だが、例外として見届けてやる」

無理やり転生させられたラストは例外とされたためここに移住することになった。

ラストは安心の顔になる。

シーナ「お前が新しく入ってきた奴か？」

勇斗の後ろからシーナが現れる。

すると、シーナを見たラストはドキンッと心を高鳴らせた。

ラスト「……見つけた、私の理想の人……」

シーナ「…その反応、どうやら私に興味があるらしいぞ？」

勇斗「……（マゾかよ……）」

勇斗は呆れ半分苦悩半分に頭を抱える。

実は何とラストは前世からマゾな性格をしているのだ。
内気なところはマゾを隠すためである。

シーナ「ところでお前に名前は？」

ラスト「……ラスト」

シーナ「ラスト……色欲か？」

ラスト「∴コクッ／＼／／」

顔を赤くさせて頷くラスト。

シーナ「よし、らすと、お前は私に部下にしてやろう」

ラスト「はい、お姉さま」

シーナ「フフフ」

シーナはラストを連れて帰っていった。

勇斗「・・・いたりするもんなのか？ああいう奴が」

勇斗は少し不安になった。

一方プリニーになった奴は、

???「オラプリニー！ちゃきちゃき働け！！」

プリニー「ヒイイイイイイイイイ！！（もう嫌だああああ！！！
助けてくれエエエエエエエ！！！）」

主人に地獄級の重労働（本人にとっては地獄その物）をさせられて
いました。

奏「奏ちゃんの、お便り質問コーナー！」

プリニー「ぶっちゃけ言うど質問に答えるコーナーッス」

奏「それじゃあまず第一に來たこの方！ペンネーム『マサ』さんからの質問！『こんにちはマサです

リアルが忙しくなってきた為中々感想遅れなくて済みません質問なんですが奏さんの聖王の魅力って奏さんが意識する事で発動するんですか？それとも無意識のうちに発動するのでしょうか？教えてください』これは意識があってもなくても男共は寄ってくるからね。けどむさい男とかは問答無用でけり飛ばすから」

プリニー「えげつないッスね」

奏「そんなわけで、質問どんどん募集してますよ」

第十五話：イレギュラーハンター（後書き）

質問どんどん来てください。

第十六話..まさかの再会

現在の時刻は午後2時の日曜日、公園で仲良く話し合っている少女達がいる。

なのは「それでね、お母さん新メニューを挑戦してみたそうだよ」
はやて「ほく、そりゃおいしそうやな」
フェイト「失敗したりしないかな？」
アリサ「一流のケーキ職人でしょ？」
すずか「心配し過ぎだよフェイトちゃん」

言われずもがな、なのは達5人娘である。

なのは「そうだね」

なのはは笑う。

するとはやてが聞いてきた。

はやて「なのはちゃん、一体何気にしとんな？」

なのは「え？な、なんのこと？」

はやて「魔天大学院の理事長のこと考えとんな？」

はやてに確信を突かれ、なのはは白状する。

なのは「うん。黒い人でかっこいい人って聞いてもしかして思ったんだけど…」

アリサ「今だ確信できずにいるって？」

なのはは肯く。

するとアリサがとんでもないことを言い出す。

アリサ「だったら会いに行けばいいじゃない」

なのは「ふえっ!？」

すずか「あ、アリサちゃん!？」

はやて「こりゃまあ直球な案やなあ」

なのはとすずかは驚き、はやては呆れ半分面白半分な感じになる。

フェイト「だ、駄目だよアリサ」

アリサ「何言ってるのよ。その人に会うチャンスなのよ。たまたま見つかったら「ごめんなさい、私ここが何処だか迷っちゃって」って言い訳すればいいのよ」

はやて「スッゴイ偏ったいいわけやな」

はやてはクスリと笑う。

アリサ「それじゃあさっそく行くわよ!」

なのは「そ、それは分かったけどとりあえず放して」

エリを掴まれ無理やり引っ張られるなのは。

フェイト、はやて、すずかは苦笑いしながら困惑しながら後をついて言った。

アリサ「あっという間に付いたわね」
すずか「あっという間すぎるけど…」

すずかはちよつと突っ込む。

正門を見ると、この前のガードマンがいない。

アリサ「この前のガードマンがいないわね。これなら潜入できそうね」

フェイト「ホントにいいのかな？」

はやて「賽は投げられたんやで？腹くくっていかなあかん。それにちやうどあそこ開いておるし」

はやてが指差す先には、開けっ放しになっている扉だった。

なのは「むゝ、しかたない」

アリサ「ヤル気になったみたいね」

はやて「なのはちゃんは真っ直ぐやな」

フェイト「そう言う問題じゃないと思うけど…」

すずか「本当に大丈夫かな・・・」

なのはは腹をくくり、アリサとはやてはなのはを励まし、フェイトとすずかはまだ心配になって中に入ってしまった。

男子生徒「やばいやばい！ホントやばい！」

魔天大学院の生徒が慌てて門の前まで走ってきた。

男子生徒「遅刻した挙句門を閉め忘れるなんて僕ホントついてない

よゝ」

そう言って門を閉めた。

すると、門から白い波動が出て、四角状に囲んだ。結界である。

男子生徒「誰かが無断で入ったらどうしようもないよなこれ」

そう言う男子生徒の体が変化した。

黄色いY字型の触覚と青いボディのサンショウウオのような魔物になった。

ワースラッグ「追試は嫌だよなゝ。早く終わらせないと」

サンショウウオモンスター・ワースラッグは知らない。

この中になのは達が潜入してしまったことを。

なのはサイド

なのは・フェイト・はやて「!？」

なのはとフェイトとはやては違和感を感じた。
結界が張られた。

なのは《フェイトちゃん》

フェイト《うん、これは強力な結界だ》

はやて《破るのは苦労するさかい、どうしたもんかな》

ゴーレムは片手でなのは達を掴む。

アリサ「ちょ、はなさない！」

ゴーレム「理事長に報告だ。そこで判決を下してやる」

ゴーレムはなのは達を連れて（というか無理やり）理事長室へ向かった。

理事長室

優斗が窓の外を見ていると、影夜が現れる。

影夜「勇斗様、御報告があります」

勇斗「大体見当はつくが、なんだ？」

影夜「魔天大学院に侵入者です。現在連行しています」

勇斗「…通せ」

数分後：

ゴーレム「おらよ」

なのは・フェイト・はやて・アリサ・すずか「きゃあっ！」

ゴーレムが扉を開けてなのは達を放り投げた。

アリサ「ちよっと！もっと丁寧に扱いなさい！」

ゴーレム「黙れ小娘、後は任せましたぜ、魔王様」

ゴーレムはそう言って扉を閉めた。

なのは達は理事長・勇斗を見る。

しかし目の前の人を勇斗だと気付いてない。

なのは以外は。

なのは（この雰囲気…そして心から感じる懐かしさ…まさか）

勇斗「どんな奴が来るかと言えば、意外と懐かしい奴がいたもんだ」

勇斗は椅子から立って振り返る。

なのは達は勇斗を見た時驚いた顔をする。

なのは「勇斗…さん…?」

勇斗「よう」

なのは「勇斗さん!」

なのは嬉しくなって勇斗に駆け寄ろうとした。

影夜「魔王様に近づくべからず」

だが影夜がなのはの後ろから口をふさいでナイフをつきつける。

勇斗「おい影夜、手荒なまねすんな」

勇斗が言うと影夜はなのはを離す。

なのは「し、死ぬかと思った…」

なのはは深呼吸する。

フェイト「それはともかく勇斗、久しぶり……って言えばいいかな？」

アリサ「3か月ぶりね」

すずか「お久しぶりです勇斗さん」

はやて「あの時お世話になったな」

勇斗「久しぶりだな」

???「ねえ、なのはちゃんが来たって？」

挨拶をしていると、扉から奏が現れる。

なのは「奏さん！」

奏「わぁ、なのはちゃん達久しぶり〜」

奏もうれしそうに言う。

奏「それにしてもなのはちゃん、なんでこんなところに？」

奏が聞いてみると、なのはは答える。

なのは「実は……」

少女説明中……

なのは「というわけなの」

奏「なるほどね、確かにお兄ちゃんのかっこいいし黒いしね」

奏は納得する。

勇斗「それとこれとは話が別だがな」

勇斗の一言に縮こまるのは達。

勇斗「どうやって入ったか聞かなくて、俺らの秘密を知ったからには責任を持ってもらおう」

アリサ「秘密って……一体何なのよ！」

勇斗はため息をついた後、言った。

勇斗「なのは、俺らが異世界の訪問者だって知ってるよな？」

なのは「う、うん……」

勇斗「実はあのドラゴンもゴーレムも俺らの世界の住人なんだよ」
 なのは達「ええっ!？」

あのぶつかったドラゴン・ニースヘッグと無理矢理取れ出されたゴ
ーレムが勇斗の世界の住人だということに驚いた。

勇斗「更に種を明かすが、実はここの生徒全員人間ですらない！」
なのは達「ええええええええええええええええええええええええ！！！？」

「またもや驚くのは達。」

勇斗「本来ここに迷い込んだ奴は・・・どうなるか分かるよな？」

なのは達は息をのみこむ。

勇斗「・・・俺の条件を飲んだら許してやってもいいぞ？」

フェイト「えっと・・・どんな？」

フェイトが聞く。

勇斗「世間に・・・ましてや両親や管理局にこのことを話すな」

真剣な顔で条件を言った勇斗。

なのは達は考える。

秘密がばれたら世界中どころか管理局もパニックになる。そう考えたなのは達は決断した。

なのは「分かりました勇斗さん」

フェイト「分かったよ勇斗」

はやて「約束は守るで」

アリサ「勇斗の頼みなら仕方ないわね・・・」

すずか「絶対秘密にします勇斗さん」

勇斗「そうか、いい子だお前達」

優斗は微笑んでなのは達の頭を撫でる。

なのは達「あっ・・・／／／／」

撫でられたなのは達は顔を赤くする。
が、同時に近くに殺気を感じた。

なのは達はゆつくり振り帰ると、殺気全開の奏がいた。

奏「お兄ちゃんになでられやがって・・・覚悟はいいかこのクソ女^{アマ}共・・・」

なのは「ぜ、全員退避~~~~~!!!!」

なのは達は理事長室から逃げだした。

はやて「ま、待ってえな！」

しかしはやてはまだ車椅子なためスピードが遅い。
このままでは捕まると思ったら、

レイナ「こっち」

レイナがはやてを連れて隠れた。

はやて「レイナさん」

レイナ「静かにしててね。奏は勇斗絡みになると見境ないから」

はやては苦笑いを浮かべた。

その道中、なのは達は奏から逃げ続けた。

途中生徒に化けた魔物たちがそれぞれフェイト、アリサ、すずかを匿ったが、残りのなのはは今グラウンドへ出た。

なのは「ハアハアハア…う、うまく…まいた…かな」

運動音痴のなのはにとって逃げることはつらいらしい。

奏「みーつけた！」

なのは「にゃ!？」

白いドラゴンにまたがった奏が目の前に現れた。

奏「さあなのはちゃん、何か言い残すことある？」

なのは「わ、私は・・・」

奏が問い詰めると、花卉がドラゴンの鼻に入った。

ドラゴン「フゴッ!・・・ゴ・・・ゴゴ・・・」

奏「ん？」

様子がおかしいドラゴンに気付いた奏。

ドラゴン「ゴゴゴ!・・・ゴゴゴゴゴ!!!」

奏「うわ、ちょ待って!」

暴れ出すドラゴンを落ち着かせようとする奏。

この時なのはは気付いていない。

なのは「私は、勇斗さんのことが・・・だ、だ、だ・・・」

何か言おうとするのはだが、ドラゴンがくしゃみと同時にブレスを出してしまった。

ドラゴン「フォガアアア!!!!!」

なのは「だ~~~~い~~~~す~~~~・・・~~~~ふえ?・・・ふえええ

え
え
！ ！ ！ ！ ？ ？ ？ ？ ？ ？ ？」

プリニー・ゴ布林・ガーゴイル・スライム・ゴレム・ゴースト・ガルム

「どわあああああああああああああ……！！！！！」
エンプーサ・ネコマタ・ラミア・フェアリー・ウィッチレディ・ハ
ーピー

「きやああああああああああああああああああ！！！！！」

なのははブレスを受け、その他の魔物たちも巻き添えを喰らってしまった。

勇斗「……いつもどおりの平和だな」

勇斗はそんな光景を見て静かに笑った。

第十六話..まさかの再会（後書き）

立派な再会…かもしれない。

第十七話：勇斗の部屋に訪問！

なのは達に秘密がばれたあの日から、なのは達は勇斗達のいる魔天大学院へ遊びに来るようになった。

なのは「勇斗君、来たよ」

そしてなぜかなのはが勇斗を君付けで呼ぶようになった。

勇斗「順応の早い奴だな」

なのは「それ褒めて言ってるの？」

勇斗「さあな」

いつものようになのはを茶化す勇斗。

奏「お兄ちゃん」

勇斗「ほれ」

扉から奏ができて飛び上がってきた。

勇斗は何時から持ってたのかロープを取り出して奏を縛り上げた。

勇斗「お前も懲りない奴だな」

奏「私はお兄ちゃん一筋だよ。あ、出来れば胸を中心的に縛って」

勇斗「やるな！」

勇斗は奏を踏みつける。

なのは達は顔を引き攣らせる。

するとレフィアが現れる。

レフィア「勇斗様、そろそろ…」

勇斗「時間か？しかたないな」

フェイト「帰るの？」

フェイトが寂しそうな顔をする。

勇斗「ああ、ちょっとマンションに越してあるからな」

奏「ちよつとあんた達？何でそんなことを聞くわけ？まさかと思うけど…」

奏の予感は的中した。

はやて「勇斗さんのところにお泊まりや♪」

アリサ「一応勇斗の家見てみたかったし」

すずか「それに両親の許可ももらったからね」

奏「早っ！！」

許可の貰うのが早いことに驚く奏。

勇斗「…仕方ないな、特別に泊めてやる」

なのは達「ありがとう！」

なのは達は嬉しそうになる。

マンション・勇斗達の部屋

勇斗の案内され、なのは達は現在勇斗の住むマンションの部屋に着いた。

フェイト「わあ、すごい！」

はやて「偉い豪華やな」

アリサ「フ、フン、私といい勝負だわ」

すずか「何で比べるのアリサちゃん？」

なのは「ひろい」

なのは達ははしゃいでいる。

勇斗「いいところだろ？好きなだけくつろいでもいいぞ」

なのは達「はーい」

なのは達はいろいろと見て回った。

フェイト「なのは、このベッド大きいね」

なのは「あ、ホントだ」

奏「いいでしょそのベッド、それでお兄ちゃんとセツ…」

ドカツ！

勇斗「なんだ奏、もう眠くなったのか？しょうがないな」

今思いつきり気絶させたよね？となのはとフェイトは言おうとするが、言えなかった。

はやて「ここはキッチンか」

レフィア「ええ、私達も勇斗様もここで料理なされますわ」
はやて「さよか・・・って勇斗さんも料理できるん!？」

はやては勇斗が料理できることに驚いた。

レフィア「もちろんですわ!ちなみにこれが勇斗様の料理ですわ」

レフィアは一つのチャーハンを出す。

ちなみにそれはレンジで温まっています。

はやて「それじゃあ一口…」

はやてはそのチャーハンを食べてみた。

はやて「!!こ、これは…、うまい!」

レフィア「そうでしょ？」

はやて「スッゴイうまいわこれ!これは勇斗さんになわんな」

すずか「ここ…バスルーム？」

アリサ「マンションにしては少し広いような…」

アリサとすずかはバスルームにいる。

このバスルームは普通のマンションと比べて少し広い。

レイナ「これぐらい普通でしょ？」

すずか「いや普通って…」

なのは「そういえば聖華さん達は？」

勇斗「あいつらなら「ただいま戻りました」かえったか」

聖華たちが帰ってきた。

蓮牙「勇斗と…なのはか。久しぶりだな」

なのは「あ、はい」

フェイト「あの時はお世話になりました」

メイ「いいですよ」

懐かしそうに話し合うのはと聖華たち。

すると勇斗がシーナに聞いてきた。

勇斗「シーナ、いつにもなく艶めいてる様に見えるがまたやったのか？」

シーナ「またとは失礼だな。私はおいしく頂いただけだ」
奏「それ結局やっただけじゃん」

勇斗と奏は呆れる。

すずか「あの、一体何の話ですか？」

聖華「知らない方がいいですよ」

なのは達「？」

なのは達は聞いてみると、聖華は遠い目で答える。

どこかの場所で男達がまるでミイラのように真っ白に燃え尽きているとかいらないとか。

その夜

なのは達「うまーーーーーいい!!!!」

なのは「なにこれ!? すっごく美味しいよ!」

フェイト「勇斗の料理、おいしい…」

はやて「何度食べても凄いな勇斗さんは」

アリサ「プロ顔負けね」

すずか「凄くおいしいよ勇斗さん」

晩御飯で勇斗の手料理をたべたなのは達は高評価した。

勇斗「それは何よりだ。こう見えて作るのは得意だからな」
奏「お兄ちゃんの料理は誰にも負けないよ」

勇斗達は嬉しそうだ。

そして寝る時間

なのは「やっぱりこのベッドフカフカだ」
すずか「すぐに寝に入りそうだね」

ふかふかなベッドに気持ちよさそうにするなのは達。

勇斗「もう子供は寝る時間だ。早く寝とけ」

なのは「む、私達は子供じゃないよ・・・たぶん」
レフィア「多分ってあなたは…」

レフィアは呆れる。

フェイト「それじゃあお休みなのは」

はやて「アリサちゃんすずかちゃんお休みな」

アリサ「そうね、お休み」

すずか「スヤスヤ…スヤスヤ…」

なのは「勇斗君…お休みなさい…」

なのは達は眠りに入った。

勇斗「元気な奴らだな」

そう言いながらもなのは達を撫でる。

勇斗「ゆっくり眠れ」

勇斗は撫でた後、そのまま自分の寝室へ戻った。

余談ではあるが、奏とシーナが勇斗の部屋に潜り込んでいてボロ雑巾にされたのは言うまでもない。

シーナは逃げだしたため、奏だけがボロ雑巾になっていた。

第十八話：絶対美女・勇華（前書き）

勇斗の第二の人格？な方の登場だ。

第十八話…絶対美女・勇華

なのは達が勇斗のマンションに訪れて以来、偶に来るようになった。無論はやてはシグナム達を連れて勇斗と再会すると嬉しそうにしていた。

時折奏が「お兄ちゃんは罪な人…」などと呟いていたとか。そんなある日、

奏「それでね、お兄ちゃんあれも出来るんだよ？」
なのは「あれ？」

アリサ「あれってなによ？」

奏「それは本人が来てのお楽しみ「何の話だ？」」とお兄ちゃん

今まで二階で昼寝していた勇斗が起きてきた。

奏「お兄ちゃん、せっかくだからあれやって」

奏のアレという言葉に目を細める勇斗。

勇斗「お前…何つうものを言ってくれるな？」

奏「いだだだだだだだだ！」

奏の頭を鷲掴みして言う勇斗。

勇斗「ま、いいけどな」

なのは達（いいんだ・・・）

奏を離す。

奏「あイタタタ・・・やってくれるの？」

勇斗「しかたなくな」

勇斗は深呼吸して、

勇斗「チェンジングボディ」

その言葉を言うと、勇斗からまばゆい光が包まれた。

光りがおさまると、そこには別の人物が現れた。

服装は勇斗の物だが、髪はサラサラで膝まであり、胸は蓮牙でさえも超えるわがままボディ、そして顔は見事なまでに美しい。まさに絶対的な美女がそこにいた。

なのは「・・・（啞然）」

フェイト「・・・（啞然）」

はやて「・・・（啞然）」

アリサ「・・・（啞然）」

すずか「・・・（啞然）」

なのは達は驚きのあまり啞然とした。
が、なのはがすぐに復帰した。

なのは「は！・・・あの、あなたは？」

勇斗？「今頃ねあなた達・・・」

勇斗？は呆れている。

なのは達は全員復帰した。

勇斗？「自己紹介するわ。私は勇華よ。よろしくね（ニコッ）」

女性勇斗…もとい、勇華が微笑みながら挨拶すると、

プツンッ

何か切れた音がした。

なのは達「お姉さまアアアアアアア！！！！！」

なのは達がいきなり勇華をお姉さまと言って抱きついてきた。

勇華は少し驚いたが、5人娘を抱きつく。

奏「こらー！ー！！お姉さまとハグするのは私の特権よー！！」

抱きついてきたなのは達を見て怒る奏。

勇華「また後でキスでもハグでもやりあいでもするから我慢してくれる？」

奏「・・・それでしたらまあ許しますお姉さま」

しぶしぶ従う奏。

勇華「それにしてもこの体も久しぶりね」

自分の体を見て言う勇華。

奏「せっかくだから近くの温泉にでも出かけませんかお姉さま？」

勇華「いいわねそれ」

なのは達「だったら私（ウチ）も！」

なのは達も行きたいと言い出した。
奏は理由を知ってため息をつく。

奏「ハア、仕方ない、行くわよ」

なのは達「ハゝイ」

勇華「ウフフ・・・」

勇華は面白くてほほ笑む。

海鳴温泉・ロビー

勇華「大人4名、子供5名でお願いしますわ」

受付「は、はい。かしこまりました／＼／＼」

勇華は受付の人に料金を払っているが、その受付の人はなぜか顔を赤くしている。

それどころか周りの従業員や来店客も勇華を見ている。

奏「やっぱり相変わらずの人気ね、お姉さま」

勇華「あら？そうかしら」

シーナ「勇華以外にここまでオーラを出す奴はおらん」

蓮牙「スッゴイ注目してるしな」

奏の一言に、シーナと蓮牙が煽る。

なぜ2人がいるかというと、たまたま聞こえたため一緒についてきたとの事。

シーナ「それにしても温泉か…」

蓮牙「どんなもんだろうな」

シーナと蓮牙がワクワクするような感じになる。

勇華「ホラ2人とも、早く行くわよ」

蓮牙「おう」

シーナ「わかった」

海鳴温泉・着替え室

温泉に入るためになのはと勇華たちは着替え中。

はやて「最初見た時思ったけど勇華お姉さまでっかいな」

勇華「？なにが大きいって？」

はやては勇華のある物を見て言ってるが、勇華は分かってないらしい。

勇華は黒シャツを脱ぎ始めると、

ボロンッ

キングパイが激しく揺れた。

全員「ブッ！」

それを見た人たちはみんな鼻血を出してしまった。

勇華「?どうしたのみんな?」

全員「な、何でもないです!／／／／」

鼻血を隠して誤魔化す。

奏(くっ、もしかしてお兄ちゃんわざとやってるの?でもそこがい
い!♪／／／／／)

奏は内心疑いながらもうれしく思っている。

で・・・

カポーーーン

勇華「うーん、いい気持ち♪」

みんな仲良く温泉につかっています。

只はやては勇華に胸をものすごく見つめている。

勇華「あら?どうしたの?」

はやて「どうしたもこうしたも、蓮牙さんはスッゴイ大きかったの
にお姉さまはその上や」

勇華の前に立って手をわきわきしながら詰め寄る。

はやて「まずはそのキングメロンを揉ませー！ー！！」

モニユン

勇華「ん」

胸を揉まれる勇華。はやてはその胸を触って驚愕した。

はやて「んな！？なんちゅう感触や！マシユマロ級の柔らかさと触り心地、そしてこの癖になる感じ！」

驚きながらも揉み続けるはやて。

勇華「そんなにこの胸が恋しいの？それ♪」
はやて「ふえ？はわ！」

はやては勇華の胸に挟まれた。

勇華「どうかしら？私の胸の柔らかさ」
はやて「凄く…気持ちいいです」

柔らかく包まれる勇華の胸に気持ち良くなったはやて。

なのは「なんかずるいのはやてちゃん、出来れば私も」
フェイト「あ、出来れば私も…ゴニヨゴニヨ／／／／」
アリサ「あ、あたしだって…ゴニヨゴニヨ／／／／」
すずか「…（参加したい顔をしている）」

見かねたなのは達がやられたいと言い出す。

勇華「まずは体を洗う時にね」

そう言っただけなのは達と連れ出す。

奏「やっぱり勇華お姉さまの方がいいかな？」

シーナ「そうだな。あの姿の勇斗の方が私は好きだ」

蓮牙「姿変わっても強さは一緒だけどな」

奏とシーナと蓮牙はこんなことを話し合った。

奏「ど、どうせならお風呂の時一緒にやらない？」

シーナ「それはいい！一緒にやろうではないか！」

蓮牙「まで、“ヤ”のニュアンスがおかしいぞ」

いやな予感がした蓮牙は突っ込みを入れる。

そんな時も勇華なのは達に胸を弄ばれていてもうれしそうにしていた。

マンション・バスルーム

なのは達は実家に帰って、勇華は今入浴中。

勇華「魔帝界とは違う楽しみ方も、ありかもね」

今までとは違うことに楽しみを持った勇華。

勇華「2人ならどう思う？」

勇華が別のところへ目を向ける。
そこには奏とシーナだった。

奏「私もそう思う。こんなに楽しかったのは初めてだよ」

シーナ「将来ももっと楽しめるイベントが起こりそうだな」

勇華「：今でもムフフなイベントが起きようとしてるじゃない」

勇華は呆れながら言う。

奏「まあね」

奏は勇華に抱きつく。

奏「私はお姉さまと一緒にやり合いたいただけなの？」

顔を赤くしながら言う奏。

シーナ「お前をどうやるかゾクゾクするな」

シーナは笑みを浮かべる。

勇華「全くあなた達は」

勇華は呆れながらも内心楽しそうだ。

勇華「いいわ、あなた達を動かなくなるくらいかわいがってあげ・る」

勇華とシーナと奏はお互い肌を重ね合った。

数時間後…

奏「ううん・・・やっぱこの感じ、最高？」

シーナ「お互いいろいろと経験積んだからな」

勇華「まったくあなたたちは・・・」

やり合った3人はテカっていました。

勇華「でもまあ、またいつかやりましょう？」

奏「ウフフ、ありがと♪」

そんなこんなで勇華は勇斗に戻って、夜明けまで寝た。

＼おまけの紹介＼

＼神道しんどう 勇華ゆうか＼

髪…腰まであるサラサラな黒

目…金色

服…黒いスカートとストッキングとガーターベルトにフロントムキ
ングダムのゼダの服（胸のところは黒いシャツで）をイメージ。
マントはちよっぴりボロボロで悪魔の羽に変わることがある

3サイズ…107／55／83

体重…55キロ

性別…♀

種族…魔王女神

魔力光…漆黒

好き…読書、辛いもの、寝ること、静かな時間、散歩、相手を茶化
すこと

嫌い…権力者、命を無駄にする、弄ぶ奴、邪魔をする奴

性格…真面目、サディスト、遊びたがり？

レベル…9999

得意武器…剣バルバード、拳アルムテン、斧アボカリプスロンギヌス、槍ヘルファング、銃

スキル…バトルソウル（撃破した敵の数だけ強くなる）

絶対美女のカリスマ（老若男女問わず虜にしてしまう。それ故にナ
ンパやセクハラされるのがしばしば）

詳細.. 勇斗が女性化した姿。 変身時は性格特徴が違いため第二の人格か？と疑われる。

第十八話：絶対美女・勇華（後書き）

勇華ってちょっとすごい性格の持ち主？ 知らんけどな（苦）

第十九話：不屈の天使が墜ちる時（前書き）

なのは墜落イベント。けどなのはは傷つきませんので。

第十九話…不屈の天使が墜ちる時

いろいろと数時間たった後、なのは達は現在11歳となった。

そしてある報告を受けてヴィータと共に現場に向かおうとしたら、勇斗が現れる。

勇斗「なのは、仕事か？」

なのは「うん！武装隊の皆さんとヴィータちゃんと一緒にちよつとね」

なのはは元気よく答える。

が、勇斗はなのはを見て違和感を感じた。

勇斗「なのは、お前局に入って2年だったか？」

なのは「え？あ、そんなくらいだったと思う…」

うろ覚えな答えで言うなのは。

勇斗「だったら今は休め」

なのは「ふえ？」

ヴィータ「何だよいきなり」

勇斗「微かだが気の乱れを感じる、今日は……いや、ここ数ヶ月は局の仕事はしない方がいい」

なのは・ヴィータ「！」

勇斗のいきなりの言葉に二人は驚愕する。

ヴィータ「おいおい、それは無理な話だぞ。今やなのははエースとして活躍してんだ、そういきなり休めと言われてはいそうですかな

んて言えねえよ」

勇斗「周りの都合など放っておけ、とにかく今日はゆっくり休んで寝ていろ」

肩を疎めるヴィータに対し、勇斗はかなり本気で言う。

なのは「ありがとう勇斗君」

勇斗「なら……」

なのは「ううん、私なら平気だから、やっぱりお休みはできないよ」

勇斗「……………」

なのは「私の力で助かる命があるなら、私は戦いたいし守っていきたい。それに私の勝手に迷惑かけちゃいけないしね」

勇斗「……………」

なのは「心配してくれてありがとう、ヴィータちゃんもいるし私なら大丈夫だよ！」

グツと力こぶを出すのには対し、勇斗の目は更に細く鋭くなっていく

なのは「このお仕事が終わったらお休みを入れるから、そうならまたみんなで遊びに行こうね！」

そう言ってなのはは勇斗の言葉に従わず走り去っていく。

ヴィータ「まったく、お前も案外過保護だな。んな心配しなくても、アイツは早々やられりゃしないよ」

勇斗「……ヴィータ、せめてお前くらいなのはの側を離れるなよ」

勇斗の言葉にヴィータはやれやれと肩を疎めて

ヴィータ「だあかあら、言ったら、アイツは今や魔導師の中では無敵のエースとして活躍してるって。アタシが面倒みなくても平気だって」

そう言うヴィータはなのはの後を追いかけてその場から去っていった。

勇斗はなのはとヴィータが走っていったところを見ている。

勇斗「・・・やはり逃げているんだな。孤独を・・・」

そんなことを呟いて、勇斗もこっそり現場に向かう。

勇斗「このまま出るのはあいつの悪いな」

そう言って取り出したのは真っ黒な鬼のようなお面だった。

雪の降る奇跡

なのはは今、雪の降る現場を飛びながら、勇斗に言われたことを考えていた。

なのは（なんで、あんなこと言うの・・・、勇斗君・・・。私から魔法を取ったら、何にも残らない・・・。必要なの・・・、フェイトちゃん達と友達でいるために・・・！！）

そんななのはの前にアンノウンが現れる。そしてなのはは迎撃しよ

うとする。しかし、次の瞬間、

なのは「!?!?（か、身体が…、動かない…!!!）」
ヴィータ「おい!?!?なのはどうした!?!?」

ヴィータの叫びが後ろから聞こえる。だが、なのはは動けず、アン
ノウンの凶刃が振り下ろされようとしていた。

なのは（だめ!! やられちゃう!!!）

なのはは目をつぶる。

・・・が、衝撃がこない。ゆっくり目を開けると、アンノウンの狂
刃を素手で止めている何者かだった。

??? 「無事か?」

なのは「え、あ、はい…」

なのはは思わずお礼を言う。

その人物は男のようで、真っ黒な鬼のような仮面をかぶり、全身真
っ黒なボロボロマントを羽織っている。

ヴィータ「テメェ何もんだ!」

ヴィータがその男を見て怒気を放つ。

警戒しているようだ。

??? 「その赤いの、この娘を連れて離れてろ。邪魔だ」
ヴィータ「なんだも「さっさとしろ!!!」! わ、分かったよ!!!」

男の怒鳴りに驚いてヴィータはなのはを連れて離れる。

「???」「さて、お前にはこいつをプレゼントだ」

男は掴んだままもう一つの手で銃を持つ。

そして銃を撃ち、アンノウンは沈黙した。

そして離れているのはとヴィータに目を向ける。

ヴィータ「あ、あんたは一体…」

ヴィータが聞こうとしたら、男が緑色の液体が入った瓶をヴィータに投げ、

ゼロ「俺の名はゼロ…縁があつたらまた会おう…」

男、ゼロはそう言って立ち去った。

ミッドチルダ病院・病室内

なのはは病院に運ばれ、ベッドで休んでいた。そこにはフェイト達や士郎達もいた。そして、シャルから衝撃の報告が告げられる。

フェイト「嘘だよね…?シャル…」

はやて「じ、冗談きついで?シャル…。嘘って言ってや…」

シャル「…嘘じゃないわ…、なのはちゃんの身体は、今までの無理な訓練や魔法の使用でボロボロなの…。正直、歩けるようになるかも怪しいわ…。最悪歩けるようになって、魔法は使えないかも

しれないの…」

ヴィータ「くそッ！！なんで…、なんで！！」
シグナム「落ち着け！！ヴィータ！！」

そんな病室に、勇斗が入ってきた。

勇斗「…無事か？なのは…」

なのは「…勇斗君…」

なのはは勇斗を見て眩く。

勇斗「言ったよなのは、『今日は休んどけ』と」

なのは「…うん、勇斗君は忠告してくれてたのに、私は無視した…。
これは、自業自得なの…」

勇斗「ほう…、ちゃんと自業自得とは思っているのか。だがな、なのは…。この際だからはっきり言う。お前は不安だったんだろう？魔法を使えなくなること、周りの人達が離れていくんじゃないかって…、また、独りになるんじゃないかって…」

なのはは勇斗に核心を突かれ、否定しようとする。

なのは「…やめて…」

勇斗「独りになるのがいやだから、自分は人の役にたっているという優越感にひたりたいから…」

なのは「やめて！！」

なのはは叫ぶ。

勇斗「なのは…お前の周りにいる奴らは、そんな打算的な奴らか？それとも、お前は、フェイト達を信じられないか？」

なのは「…勇斗君…」

勇斗「それに、魔法のことも諦めるのか？…正直に言え、なのは…、お前は どうしたい？」

勇斗に問われ、なのはは目をつぶり、考える。そして、自分の想いを口にする。

なのは「…私は…、私はまた、みんなと…、みんなと空を飛びたい！！」

勇斗「だったらやれることをやれ。…少なくとも、それが人や自分に良いことになるならな…」

なのは「出来るかな…私に…」

勇斗「出来るか出来ないかじゃない。やるかやらないかだ。お前は諦めが悪いからな…。地獄に落とされようが諦めず這い上がって飛んで見せろよな」

それを聞いたなのはは、病室を出ようとしている勇斗に言った。

なのは「勇斗君…、ありがとう…。私、頑張るから…、頑張って、また空を飛ぶから…！」

勇斗「ふっ…、ああ、待ってるぞ」

勇斗はそう言い、病室を出た。

勇斗のマンション

勇斗はマンションへ帰った。
現在勇斗一人のようだ。

勇斗「あいつもフェイトと同じ頑固者だな」

勇斗はそんなことを呟く。

勇斗「…で、いつまでそんなところで隠れているつもりだ？」

勇斗はある場所に睨む。

なにもない場所から一人の男が現れた。

???「これはこれは、私の気配に気づくだなんて…」

勇斗「俺に感じ取れない物はない。というか貴様の名は？」

腕を組んで言う勇斗。

???「これは失礼、私の名はジェイル・スカリエッティだ」

勇斗「ジェイル？確か管理局からは犯罪者と呼ばれていたなお前は…」

スカリエッティ「あちらさんからはそう言う認識をしているようだが、実は…」

勇斗「管理局に作られたコードネーム『アンリミテッドデザイア無限の欲望』か？」

勇斗が言うと、スカリエッティは驚いた顔をする。

スカリエッティ「知っていたのかね？」

勇斗「ちよつとハックをな」

指を動かして笑う。

スカリエッティ「いやあ、モニターで見た時は驚いたよ。雪降るあの場所に仮面の奴は君なのだろう？」

勇斗「なんだ見てたのか？悪趣味な奴だ」

勇斗は愚痴こぼす。

スカリエッティ「おっと、大事なことを忘れるところだった」

勇斗「…要件によるがな」

スカリエッティ「まあ聞いてくれ、私と協力してくれないかい？」

スカリエッティがこんなことを言い出した。

勇斗「それは世界征服な意味で言ってるのか？それとも…管理局の…あれか？」

勇斗が問いただすと、スカリエッティが答える。

スカリエッティ「後者の方だね」

勇斗「だろうな。御大層なもん立ちあげていればいずれあるだろうよ。犯罪物を」

スカリエッティ「では賛成してくれるかい？」

勇斗「フッ、いいだろう」

勇斗はスカリエッティの誘いに承諾した。

勇斗「ただし、あくまで俺はミッドの人としている。裏の行動はあまり動けんぞ」

スカリエッティ「そうかい？とてもそうには見えないんだけどねえ…」

勇斗「そうおもうか？」

スカリエッティは肯定する。

勇斗「表では勇斗として、裏では『無の使者』、ゼロとして行動するからな」

スカリエッティ「無の使者・・・なるほどね」

勇斗「そう言うわけでお前に協力しようジェイル」

スカリエッティ「ふ、こちらこそ」

勇斗とスカリエッティは握手した。

くおまけく

奏「奏ちゃんの！お便り質問コーナー！」

勇華「ウッフ、今日はこの私がアシストとしてきたわ」

奏「お姉さま！今日も素敵な声をお聞かせください！」

勇華「…お便りを答えるのはあなたの役目でしょ？まあいいけど、それじゃあペンネーム『月光閃火』からの質問よ。『よお…月光閃火だ。こっちの小説では初感想書きだな…』

しかし…勇斗の女性化バージョン、結構刺激が強すぎるな…（汗）。

輝刃「フツ…閃火は一回、勇華にもみくちやにされて来い…。」

うっ…今の段階でそれはちょっと…（汗）。とりあえず…質問だ…『勇斗って女性化すると結構刺激的な性格になるが…他の性格にも変化出来るのか？』

輝刃「フツ…何とか精神的ダメージを減らすか。では、俺からも質問…『他の種族にも変身出来るか？例えばハーピーとかアラウネとか…。』」

うう…輝刃、お前はそこまで俺がもみくちやにされる姿を見て楽しみたいのか…。（orz）『私はこの性格でキープしてるからね。それと別種族の変身は可能よ』

奏「私はそのままがいい！！…っては！いかんいかん！こっちに集中しないと。では改めてペンネーム『カイザー』さんからのお便りだよ。『どうも初めまして、カイザーです。』

一通り読ませて貰いましたが、とても面白かったです。けど、勇華さんは…グッジョブです！！（鼻血垂らしながら）

それでは質問です。勇斗さんは第二の人格として勇華さんがいますけど、勇斗さんと勇華さんは分離することは出来るんですか？』

勇華「さあ、よく分からないけど時には出来ちゃうんじゃないかしら？」

奏「お兄ちゃんとお姉さま……グッ！（親指をあげる）」

勇華「まあ分離ネタは何時か始めるつもりよ。作者が」

奏「それではみなさん、またお会いしましょう」

第十九話：不屈の天使が墜ちる時（後書き）

まさかのスカさん登場。次回は違法研究の調査に。

第二十話：違法研究所（前書き）

管理局の裏を壊しに行く勇斗。そして勇斗がみたものは…。

第二十話：違法研究所

勇斗がスカリエッティと手を組み、管理局の裏の破壊を命じられた。

そしてターゲットとなる場所は、ミッドチルダのはずれの研究所。

勇斗「…あれがそうか」

遠くから怪しさ満点の建物があることにそう呟く勇斗。

どうやらあれが違法研究をやっている場所のようだ。

勇斗「管理局：行ったどんな研究をしているのやら」

勇斗は仮面をかぶってゼロとなり、研究所へ飛んでいった。

違法研究所・入り口

ゼロ「・・・」

勇斗：もとい、ゼロは研究所を前にして眺める。

ゼロ「こんなところで：違法な物を作っているというが、果たしてどんなものだろうな」

そう呟きながら中へ入っていく。

違法研究所・内部

中へと潜入したゼロ。途中の警備員や監視カメラなんぞゼロ（勇斗）の前ではないに等しい。

ゼロ「この程度で俺がドジ取ると思うか？」

ゼロはそう言って奥へ進むと、ある部屋へと入った。

ゼロ「ここは・・・」

バイオプラントらしきところのようで、生体ポッドの中に今だ目を閉じている小さな子供がいる。

ゼロ「成程な…ジェイルの言う通り、管理局は腐った連中だな」

ゼロは生体ポッドの子供達を見てそんな言葉をこぼす。

ゼロ（なのは達だったら絶対にこのことを知ったらつかかるからな…）

そう思いながら探索を続行する。

??? 「だからそうじゃねえっての！」

男の声が聞こえた。

どうやらここの研究員らしい。

研究員1「お前よう！もう少しデリカシーなやり方ねえのか？例えば調合Aと調合Bと混ぜて被検体に流し込めばそれで良いじゃねえか！」

研究員2「でも毎度それで失敗し続けているじゃありませんか！やり方を変えれば成功すると思うんですけど」

研究員1「駄目だ！局長の命令通りにやっていけばいずれ成功体が完成するんだよ！あれこれ言っていないでそうやっつけ！」

ある実験の話をしているようだ。

ゼロ「それは興味あるな。俺も混ぜてくれないか？」

研究員1「ん？…って誰だ！！」

ゼロ「通りすがりの……悪狩りだ！」

そう言った後2人の研究員を絶命させた。

ゼロ「さて、局長とやらはどいつだろうな？」

違法研究所・コンピュータールーム

局長「被検体共の様子はどうか？」

作業員「すべて正常です」

局長らしき男が作業員に聞く。

局長「ふむ、順調だな」

ゼロ「なにがだ？」

聞き慣れぬ声が聞こえたので振り返ると、ゼロが立っていた。

作業員「な！？侵にゅ、ぎゃあっ！！」

気付いた作業員はゼロから触手が伸びて首と胴が切られる。

局長「貴様…一体何者だ？」

ゼロ「俺の名はゼロ。貴様らを無にするものだ」

ゼロはそう言って局長に剣を向ける。

ゼロ「殺す前に一つ聞いておこう。貴様らはその行動の果てになにを求める？」

局長「知れたことを、我が管理局に貢献させるのだ！喜ばしきことではないか！」

ゼロ「お前ならそうだろうが、赤の他人の俺なら、それごとぶち殺すだけだ」

ゼロの手から黒い魔力スフェアが出る。

局長「…私を殺したところでいずれ貴様は管理局に追われる身となるぞ」

ゼロ「忠告ありがとう。しかし、俺は破壊するのさ。命作っては捨てる奴にな」

ゼロはスフェアを放って局長ごと部屋を破壊した。

ゼロ「さて、あいつらを出してこんな厄介物を壊すか」

ゼロはプラントに足を運ぶ。

その後、ゼロはまだ生きている子供達を救出し、研究所はあとかたもなく消滅された。

そして魔帝界へと戻ったゼロは、

ゼロ「こいつ等のために孤児院を作っておくか」

そう言って被害者のための孤児院を創った。

その後ゼロは魔帝界の兵士達に事情を話して兵士たちは協力することになった。

そして管理局側から彼をこう呼ばれることになる。

『ダークコンピクショナー暗黒の断罪者』ゼロ、と。

第二十話：違法研究所（後書き）

凄い二つ名もらったな。次回は4年後になるぜ！

第二十一話：ある日の任務（前書き）

今回はなのは達中学卒業時期だ。つまり航空火災のちよつと前だ。

それではスタート。

第二十一話：ある日の任務

なのはが入院、そして勇斗：ゼロが管理局の裏の破壊を始めて数年の月日が流れた。

あの日から4年、なのははすっかり元気になって歩けるようになった。

実は4年前にゼロが私た緑色の液体の入った瓶には超強力な回復作用があったようで、最初は味が宜しくなかったが、徐々に精神体力ともに体の傷も完治されたのだ。

なのはは薬を渡してくれたゼロに後で感謝しようと考えた。しかし後にゼロは管理局のS級指名手配犯となってしまった。

その後はなんやかんやでなのは達は管理局を頑張り、そして中学生として生活していた。

アリサ「じゃ、いってらっしゃいフェイト。授業のノート取っとくからね」

フェイト「うん！ありがとう、アリサ」

はやて「ほんならすずかちゃん、また月曜にな！」

すずか「気をつけてね、はやてちゃん」

アリサ「なのはも！気をつけてね！」

なのは「はぁーい！」

なのは達はアリサとすずかにそう言われ、いつもの場所にいく。そ

して、通信が届く。

エイミィ「じゃ、いつもの場所に転送ポート開くね！」
なのは「はいっ」

そしてなのは達は、デバイスを起動する。

なのは「レイジングハート！」

レイジングハート「はい、マスター」

フェイト「バルディッシュ！」

バルディッシュ「イエッサー」

はやて「リインフォース！」

リイン「はい！マイスターはやて！」

なのは・フェイト・はやて「セーリット・アープ！」

そしてなのは達はバリアジャケットを展開する。そして、任務に向かう。

第162観測指定世界・荒野上空

勇斗「…来たか。待ちくたびれたぞ」

奏「ちよっと待ちちゃったよ」

なのは「ごめんごめん、でもありがとう勇斗君、奏ちゃん」

なのは達が移動中、勇斗と奏と合流する。

2人はなのは達を待っていたようで、謝るなのは。

そこにエイミイの通信が入る。

エイミイ「それじゃ、改めて今日の任務の説明ね！その世界にある遺跡発掘先を2つ回って、発見されたロストロギアを確保。最寄りの基地で、詳しい場所を聞いてモノを受け取って、アースラに戻って本局まで護送！」

勇斗「ずいぶん楽な任務だな」

なのは「そうだねえ」

エイミイ「ま、モノがロストロギアだから油断は禁物だけど、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、勇斗君と奏ちゃんの5人に、もう一カ所にはシグナムとザフィーラとレフィアさん達がいるから、多少の天変地異が起きても大丈夫そうだけどね」

奏「天変地異通りこして大災害を起しても責任取らないから」

勇斗「だな」

奏と勇斗の碌でもない言葉に顔を引き攣って苦笑いを浮かべるなのは達。

クロノ「みんな、よろしく頼む」

なのは達はアースラの通信を聞き、返事をする。

なのは・フェイト・はやて「了解！」

勇斗「おう」

奏「まっかせて」

北部・定置観測基地

なのは「さて、基地のほうは……と」

勇斗となのは達が基地に向かうと、二人の男女が出迎えた。

グリフィス「遠路お疲れ様です！ 本局管理補佐官、グリフィス・ロウランです！」

シャリオ「シャリオ・フィニーノ通信士です！」

二人が敬礼する。それになのはが答える。

なのは「ありがとう」

グリフィス「ご休憩の準備をしておりますので、こちらへどうぞ」

なのは「あ、平気だよ。すぐに出るから」

はやて「私ら、これくらいの飛行じゃ疲れたりせーへんよ。グリフィス君は知ってるやろ？」

グリフィス「はい…、存じ上げてはいるのですが」

それを聞いたなのはとフェイトは不思議そうな顔をする。それを見たはやては説明する。

はやて「あ、2人は会ったことなかったな。こちら、グリフィス君、レティ提督の息子さんや」

グリフィス「はじめまして」

なのは・フェイト「あー！！！ 似てる！」

なのは達ははやてに聞いて納得する。

勇斗「微妙な釣り目とインテリ眼鏡は母譲りの様だしな」

グリフィス「ちょ、恥ずかしいですって…」
なのは「あれ？勇斗君は知ってるの？」

なのはとフェイトが意外そうな顔をする。

勇斗「彼女の紹介レテイでな。親子は時に見た目から似るもんだってな」
奏「そう言う人に限って実はm「僕はマザコンではございません！」
ってまだ言っていないだけ…」

勇斗「イヤ、絶対にお前マザコンを言おうとしてただろうが・・」

勇斗が呆れて突っ込む。その後、フェイトがシャリオに聞く。

フェイト「フィニーノ通信士は初めてだよね？」

シャリオ「はい！でも、みなさんのことはすごく知っています！
本局次元航行部隊のエリート魔導師、フェイト・T・ハラOWN執
務官！いくつもの事件を解決に導いた、本局地上部隊の切り札、八
神はやて特別捜査官！武装隊のトップ、航空戦技教導隊所属！不屈
のエース、高町なのは二等空尉！そして、管理局に所属していない
とはいえその強力すぎる魔力で闇の書事件に協力した『黒き判決者』
の神道勇斗さんと『白き魔術師』ホワイトエレメンターの神道奏さんにお会い出来て光栄
です〜！！」

それを聞いたなのはとフェイトは苦笑いする。

勇斗「黒き判決者…か。ずいぶんな異名だな」
ブラッックジャッジメント

奏「それほど私たちは有名になってるってことだよ」

フェイト「…って今思いだしたんだけど勇斗ってそんなに有名にな
ったの！？」

なのは「ふえ？そうなの？」

はやて「あ、うちも気になったわ」

凄い異名を持つ勇斗と奏にフェイトとなのはとはやてが遅れて驚く。

勇斗「べつに大事のことじゃない。S級犯罪者数百人半殺しで逮捕、S級ロストログニア数百件無事に確保、討伐クエスト数千件クリアしたぐらいだ」

なのは・フェイト・はやて「ものスッゴイこと攻略してるう!!!
!Σ(。(。D。;)」

勇斗の行った内容がものすごいことに驚愕するのは達。

グリフィス「シャーリー、失礼だろう」
シャリオ「あ、いけない、つい……」

グリフィスがシャリオを叱る。
なのはがそんな2人を見て言う。

なのは「シャーリーって呼んでるんだ、仲良し？」
グリフィス「す、すみません！子供のころから家が近所で……」
なのは「幼なじみだ！」
フェイト「いいね、私たちも幼なじみだよ」

それを聞いた勇斗が、一言言う。

勇斗「腐れ縁の間違いじゃないのか？」
フェイト「もう、勇斗！」

そこをフェイトが突っ込む。

なのは「あははは、まあ幼なじみの友達は貴重なんだから…、大事

にしてね」

グリフィス・シャリオ「はい!!」

そうして話した後、みんなで任務に向かった。グリフィスとシャリオはナビゲートをしている。

シャリオ「皆さんの速度ならポイントまでは15分ほどです。ロス
トロギアの受け取りと艦船の移動までナビゲートします」
フェイト「はい…、よろしくね、シャーリー」
なのは「グリフィス君もね!」
グリフィス「はい!」

そんな中、はやてが言う。

はやて「しかし、私たちもう16年目か」
フェイト「中学も今年で卒業だしね」
なのは「卒業後はきつと今より忙しくなるかな」

将来の進路を考える3人。

勇斗「まあそうだろうな、お前たちは…」
奏「なのはちゃん達のお仕事だもんね」
フェイト「…勇斗、奏、本当に局員にならないの? 勇斗達の能力なら、執務官だってすぐになれるのに…」

フェイトは勇斗と奏に言う。

勇斗「そんなものの興味はない。大体この俺がそんな役職如きで埋められると思うか？」

フェイト「それは……そうかも……」

エリートレベルの犯罪魔道士を一瞬で半殺しにした実力の勇斗なら執務官どころか元帥をすっ飛ばしてそうな気がした。

奏「私もパス。めんどくさい」

なのは「明らかにそれ本音だよね……？」

なのはは腕を重ねて寝ているようなしぐさをしながら飛行する奏に突っ込みを入れる。

前が見えないのに正確に飛んでいるのは修練のたわものなのだろう。

勇斗「というかはやて、引越先は決まったのか？」

はやて「まだや、ミッド首都の南側で家族6人で暮らせる家、えーカンジのトコを探し中や。決まったら、遊びに来てなー」

なのは「うん！行く行く！」

リイン「リインもはやてちゃ…、マイスターはやてと一緒にお待ちしてるです！」

それを聞いたフェイトは笑う。

フェイト「あはは」

なのは「そんな堅い呼び方しなくても、“はやてちゃん”でいいんじゃない？」

リイン「うう……」

そんな中、通信が入る。

シャリオ「皆さん、発掘地点と通信が繋がりません。何かあったか
もしれません！」

それを聞いた勇斗は発掘現場の方を見る。

勇斗「……煙が上がってる…襲撃だ」

はやて「!!! 急ぐで! みんな!」

なのは「うん!!!」

フェイト「わかった!!!」

奏「ってちよっと! 置いてかないで!」

そして勇斗達は現場に向かった。

第二十二話：襲撃者

勇斗達は発掘地点に着いた。

そこには、発掘員2人が縦長の丸みを帯びた機械に襲われそうになっていた。

勇斗（確かあれはジェイルのガジェットってやつだな…）

しかし勇斗は機械の正体を知っているようだ。

リイン「現場確認、機械兵器らしき未確認体が多数出ています！」
はやて「ん！」

リインが現場の状況を確認し、はやてがうなづく。

なのは「フェイトちゃん！救助には私が回る！」

フェイト「私と勇斗と奏は遊撃する！はやてとリインは、上から指揮をお願い！行こう、勇斗！」

勇斗「わかった。救助は任せる」

奏「さて、始めますか」

なのは「任せて！」

そしてなのは達はそれぞれの仕事に入る。

はやて「おし！やるよ、リイン！」

リイン「はいです！」

はやて・リイン「ユニゾン・インッ！」

はやてとリインはユニゾンして準備をする。

なのは「中継！こちら現場！発掘地点を襲う不審機械を発見！強制停止を開始します！」

それを聞いたシャリオは応答する。

シャリオ「本部に中継します！」

フェイト「お願い！」

勇斗「さて、お手並み拝見と行きますか」

勇斗は肩を回す。

なのははプロテクションで発掘員を機械兵器の攻撃から守る。

そして、勇斗と奏とフェイトが攻撃を始める。

フェイト「プラズマランサー！ファイアッ！！」

勇斗「シャドウナイフ」

奏「ホーリーアロー！」

勇斗と奏とフェイトの攻撃で機械兵器を足止めする。その間に、なのはは発掘員に聞く。

なのは「大丈夫ですかっ！？」

発掘員「は、はい…」

なのは「あれは一体！？」

発掘員「わかりません、コレを運び出していたら急に現れて…。」

そして、勇斗がはやてに言う。

勇斗「はやて、ここにいる作業員はあの2人だけだ。それ以外は機

械どもだけだ」

はやて「うん、こっちでも確認したで。」

フェイト「あれは、機械兵器……？」

バルディツシュ「該当データがありません」

そんなやりとりをしていると、シャリオから通信が入る。

シャリオ「中継です！やはり未確認！危険認定、破壊停止許可が出ましたっ！」

それを聞いたはやてが指令する。

はやて「了解！発掘員の救護は私が引き受ける！3人で思いっきりやってええよ！あ、でも勇斗君と奏ちゃん手え出さんといてな？」

なのは・フェイト「了解っ！！」

勇斗「（チツ）…了解だ」

奏「え？私も？…って言うかお兄ちゃん今舌打ちしなかった？」

勇斗「空耳だ」

なのはとフェイトが承諾し、勇斗はしぶしぶ指令を受ける。しかし、舌打ちしたことを奏に聞かれるが、勇斗は軽く誤魔化す。すると機械兵器・ガジェットがフィールドを展開する。

レイジングハート「マスター」

なのは「フィールドエフェクト…？様子見でワンショット！レイジングハート！」

レイジングハート「アクセルシューター」

なのは「シュートッ！！」

なのははアクセルシューターを放つ。しかし、当たる直前に魔力弾

が四散する。

なのは「無効化フィールド！」

勇斗「AMFか…（アレがガジェットのねえ…）。なのは、フェイト下がれ。俺がやる」

フェイト「わかった、よろしく！勇斗！」

なのは「お願い！勇斗君！」

なのはとフェイトは言われた通り下がる。

勇斗「さてと、いくぞ！シャドウフライストーム！！」

そう言うと、マントの中から影状の蝙蝠の大群が機械兵器・ガジェット達すべて飲み込んだ。

そして、全ての機械兵器は破壊された。

なのは「相変わらず、凄い迫力…」

フェイト「…勇斗の魔法見ると自信無くす…」

はやて「ほんまや…、あれで加減してるんやからな」
奏「お兄ちゃんかっこいいー！！」

なのは達はそれぞれ口にする。

勇斗「ん？だったら魔王玉入れとけばよかったか？」

なのは「イヤそんなことしたら現場が跡形もなく吹っ飛んじやうよ！！」

碌でもない一言になのはは冷や汗流して突っ込む。

あんなもの放たれたら現場どころか自分達まで吹っ飛びかねない。
そして一段落し、ロストログアを受け取る。

フェイト「これがそのロストログアですね？」

発掘員「はい…、中身は宝石のような結晶体で…、『レリック』と呼ばれています」

フェイトが発掘員に確認している中、なのはは通信を繋ぐ。

なのは「こちらアースラ派遣隊！シグナムさんですか？」

シグナム「その声、なのはか？そちらは無事か？」

シグナムが通信を受け取る。

なのは「はい、機械兵器の襲撃があつたんですが、勇斗君と奏ちゃんもいたので問題ありませんでした。まさかそっちにも襲撃が？」

シグナム「いや、こちらは襲撃ではなかったがな…」

シグナムの歯切れが悪い。それを聞いた勇斗はシグナムに聞く。

勇斗「どうしたシグナム。まさかそっちに異変でも起きたか？」

シグナム「勇斗か…、まあ異変といえば、現場がな…。危険回避のため、すでに無人だったのが不幸中の幸いだったが…。発掘現場は跡形もない、先ほどシヤマルとヴィータを呼び出した。今日の任務、気楽にこなせるものではなさそうだ」

シグナムは、そう言いながら、発掘現場に出来た大きなクレーターを眺めていた。

第12管理世界・聖王教会中央教堂

聖王教会 教会騎士団 騎士、カリム・グラシアは、クロノからの報告を、聖堂に座りながら受けていた。

クロノ「片方は無事に確保したのですが…、もう片方は爆発で発掘現場ごとロストしてしまっています。爆発現場は、これから調査と捜索を行います」

カリム「クロノ提督、現場の方たちはご無事でしょうか…？」

クロノ「ええ、現場の発掘員にもこちらの魔導師たちにも被害は何もありません」

カリム「そうですか…、良かった」

カリムはクロノの報告を聞き、安堵する。

クロノ「現場発掘員の迅速な避難は、貴女からの指示をいただいていたからこそですね、騎士カリム」

カリム「危険なロストログアの調査と保守は、管理局と同じく聖王教会の使命ですから。名前だけとはいえ、私は管理局のほうにも在籍させていただいていますしね。こちらのデータでは、『レリック』は無理矢理な開封や魔力干渉をしない限り、暴走や暴発はないと思われるのですが、現場の皆さんに十分気をつけてくださるようお願いいたしますか？」

クロノ「はい…、それでは」

クロノとの通信が切れる。その後、カリムは溜め息を吐く。

カリム「ふう……」

??? 「騎士カリム、やはりご友人が心配でしょうか？」

カリムは声の聞こえたほうを振り向く。そこに立っていたのは、聖王教会修道女、シャツハ・ヌエラである。

カリム「シャツハ」

シャツハ「よろしければ、私が現場までお手伝いにかがいますよ？ 非才の身ながら、この身に賭けてお役に立ちます。クロノ提督や騎士はやてはあなたの大切なご友人、万が一のことがあつては大変ですから。」

それを聞いたカリムは答える。

カリム「ありがとうシャツハ、でも平気よ。はやては強い子だし、今日は特に、リインフォースはもちろんヴォルケンリッターたちも一緒に、はやての幼なじみの本局のエースさんたちや、あの『黒きジャッジメント判決者』もご一緒とか」

それを聞いたシャツハは納得し、カリムに言う。

シャツハ「それは私の出番はなさそうですね…、おとなしくあなたのそばについているとしましょう。あ、お茶をお入れしましょうね」
カリム「うん、ありがとう」

第二十三話：任務後の休憩

勇斗達はシグナム達と合流し、アースラに転送しようしていた。

なのは「こちら護送隊、全員無事に転送ポートに到着！転送処理お願いしまーすっ。」

エイミィ「こちらアースラ、転送了解！観測基地の2人も、ナビとサポートご苦労さま。そちらの任務は無事完了！」

それを聞いたグリフィスとシャリオは返事をする。

グリフィス・シャリオ「ありがとうございます」

エイミィ「さて、転送処理開始！食事の準備してあるからね！最後まで気を抜かず戻ってきて！」

女性陣「はぁいっ！！」

勇斗「元氣な奴らだな」

シーナ「だな」

勇斗は呆れた顔をする。

アースラ艦内・レクリエーションルーム

アースラレクリエーションルーム、そこにはリンディ、エイミィ、ユーノ、アルフの4人がいた。そして豪華な料理が並べられている。

エイミィ「おお…、すごいですねえ！」

アルフ「肉がある！！」

ユーノ「こんなに用意されたんですか？」

エイミィ達はそれぞれ声をあげる。

リンディ「半分はアコース君の差し入れよ。任務を終えたエースたち…、ですって」

そんなやりとりをしていると、なのは達が入ってくる。

女性陣「ただいま戻りましたー♪」

勇斗「よう、帰ったぞ」

リンディ「おかえりなさい、みんな。勇斗君も奏ちゃんも久しぶりね。それじゃ、食べましょうか」

そして皆で食べる。そして少したち、なのはがフェイトに声をかける。

なのは「あ、そういえばフェイトちゃん、あの子たちの新しい写真持ってきてる？ ヴィータちゃんたちに見せてあげようよ」

シグナム「あの子たち？」

シグナムは誰だか分かってないが、シャルが教える。

シャル「ほらアレよ、フェイトちゃんが仕事先で出会った子供たち」

勇斗「ああ、あいつらか。確かフェイト、エリオを引き取ったんだっけか？」

フェイト「うん、ちょっと前から私が保護者ってことになってるの。」

法的後見人はうちの母さん」

なのは「元気で優しい子だよ」

はやて「フェイトちゃん専門のロストログアの私的利用とか、違法研究の捜査とかだと、子供が巻き込まれるコト多いからな」

はやての言葉を聞いたフェイトは言う。

フェイト「子供が自由に未来^{ユメ}を見られない世界は、大人も寂しいですからね」

それを聞いた勇斗はフェイトを茶化す。

勇斗「ほう、一端の口きくじゃないか？執務官殿。自分も子供のくせして。この前、怖い話したあと独りで寝れないって泣きついてきたやつの台詞じゃないな」

フェイト「ゆ、勇斗！？それは秘密って言ったじゃない！！／／／」

それに便乗し、シグナムも言う。

シグナム「そうだな、テストロッサはなんとかんだで試験に二度も落ちたからな」

フェイト「あう…／／勇斗！シグナム！そんなこと言ってる写真見せてあげないよ！」

それを聞いたなのは、申し訳なさそうに言う。

なのは「し、試験の時期に私が色々心配かけたりしましたし…」

勇斗「お前が言うな」

なのは「はうっ！！」

なのはは勇斗に言われダメージを受ける。

勇斗は思い出したかのようにはやてに言う。

勇斗「そう言えばはやては上級キャリア試験一発合格してたな。まあはやてが『みんなに内緒で過去問手伝ってくれないか?』って言って手伝ってやったけどな」

はやて「ゆ、勇斗君!!! しー!! しー!!」

それを聞きフェイトが反応する。

フェイト「嘘!?! はやてずるい!!」

はやて「あははは…」

はやては力なく笑う。

はやて「一応思うけど希少技能保有者とかスタンドアロンで優秀な魔道士は結局、便利アイテム扱いやからなー。あ、ちょっと失礼。適材が適所に配置されるとは限らへん」

椅子に座って愚痴こぼすはやて。

アルフ「はやてとヴォンケンズの悩みどころだな」

蓮牙「肉食いながらしゃべるな」

蓮牙はアルフに指摘する。

なのは「でも、はやてちゃんの目標通り部隊指揮官になれば…」

フェイト「そのための研修も受けてるじゃない」

勇斗「試験二度落ちした奴が言うセリフか?」

フェイト「勇斗!!」

勇斗の毒舌に怒鳴るフェイト。

はやて「準備と計画はしてるんやけどなー、まだ当分は特別捜査官としていろんな部隊を渡り鳥や」

そんなはやてにシャルは心配そうな顔をする。

シャル「はやてちゃんいろんな場所に呼ばれちゃうから、お友達とか出来辛いのがねー」

はやて「イヤ、友達は何にもー十分恵まれてるし（汗）」

余計なひと言に突っ込む。

レフィア「まあ経験や経歴を作ることによって人脈が出来ることはいいですわ」

レイナ「そうだねー」

はやて「地上部隊は海や空と違って部隊ごとの縄張り意識みたいなもんも強いし、その辺肌で感じてみると言い：てクロノ君も教えてくれたしな」

勇斗「ファンという名の野犬に襲われるなよ？」

はやて「うん、分かったわ……って何でやねん!!」

はやてはノリよく突っ込む。

はやて「まあ部隊指揮官はなかったらなったで大変そうやし、どこかで腰据えて落ち着いたらそれはそれで……ゆー感じやね」

なのは「落ち着ける場所見つかるといいよね」
はやて「私も二人に追いつかなー」

なのはとはやては笑いあった。

勇斗「だったら早く追いつけるように俺らがレッスンしようか？」
はやて「イヤ、勇斗君の指導は死んでも断りたい気分や…」

はやてが勇斗の誘いを断った。

というか何だか遠い目をしていた。

勇斗「だったらなn「ゴメン、パス」…フェイ「え、遠慮します」
…」

なのはとフェイトも断った。

勇斗「そんなに嫌なのか？『スピード100キロメートル毎秒の鬼ごっこ』と『100万匹の魔法虫のうち落とし』と『一秒間1000発撃てるガトリングガン10台の回避』をやっただけなのか？」

なのは「ゴメン勇斗君、それ以上しゃべらないで…」

フェイト「恐くない恐くない恐くない恐くない恐くない恐くない恐くない…」

はやて「勇斗君ホンマ堪忍して…。こっちテンション下がるわ…」

シグナム・ヴィータ・シャマル・リイン・リインフォース・アルフ・
リンディ・エイミィ

（一体何があったんだ（の）…？）

なのはとフェイトとはやては目で分かるくらい暗くなっていた。

他の人も気になったが、聞くのは良くないと心から思った。

勇斗「それとフェイト、お前の後輩が一発合格しても闇打ちするな

よ？」

フェイト「しないよ！」

フェイトは勇斗に怒る。

復活早いな。

するとシーナが便乗してフェイトに言う。

シーナ「そう言えばこの前蓮牙に酒飲まされて勇斗に積極的に詰めよったことがあったなあ？（黒笑）」

フェイト「なんで知ってるの！？って言うか思い出させないで！恥ずかしいから！！／／／／／」

顔を真っ赤っかにして全力で手を振るフェイト。

レイナ「聖華も負けてないよ？それでも酒一つですぐ酔って暴れ出すくらいだし…」

聖華「何言ってるんですか！！／／／／／」

恥ずかしいことを思い出したのか、顔を赤くする聖華。

そんな感じで、食事は終わった。

第二十三話：任務後の休憩（後書き）

次回は勇斗達がスバルと出会うシーンです。

簡単に言えば火災シーンです。

第二十四話：空港火災（前書き）

スバルとギンガの登場するシーンです。

第二十四話…空港火災

レリック回収から約2週間、新暦0071年 4月29日、勇斗と奏はなのはとフェイトと共に、ミッドチルダ北部に来ていた。

なのは「ふえー、ミッドの地上も首都と北側は結構違うねえ」

フェイト「こっちのほうは自然が多いから、観光スポット多いよー」

勇斗「はやてとはホテルで合流だったか？」

なのは「うん、そうだよ。それじゃあ、早く行こう？勇斗君！」

フェイト「うん、そうだね。行こう？勇斗」

なのはとフェイトはそう言いながら、勇斗の腕に抱きつく。

勇斗「…抱きつくのはいいが、後ろの奴も気にしろよ？」

勇斗は両手に花状態なので、周りの男性陣から殺気と嫉妬の視線を向けられているが、本人は気にしない。

なのは・フェイト「気にしない♪」

奏「お兄ちゃんと抱きつくのは私だって言わなかった？」

なのは「いくら勇斗君の妹でも渡さないよ？」

フェイト「そうだよ、勇斗は私の者だよ？」

勇斗「…いつから俺は所有物になった？」

勇斗は呆れるが3人は聞いちゃいない。

なのは「勇斗君は私のだよ!!」

フェイト「違うよ!私のだよ!」

奏「お兄ちゃんは私の物!!」

勇斗「：静かにしないなら舌切り落とすぞ？」

なのは・フェイト・奏「ゴメンナサイ、ソレダケハカンベンシテ」

勇斗が脅しをしようと争った三人は片言で土下座した。

そして勇斗達はホテルに向かった。そして、はやてと合流する。

はやて「お待たせ！なのはちゃん、フェイトちゃん、勇斗君、奏ちゃん！」

リイン「お待たせですー♪」

勇斗「それじゃあ、行くか」

なのは・フェイト・はやて・リイン・奏

「おおー（です）！！」

勇斗「普通に返事しろ」

そして、勇斗達は街に繰り出した。

勇斗達はさまざまな所を周り、現在リニアに乗っていた。そこにはやてに通信が入る。

はやて「はい八神です…、！？わかりました！すぐに向かいます！！」

勇斗「どうした、はやて」

はやて「大変や！ミッド北部の臨海第8空港に大規模の火災や！！」
なのは「私も行く！！」

フェイト「うん、私も行く!!」

勇斗「火災か…。行ってみるか」

奏「ちょっと面白くなってきた♪」

そして、なのは達はバリアジャケットを展開する。

勇斗「なのは、フェイト、はやて、奏、俺の手につかまれ。一気に移動する」

なのは達は頷き、勇斗の手を掴む。

なのは「で、つぎは？」

奏「簡単よ。4名様、ジェットコースターごあんなくらい!」

勇斗「そう言うこった。ちなみに振り落されても拾わんから自力で来るんだな」

なのは「え? ちょま「さあ行くぞ!!」きゃああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

なのは達はマッハの如く勇斗に連れてこられ(というか引っ張られ)てしまう。

そして勇斗達は空港前に到着した。

勇斗「着いたぞ」

はやて「あうゝ・・・」

なのは・リイン「ふえゝ・・・」

フェイト「な、なのは、はやて、しっかりして!」

フェイトが2人を正気に戻す。

なぜ彼女が平気なのかというと、スピードに長けているため耐えら

れるようだ。

そんなやりとりをしていると、管理局陸士制服をきた男性が近づいてきた。108部隊部隊長、ゲンヤ・ナカジマである。

ゲンヤ「お、はやての嬢ちゃんか！よく来てくれた！」

はやて「ゲンヤさん、状況は？」

ゲンヤ「まだ何人か、取り残されてる」

はやては状況を聞き、ゲンヤが答える。

勇斗「で、入口は？」

ゲンヤ「ん？坊主、お前は？」

勇斗はゲンヤに聞かれたので答える。

勇斗「おれか？俺は勇斗だ。協力する。早く入口を教えろ」
奏「ちなみに私は妹の奏」

それを聞いたゲンヤは驚く。

ゲンヤ「おー！EXランカーの黒き判決者と白き魔術師まできてくれるとは、ありがたい！！入口は、あそこだ！」

そしてゲンヤは入口を指差す。

勇斗「わかった、はやて、お前は指揮に入れ！！救護には、俺と奏、なのは、フェイトでやる！」

はやて「わかった、よろしくな！勇斗君！」

勇斗「ああ、いくぞ、なのは！フェイト！奏！」
なのは「うん！！」

フェイト「わかった!!」
奏「分かったよ」

そしてなのは達は空港内に入る。勇斗は先行する。そして、声が聞こえた。

??? 「ギン姉え……、どこお……?」

勇斗「こっちか」

奏「あ、女の子」

そして目の前に、青髪の女の子がいた。だが、巨大な女神像が女の子に倒れようとしていた。
勇斗は女の子の所に転移する。そして、女の子を抱え、横に移動する。

勇斗「無事か?」

勇斗は助けた女の子に聞く。

女の子「…う、うん。大丈夫…」

勇斗「そうか…」

なのは「勇斗君!!」

そこになのはがきた。そして勇斗の近くにくる。

勇斗「なのはか、フェイトはどうした?」

なのは「フェイトちゃんは他の場所に向かったよ!」

勇斗「そうか…、それにしても…」

奏«お兄ちゃん、この子アンドロイドじゃない?»

勇斗«違うな。こいつはここで言う戦闘機人ってやつだ»

勇斗は、女の子が戦闘機人であることを見抜いた。

なのは「それじゃあ勇斗君、奏ちゃん、私が退路を作るから、防御魔法よろしくね」

勇斗「へりにあたっても責任はとらん」

なのは「不吉なこと言わないで！…まあいいや」

なのはは天井にレイジングハートを向け、魔法を放つ。

なのは「ディバイーン…、バスターー！！」

なのはの放った魔法は、天井に大穴を空ける。そして夜空が見える。

なのは「それじゃあ行こう？」

女の子「ギン姉は？」

勇斗「ギン姉？お姉さんか？」

女の子「うん…」

女の子は肯定する。

勇斗「なのは、救助者リストを…。そうだ、君の名前は？あとお姉さんの名前は？」

スバル「スバル、スバル・ナカジマ…。お姉ちゃんは、ギンガ・ナカジマ…」

なのは「まだ救助されてない」

勇斗「わかった。それじゃあスバル、俺が君のお姉さんを助けに行くから、君はそこにいるのはと先に避難しなさい」

勇斗はそう言いながら、スバルの頭を撫でる。

スバル「うん…、わかった」

勇斗「よろしい。それじゃあなのは、頼むぞ。奏はついてこい」
奏「了解」

なのは「わかった、勇斗君も気をつけてね？」

勇斗「任せな」

なのははスバルを抱え、飛んでいった。

勇斗「さて、奏。もしかしたら、スバルの姉・ギンガって奴も機人の可能性がある」

奏「そうだね。…非常用階段の所に似たような反応が一つ。フェイトが行ってる」

勇斗「こうボロボロだと崩れそうだな。転移する！」

そう言い勇斗と奏は転移する。

四角形の壁にそって造られた非常用階段、そこにギンガは四つん這いになりながら進んでいた。

ギンガ「スバルウ…、どこお…？」

だが、無情にも階段が崩れ、ギンガは宙に放り出される。

ギンガ「きゃあああああ！？」

落ちていくギンガに、黒い翼を広げた何かが駆け寄り、抱き留める。

勇斗「ギリギリだな」

奏「だね」

ギンガが見たのは、漆黒の翼を持った勇斗と、純白の翼をもった奏だった。

勇斗《やはり、こいつも戦闘機人で間違いないな…》
奏《うん、スバルと同じくだね》

勇斗と奏はギンガを見て戦闘機人だと確定した。

ギンガ「は、はい…。助けていただいてありがとうございます」

勇斗「君はギンガ・ナカジマか？」

ギンガ「はい…。あの、何故私の名前を？」

ギンガが聞くと勇斗が答える。

勇斗「妹さんから聞いたんだが」

それを聞いたギンガは勇斗に聞いてくる。

ギンガ「スバルは！？スバルは無事なんですか！？？」

勇斗「もう避難済みだ。安心しな」

それを聞いたギンガは安堵する。

ギンガ「そうですか…。良かった…」

そんな所にフェイトが来る。

フェイト「勇斗！！大丈夫？」

勇斗「誰に言っただ？それより、レフィアに聞いてこの空港の残りはいないか調べさせたら要救助者はこの子で最後だ。転移するか、掴まれ、フェイト」

フェイト「うん、わかった。掴まったよ」

奏「コースターじゃなくて嬉しい？」

勇斗「ほっぽり出そうか？」

勇斗が睨む。

奏は慌てる。

奏「ジョーダンジョーダン。早く行くよ」

勇斗「それじゃあいどうぞ！！」

そして勇斗、フェイト、奏、ギンガは空港の上空に転移した。

勇斗「さて、それじゃあ消火するか。《はやて、みんなを下がらせろ。一気に消火する》」

勇斗ははやてに念話で伝える。

はやて《勇斗君！？わかった、任せたで！！みんな、下がってや！
！黒き判決者の魔法に巻き込まれるで！！》

はやては、念話で皆に伝える。そして、勇斗は皆が下がったことを確認すると、呪文を唱える。

勇斗「来たれ、絶対零度の冷風、ブリザードコキュートス！」

勇斗は手から魔方阵を出してそこから白い猛吹雪を出す。
その猛吹雪は空港全体を覆っていき、凍りついていく。
ついでに周りの海も凍りついていく。

ギンガ「す、凄い…。炎が凍ってく…」

勇斗の脇に抱えられたギンガが呟く。

フェイト「相変わらず、ムチャクチャなんだから…」

フェイトは呆れたように言う。

勇斗「一回喰らうかフェイト？」

フェイト「い、いえ！滅相もございません！」

聞こえてたみたいでフェイトは全力で拒否した。

そして、勇斗はギンガを救助隊に引き渡し、事件は解決した。

くおまけく

奏「奏ちゃんのお便り質問コーナー!!」

勇斗「やれやれ、やっぱりやる気だな。んじゃペンネーム『カイザー』からだ。『どうも、カイザーです。』」

ようやくあの火災シーンですか。楽しみです。

P・S.なのはとフェイトとはやてに質問です。勇斗の組んだトレーニングで、一体何があったんですか?』」

なのは・フェイト・はやて「ガタガタガタガタ・・・」

奏「ど、どうしたの?」

なのは「無理、これ以上早く出来ない!」

フェイト「虫は嫌い虫は嫌い虫は嫌い虫は嫌い虫は嫌い虫は嫌い虫は嫌い・・・」

はやて「ハチの巣にされた気分や!」

奏「トラウマ持ってるね。まあ人間界の基準と魔界の基準とじゃあ偉い差があるからね」

勇斗「なんだかなあ。次回もまたな」

奏「またね」

第二十四話：空港火災（後書き）

次回は違法研究へ行きます。

第二十五話…ミュータント

空港火災から次の日、勇斗は現在ミッドチルダを歩いている。

勇斗「結構賑やかな場所だな」

周りを見渡してそんな感想を漏らす。

??? 「ユウト、ユウト」

勇斗「ん？」

建物の筋道から勇斗を呼ぶ声が聞こえた。

勇斗はそこへ向かうと、黒い人型の機械が人間の様に歩いてきた。

??? 「ジェイル、ヨンデル、ハヤクイク」

勇斗「あいつか…暇だからそっちに向かう」

勇斗はスカリエッティのいる研究所へ転移した。

スカリエッティの研究所

勇斗「待たせたか？」

スカリエッティ「いやいや、別に気にしないよ」

転移した勇斗はスカリエッティに会う。

勇斗「で、今日はどんなもんなんだ？」

スカリエッティ「今回はここの破壊だね」

スカリエッティはモニターを出してあるポイントをさす。

勇斗「ここは？」

スカリエッティ「人間の遺伝子に強力な遺伝子を作り出しているところだよ」

勇斗「：ミュータントか」

勇斗は表情を陰しくする。

勇斗「大方超人を作りだして人員不足を補い、更に逆らうような輩がいれば闇打ち、：ま、前者が目的かもしれないが」

スカリエッティ「行ってくるかい？」

勇斗「面白そうだから行くことにする」

そう言って勇斗は近くにいた筋道で会った人型の機械目をやる。

勇斗「レイド、あいつらにポイントの詳細を探れ」

レイド「カシコマリマシタ」

レイドと呼ばれた機械生物はモニターを出して誰かに連絡した。

ミッドチルダ・路地裏

??? 「ウ、ウン…?」

ゴミ箱の中から何かが出る。

それは体全体が銀色で赤い一つ目、長い尻尾に鎌のような六本足の機械生物のようだ。

手の方は人間の手のようだ。

??? 「オマエラ！オキロ！ニンム！」

その掛け声に蜥蜴のような機械生物、大型の機械が起き上がる。

??? 「ニンムカストル？」

ストル「ユウト、ニンム！バシヨ、シラベル！レイズ！ハヤク！」

レイズ「ワカッタ、ガレオンオマエモクル」

ガレオン「御意」

六本足のサソリ型をストル、蜥蜴の機械生物をレイズ、大型をガレオンと呼ばれる3体はマンホールを開けて地下に入る。

ガレオン「ドラグーントレイドハ？」

ガレオンがこんなことをレイズに聞く。

レイズ「ユウトサマノトコ、イマイドウチュウ」

そう話し合っていると、電気コードを見つけた。

レイズ「ストル、ツナグ」

ストル「ツナグツナグ！ナビヲダス！」

ストルから一本のコードを出してスタンドにつなぐ。
そしてレイズはストルの背中からコンピューターみたいなものを出
していろいろ打ち込む。

レイズ「ターゲット・・・ロック！」

コンピューターには建物の全体像が映し出された。

その建物があるポイントは勇斗がターゲットとして向かっている場
所だった。

つまりレイズはハッキングをしたのだ。
管理局でも出来ないハッキングを。

レイズ「ユウトニジヨウホウオクレ！」

ストル「オクルオクル！ジヨウホウオクル！ナビオクル！」

ミッドチルダ・ハイウェイ

ミッドチルダのハイウェイにて、勇斗がバイクに乗って移動してい
る。

乗っているバイクは狼をモチーフにしている。中々カッコいいバイ
クだ。

その時画面が出てきて建物の全体図が表わされる。

勇斗「・・・BINGO」

勇斗はそれを見て呟き、現場へ向かう。

ミュータント研究所・その近く

勇斗はスカリエッティに教えてもらったポイントに着いた。

勇斗「ここだな。お前も来るかレイド？」

勇斗はバイクに向かって言う。

するとバイクは変形して、人型へと姿を変えた。
それはレイドだった。

レイド「御意ニ」

レイドはお辞儀して勇斗のベースバッグの中に入る。

勇斗「さてと、狩りを始めるか」

勇斗は仮面をかぶり、暗黒の断罪者、ゼロへと姿を変えた。

ミュータント研究所・内部

中へと侵入したゼロ、幸い誰もいないように近くに気配はなかった。

ゼロ（さて、ミュータント共のご対面と行きますか…）

ゼロはミュータントのいる場所へ向かうとすると、足元の床に違和感を覚えた。

ゼロ（…見た目じゃ見えないが、古典的な落とし穴か。…しかし、研究員があまりいないな）

床に落とし穴があることに気づくゼロ。

しかし研究員の気配があまり感にいられないことに違和感を覚える。

ゼロ（…俺を誘っているつもりか？…退屈のぎに乗ってやろう）

ゼロは足をふみ、落とし穴へと落ちた。

ミュータント研究所・地下ドーム

落ちたゼロは奇麗に着地し、あたりを見渡す。

そして上を見上げる。

??? 「待っていたよ、暗黒の断罪者」

明らかに研究所の局長らしき人がゼロを見ていた。
その他に数人の研究員がいる。

ゼロ「何回聞いたことかな、その暗黒の断罪者って」

ゼロはやれやれなしぐさをして、局長に向き合う。

ゼロ「しかしわざわざ待ってたってことは何を狙っているんだ？」

局長「簡単さ、君を倒すことだよ！我がサンプル達よ！私の成果を示せ！」

ドームの扉が開かれる。

???「ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴウウウウウウ・・・」

うねり声をあげる獣のような声が聞こえる。

やってきたのは…何と人間である。

しかも男性女性に子供までいる。

ゼロ「・・・人間と別の遺伝子を組み合わせたミュータント…」

局長「その通り！我が研究により人間から進化した存在だ！」

ゼロ「…そのわりには命令聞く耳持たないみたいだが」

局長「その凶暴性も役立つのさ。さあ行け！」

局長の命令を聞いたのか否か、ミュータントが一斉に襲い掛かる。

ゼロ（…もとは普通の一般人だった存在・・・少し加減をするか…）

ゼロはミュータント達を見てそう思いながら後ろから来るミュータントを裏拳で殴り飛ばす。

その後襲ってくるミュータント達を殴る蹴る投げる払う飛ばすといろいろやるが、どうもキリがない。

しかも傷ついたミュータントは傷が消えていった。

ゼロ（自己回復能力か…。ますます面白い…。だが楽しみはその後だ）

ゼロはその場から高くジャンプした。

そして空中に魔方陣を出してピョンピョンと忍者のように飛ぶ。

ゼロ「オラこいよ。遊んでやる」

ミュータント「…ウガアアアアアアアア！！」

ゼロの言葉にカチンと来たのか、一斉に一つ一つの魔方陣に飛び移る。

そしてゼロに飛びかかろうとすると、

ゼロ「…残念だったな？」

ミュータント「ガルウ！？」

ミュータント達は黒いなにかに捕まった。

それはゼロのマントが変化したものだった。

ミュータント達はもがくが、ビクともしない。

ゼロ「お前らとの遊びはまた今度にしてやるよ。だがその前に…」

ゼロは研究員たちに向く。

ゼロ「貴様らの野望もここで埋めてやろう」

ピュンッ、ガシャーーン！！

一瞬消えたと思ったらドームを覗くためのガラスが割れる。

局長は後ろを振り返るとゼロがいた。

局長「なっ！？いつの間に！？」

ゼロ「俺が現れた時点で貴様らの命運は終わるのさ。逝ってこい」

ゼロは局長含め研究員たちを放り投げる。

局長「くそ……ん？」

局長は周りを見ると、さっきまで捕まっていたミュータント達が睨んでいた。

ゼロ「よし、餌の時間だ。たらふく食って元気になれ」

それを聞いたミュータント達は涎を垂らし、研究員たちは青くなる。

ミュータント「グガアアアアアアアアアアア！！！」

研究員たち「うわああああああああああ！！！」

ミュータント達は一斉に襲い掛かり、牙で喉を噛み、取り合っては千切り、千切ったものをそのまま食い、異性の場合はアレをやっちゃったりする。

そしてそして残ったのは赤い血に染まりしミュータント達と赤い血の池だけだった。

若干白いのも混じってるが、そこは気にするな。

ゼロ「さて、最後にこんなもの壊すに限るが、その前に情報を集めるか」

レイド「御意」

ゼロはレイドを召喚し、近くのコンピューターをハックする。
そして違法研究に関する資料を手に入れる。

ゼロ（『時空管理局』・・・『上層部最高評議会』・・・『プロジ
ェクトF』・・・碌なことしない連中だな。世界の神を気取る奴ら
めが・・・）

ゼロは苛立ちを覚える。

ゼロ（：さて、情報は手に入れた。もうここにはようはない。・・・
おっとそうだ）

ゼロはちよつとドームへ寄る。

ミュータント研究所・入り口前

ミュータントの研究所はゴウゴウと燃えている。
ようなないものはゼロが破壊したのだ。

燃えている建物の前にいるのはゼロとレイド、そしてミュータント
達だった。

なぜミュータント達がいるかというと、ゼロが誘ったからだ。

『俺達の世界に来るか？』と。

ゼロ「さてと、さっさと戻るか」

ゼロはミュータント達とこの場から離れようとすると、

??? 「待ちなさい！」

聞き覚えのある声が聞こえたので止まってしまう。

見上げると金髪ロングで黒いバリアジャケットを着たフェイトだった。

ちなみに10人の魔道士を連れて。

フェイト「断罪者ゼロ！大量殺戮、器物破損および現行犯で逮捕します！」

デバイス・バルディツシュを構えて言うフェイト。

ゼロの正体が勇斗だということに気付いていないようだ。

ゼロ「：手厚い歓迎だなフェイト・T・ハラオウン。この俺を逮捕できるとでも？」

フェイト「あなたは絶対に逮捕して見せます。そしてこの子たちを保護します」

フェイトの言うこの子たちとは子供ミュータントのこと。

ゼロ「：だそうだが、どうするんだお前ら」

子供ミュータント「イヤ、イキタクナイ」

子供ミュータントは拒んだ。

片言は仕様です。

ゼロ「なぜ行きたくないと？」

子供ミュータント「カンリキョク、シンヨウデキナイ。ソレニ・・・」

子供ミュータントはフェイトを見てこう言った。

子供ミュータント「アノヒトナンダカイヤナニオイガスルカラ」
フェイト「え？」

フェイトは面食らった顔になる。

ゼロ「成程、つまりあの人はロリシヨタを見つければ介護という名の抱擁をしてくると？」

子供ミュータント「コクッ」

フェイト「ちょッ！違います！私はそんな趣味はありません！！」

ゼロは納得したようになるが、フェイトは全力で否定する。

ゼロ「安心しろ、あんたは将来少年少女保育園でも作っとけ」

フェイト「誤解を招くようなこと言わないでください！！もう一度言いますけど私はそんな趣味はありません！！！！／／／／／」

ゼロの茶化しに全力で怒鳴るフェイト。

後ろの局員たちは苦笑いを浮かべる。

フェイト「∴コホンッ、とにかく、断罪者ゼロ、あなたを逮捕します！」

咳払い一つで持ち直すフェイト。

ゼロ「・・・フン」

ゼロはマントを広げると黒い風がフェイト達に襲いかかった。

耐えたフェイト達は目を開けるとゼロとミュータント達がいなくな
った。

魔帝界

ゼロ「さあここがお前達の新しい住処だ」

ゼロが指差す先は大きな屋敷だった。

ミュータント達が住むには快適なところである。

ゼロ「先に言っておくが、この魔帝界は何でもありの世界だ。存分
にやってもいいぞ」

ミュータント「ウガア」

ミュータント達は承諾した。

そしてミュータント達は魔帝界の住人になった。

第二十五話：ミュータント（後書き）

フェイトの母性な性格をちよつと再現しました。
過保護なところがあるから少しね。

第二十六話：ストーキングする女（前書き）

ストーキングキャラの登場です。たまにはいるだろうな。

第二十六話…ストーキングする女

ミュータント解放から数日後、勇斗は現在ミッドチルダを歩いている。

勇斗「この前はジェイルに仕事貰ったが、今回はゆっくり出来そうだな」

勇斗は十分このミッドチルダに満喫しようとする。

そんな勇斗を追いかける足音が一つ。

勇斗「？」

勇斗は振り返ると、誰もいない。とうかその足音の人物がいない。勇斗はとりあえず気にせず進む。後ろから足音がする。

振り返る。電柱に隠れる。

進む。追いかける。

止まる。止まる。

そんなことを繰り返していくうちに…

勇斗「いつまで付けてるつもりだ」

「???」「キャッ！」

瞬時に追跡者を捕まえた。

その人物は金髪ロングで蒼い瞳、胸もかなり大きくスタイルもいい、来ている服は白いドレスという女性だった。

勇斗「いい加減ストーカーするのは止めないか？ 奏が怒るぞ？」

??? 「フッ、私の愛は情熱で燃えているのよ。このオリアナ・ベリオンがあなたの愛を掴むまで」

勇斗「一回死ね」

ドゴッ！

勇斗はオリアナを地面に叩きつけた。
が、すぐに起き上がった。

オリアナ「痛いじゃないですか！」

勇斗「当たり前だ。はぁ、なんでお前はいつも俺をつけ狙うわけなんだ？」

ため息交じりに言うが、オリアナが反抗する。

オリアナ「つけ狙うだなんて失礼です！私は勇斗様の追っかけをしてるだけです！」

勇斗「この状況でよくそんなこと言えるな？」

オリアナ「イヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

頬を引っ張られるオリアナ。

勇斗「：ここじゃなんだ、別のところ行くか」

オリアナ「ひっはひははふへいほうほふいはいへふははい（引っ張りながら連れて行こうとしないでください）」

無理矢理頬を引っ張りながら別の場所へ移動する勇斗。

余談ではあるが、道中見ていた町の女性陣は勇斗のSっプリに胸キュンしたとかしないとか。

ミッドチルダ・公園

オリアナを引きずってるうちに公園に着いてしまった。
するとオリアナが懐かしそうな顔をする。

オリアナ「懐かし〜。確か初めて勇斗様とお会いした場所でしたね」
勇斗「そうだな。お偉いさんからの仕事で気分転換してたお前が出
会った場所だったな」

それぞれ懐かしむ勇斗とオリアナ。

実はオリアナは管理局の局員で階級は一等空尉に属している。
仕事詰めではばらくの休暇をしていた時、そこで勇斗と出会った。

〜回想〜

現在から3年ほど前だった。

オリアナ「はあ〜、」

そこでため息を吐くのは当時のオリアナだった。
缶コーヒ―を片手に疲れたご様子だ。

オリアナ「デスワーク、訓練指導、デバイス実験・・・一杯やることあって疲れがたまるゝ」

????『しっかりなさってください、マスター』

そう励ますのは青いネックレス。オリアナのデバイス『ラクイーン』である。

オリアナ「そうは言っても仕事はつらいわよ。一尉になったことで前と比べて厳しくなってるし」

ラクイーン『それを頑張るからこそいい結果が出るのではありませんか?』

オリアナは「あっそう」といって缶コーヒーを飲みほし、ゴミ箱に捨てる。

背伸びした後職場に戻ろうとしたら、

????「ヒック・・・エッグ・・・」

木の傍で女の子が泣いていた。

事情を聞こうとしたら隣に黒い髪の男性が現れる。

その男性は勇斗だ。

勇斗「どうしたんだ?」

女の子「風船があ」

上を見上げると、木に引っ掛かった風船が一つ。

勇斗はそれを見て「仕方ねえな」といって頭をポリポリと掻いた後、木の近くにあった鉄棒に飛んでさらに大ジャンプで風船をキャッチした。

勇斗「ほれ、もう亡くすなよ？」

勇斗は風船を女の子に渡す。

女の子「ありがとう！」

勇斗「いい子だ」

勇斗は女の子を撫でる。

ドキンッ！

オリアナは撫でる勇斗を見て胸を高鳴らせた。

オリアナ（な、なに？この胸の高鳴りは？あの人の姿を見たらすごくドキドキするんだけど…）

ラクイーン（この反応…惚れましたね、マスター）

ラクイーンは主人であるオリアナを見てそう思った。

勇斗「俺に何か用か？」

オリアナ「わひゃっ！！？」

いきなり声を掛けられて驚くオリアナ。

オリアナ「び、びっくりした〜。いきなり声をかけないでくださいよ！」

勇斗「だったら上の空から出てこいよ」

皮肉な言い方をする勇斗。

勇斗「にしてもそのネックレスはデバイスか？」

オリアナ「え？あ、はい、ラクイーンって言うんですよ」
ラクイーン『はじめまして』

勇斗「成程。俺は勇斗だ」

オリアナ「あ、私はオリアナ・ベリオン一等空尉です」

オリアナが自己紹介した。

勇斗「空尉・・・管理局か？」

オリアナ「ハイ、あ、でも私空尉なり立てなので『マスター、部隊長から指令です』ってなによ」

「空気読めよ」っと突っ込みたいほど嫌そうな顔をするオリアナ。
仕方なくパスを開く。

部隊長『ベリオン一尉、ここから北西一キロ先に強盗団が立てこもっているとの情報を得た。人質5人が捕らわれている。至急救助にあたれ』

オリアナ「了解しました。すぐ現場に向かいます」

オリアナはパスを切る。

勇斗「仕事か？頑張ってこい」

オリアナ「あ、はい、それでは」

オリアナは勇斗に手を振って現場へ向かった。

勇斗「・・・確かここから北西一キロって・・・あ、俺が行こうとした銀行だ。・・・チッ、仕方ねえ」

勇斗は舌打ちしながら現場へ向かった。

ミッドチルダ・事件現場

現場である銀行の前に十数人の管理局員がいる。

シャッターが閉められているため中の様子が見えない。

そこにオリアナがやってきた。

オリアナ「オリアナ・ベリオル一等空尉ただいま到着しました」

部隊長「おお、よくきたベリオル一尉、見ての通り中の様子が分らんが、人質5人捕らわれているとの情報が入った。そして犯人は10人いて『1億円出さなければ人質を殺す』と脅迫をしかけたんだ」

オリアナはこれを聞いてなんて卑怯なっと思った。

部隊長「そんなわけで君には突入グループとしてまず犯人全員の確保。そして人質解放を命ずる」

オリアナ「了解しました!」

オリアナは作戦を遂行する。
すると、

局員「お、おい!何やってんだ!今すぐ離れなさい!」

局員が叫んだので向いてみると、公園にいた勇斗だった。

オリアナ「（あ、あの人は確か…ってそうじゃない！）あなた！ここは危険です！今すぐ離れてください！」

オリアナは注意を促すが、

勇斗「いや、じつはここに振り込み予定があったただけだから！」

ドガッ！ドドドッ！

強盗犯×3「オゴォッ！？」

勇斗はそれを聞かずドアを蹴り飛ばした。
蹴り飛ばした際3人の強盗犯が飛ばされる。

強盗犯リーダー「な、なんだテメエは！」

リーダーらしきものが人質の近くによる。

勇斗「俺は只の…魔道士ってな！」

ドシンッ！！

強盗団「うわあっ！」

オリアナ「キャッ」

足を振り上げ、地面に叩きつけると地震が発生した。
突然の地震に周りの強盗団や局員やヤジ馬達も転ぶ。

勇斗「くたばれ」

強盗団「ドワァァアッ！」

そのすきに強盗団を殴るけるなげる飛ばすのラッシュでリーダー以外再起不能にした。

勇斗「さて、残りはお前だけだな？」

リーダー「く、来るな！来たらいつを殺すぞ！」

女性従業員「ヒッ！」

強盗団リーダーは女性従業員にナイフを突き付ける。

勇斗はハアとため息をつく。

勇斗「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リーダー「ど、どうした？人質を前にして動けないか？」

勇斗「・・・命かけろ」

リーダー「・・・は？」

勇斗は意味深なことを言い出した。

勇斗「ナイフを出すなら命かけろ」

リーダー「な、何言ってるんだ！」

勇斗「そいつは脅しの道具じゃないって言ってんだ！」

言うと同時に懷からナイフを強盗団リーダーのナイフを持つ手に投げる。

リーダー「ぐっ！」

ナイフが当たって強盗団リーダーはナイフを落としてしまう。その隙のせいで勇斗からボディブローを貰ってしまった。

オリアナ「即答! ? しかし私は諦めません! 貴方が私を愛するまで」

部隊長 「いや：私もなんだか：

オリアナ「さあ勇斗様！『君だけを愛してる』と私に「うざい、黙れ」あん！」

回想終了

オリアナ「何を言いますか！貴方のおかげで私は愛に目覚めたのですよ！さあ勇斗様！この私に愛してると」

「ちよつとまったー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

その正体は白く輝く銀髪で強度のブラコン・奏であった。

341

オリアナ「なっ！聞き捨てなりませんわ！貴方もいい加減そのブラコン主義は捨てていきなさいよ！」

勇斗「お前ら二人は変態ってことは確かだけどな」

勇斗は奏とオリアナに皮肉に言うが聞いていない。

奏「こうなったら…」

オリアナ「ええ、こうなったらあれで勝負です！『勇斗様のお仕置き耐久勝負』を！」

奏とオリアナは両者とも目が燃えていた。

内容はすっごくあれだが…。

勇斗「ほう？貴様ら俺のお仕置きを受けたいと？」

勇斗のドS魂に火が付いた。

奏・オリアナ「是非お願いします！」

2人は全力で勇斗に頼む。

勇斗「良いだろう：壊れるまで遊んでやろう！」

奏・オリアナ「きゃあああああああああ！♪」

勇斗は黒い穴を出現させ、奏とオリアナを引きずりこむ。

そして中では絶対に世間では見せられないお仕置きがなされた。

数十分後…

奏「あ…ハア…もっと…もっとしてえ…?」

オリアナ「あうう…もっと胸を…アソコもお…?」

2人は顔が火照っており、全裸でビクビク動いている。

目のハイライトが消えており、まだやられたいという顔をしていた。

勇斗「なんだもう終わりか?…まあいいか、次からもっと遊んでやるぜ?」

奏・オリアナ「はひい…♪」

奏とオリアナは喜んでいる顔をしていた。

勝負? 無論引き分けです。

く余談く

勇斗「あ、そうだ。どうせならバイオワームのにしとけばよかったか?」

奏・オリアナ「ゴメン、ソレダケハカンベンシテ」

虫系のメニューを考えると奏とオリアナが片言で土下座した。
それは女性にとって虫は大の苦手なのだ。

＼おまけの紹介＼

＼オリアナ・ベリオン＼

髪…金髪ロング

目…蒼

服…メルティブラッドのどこかの吸血鬼の服

3サイズ…88／54／82

体重…消滅されている。

性別…♀

種族…魔道士（人間）

魔力光…紅

好き…勇斗様、平和な時間、勇斗様に愛を注ぐこと、勇斗様からい
じられたいこと

嫌い…虫、デスワーク、卑怯な人、めんどくさいこと

性格…おっとり性がありそうな人、そして勇斗をいつもストーキン

グし続けている。

レベル…5000（どんどん上昇していきます）

得意武器…剣（ラクイーン）

スキル…追跡心（勇斗接近時、大幅にステータスが上昇する。）

詳細…管理局直属の女魔道士。普段は仕事をこなす普通の人だったが、勇斗と出会って性格が一変、そしていつもなく勇斗をストーキングしていくのだ。相手から止められようがお構いなしに勇斗を追いかけます。

第二十六話：ストーキングする女（後書き）

次はデート編でも作るか…。

第二十七話：フェイトとデート（前書き）

ちよつとデート編作りました。見て言ってください。

第二十七話…フェイトとデート

現在は中学3年の夏休みに入っていた。フェイトは商店街を買い物を終えて歩いていた。そこに声が聞こえる。

男「さんねーん、ハズレです。はい、残念賞のティッシュだ」

福引きをやっていた。そこで、フェイトは思い出し、ポケットに手を入れる。

フェイト「えっと、確かここに…、あった!」

フェイトはポケットから福引き券をだした。そして、賞品を見る。一等は10万円分の商品券、二等は5万円分の商品券、三等は水族館のペアチケット、四等は果物セット、五等は図書券2枚、あとは残念賞のティッシュである。

フェイト「すいません、やります!」

男「お、可愛い子ちゃんだね! んじゃ福引き券は2枚だから、二回回してくれ」

そう言われ、フェイトはおみくじを回す。すると、銅色の玉が出てきた。

男「お、当たりだね、はい、三等の水族館ペアチケットだ! 彼氏とでも行きな! んじゃ、もう一回だ」

またおみくじを回す。今度は、金色の玉が出てきた。すると、男が鐘を鳴らす。

男「大当たり！！すごいな、嬢ちゃん！二つとも当てちゃったよ。はいよ、一等の10万円分の商品券だ！！」

フェイト「あ、ありがとうございます。」

そしてフェイトは家に帰宅した。リンディが出迎える。

リンディ「お帰りなさい、フェイト。遅かったわね？」

フェイト「ただいま、母さん。ちよつと福引きやったの、一等と三等が当たったよ」

リンディ「あらすごい、何が当たったの？」

フェイト「10万円分の商品券と、水族館のペアチケット。これ、どうしようかな？」

フェイトが使い道に迷っていると、リンディが言う。

リンディ「商品券は置いて、ペアチケットは勇斗君でも誘って行ったら？」

フェイト「え！？／／／」

フェイトは顔を赤らめ驚く。

リンディ「好きなんでしょう、フェイト。ライバルは多いから、早くしないと誰かに取られちゃうわよ？」

フェイト「う、うん…。／／／わかった、誘ってみるね、母さん」

フェイトはそう言い、携帯を取り出し、勇斗にかける。

マンション

現在勇斗はリビングのソファでくつろいでいる。

ピリピリピリ♪×2

すると携帯が鳴ったので、取り出して見ると、発信者はフェイトだ。

勇斗「もしもし？フェイトか？どうした」

フェイト「う、うん…、あのね、勇斗、明日って暇かな？」

勇斗「開いてるぞ。どうしたんだ？」

理由を聞くとフェイトが答える。

フェイト「そ、そのね、福引きで水族館のペアチケットが当たって、良かったら一緒に行かない？」

勇斗「暇だからいいぞ。何時がいいんだ？」

フェイト「それじゃあ朝の9時半に駅で待ち合わせしよう？」

勇斗「わかった、それじゃあ明日、楽しみにしてる。また明日な」
フェイト「うん、また明日」

そう言い、電話を切った。

勇斗「さて、お姫さんのお誘いに乗ってやるか」

勇斗は張りきって準備を始めた。

変わってフェイトサイド。

勇斗との電話の後、聞いていたリンディは言う。

リンディ「良かったじゃない、フェイト！明日、頑張ってね！」
フェイト「う、うん…、わかった。／／／」

こうして勇斗とフェイトはデートする事になった。

ちなみに、フェイトは興奮しすぎて、寝るのが少し遅くなった。

待ち合わせの駅

そして翌日、勇斗は待ち合わせ場所に来ていた。

ちなみに、今の勇斗の格好は、黒いシャツに蝙蝠のマーク、小商だぼついた青Gパン、黒を主色に白い筋のシューズといったカッコいい恰好なので目立っている。

勇斗「遅いなフェイト…」

現在の時間は9時50分、まだフェイトは来ていない。と、そこに、フェイトが来た。

フェイト「ごめんなさい勇斗！少し寝坊しちゃった…」

勇斗「大方俺のこと想像して眠れなかったんだと思うが、まあいい。行こうか、フェイト」

フェイト「うん!!」

そして勇斗とフェイトは電車に乗り、水族館の前に来た。

フェイト「早く行こう、勇斗!」

フェイトはそう言いながら、腕を絡めてくる。

勇斗「分かったから急かすな。建物が逃げるわけじゃあるまいし」

はしゃぐフェイトと腕を組ながら歩いていると、周りの男達から殺気のこもった視線が向けられるが、気にしない。

フェイトも周りの女性達から殺気の視線を向けられるがこちらも気にしない。

フェイト「こうしてると、恋人同士に見えるかな?」

フェイトが聞いて来たので答える。

勇斗「人によってはそう見えるかもな」

フェイト「ふふ、それじゃあ何から見る?」

フェイトが聞いてみると、勇斗が答える。

勇斗「そうだな、今日はシャチのショーがあるみたいだ。行ってみるか」

フェイト「うん!!」

勇斗とフェイトは水族館に入った。そしてショーを見ている。

フェイト「シャチって凄いね！」

フェイトはシャチを見ながら喜んでいる。

勇斗「そうだな」

勇斗は一言ですました。

すると係員の人がマイクをもって、

係員「皆さん！お集まりいただき誠にありがとうございます！本日は特別にシャチと触れ合える機会をおつくりいたしました！」

どうやらシャチと触れ合える、つまりシャチに触れるということだ。

係員「しかし触れ合えるのは一名だけになっております。期待していたみな様申し訳ありません。それではシャチと触れ合いが出来るのは・・・そちらの金髪の方…の隣にいる黒い服を着た蝙蝠マークの男性のあなたです！」

係員のセルフにあたりを見渡すと、金髪はフェイトしかない。

そして隣の黒い服で蝙蝠の模様がある男と言えば、

勇斗「俺かよ…」

勇斗だった。

で…

勇斗「・・・どうしてこうなった」

勇斗は会場の中にいた。

フェイトは観客席でワクワクした目で見ている。

係員「さあ、優しく撫でてくださいね」

勇斗はハアとため息をついて、とりあえず指示に従う。

シャチが水槽から顔を出す。

勇斗はシャチを優しく撫でる。

シャチ「キュル♪キュルル♪」

シャチは撫でられて嬉しそうな鳴き声を出す。

勇斗「そうかそうか。お前俺の様な撫で方をする奴がいなかったのか」

シャチ「キュルルル」

どうもシャチと打ち解け会っているような会話をしている。

フェイト含めほとんどの女性陣は勇斗の姿を見て胸を高鳴らせたとか。

そして、ショーが終わり、勇斗達は帰宅していった。

フェイト「今日は楽しかったね！」

勇斗「ま、俺も満足した」

お互い大満足で歩いている。

フェイト「…勇斗…。ちよつとこつち来て」

勇斗「なんだ？」

勇斗はフェイトに言われ、フェイトに近づいていく。フェイトも近づいてきて、勇斗の前に立ち、勇斗の頭に腕を回して背伸びし、勇斗の唇にキスをした。

フェイト「…ん…」

勇斗「…」

約10秒近くたち、フェイトは離れた。そして、顔を赤くしながら勇斗に言う。

フェイト「大好きだよ、勇斗！それじゃあまたねー！」

フェイトは帰っていく。勇斗は呆然としている。

勇斗「・・・やれやれ、大胆なことする奴だ」

ようやく状況を整理し、やれやれなしぐさをする。

勇斗「こりゃ他のお姫さん達も突っかかりそうだな」

そして、勇斗も帰宅する。だが次の日、勇との予想どおりなのは達にフェイトとデートしたことがばれ、後日みんなともデートするは

めになった。

どうやってなのは達に伝わったかって？なのは達曰く「女の直感だよ！」とのこと。

第二十七話：フェイトとデート（後書き）

ハーレムといったらこうでなくては。

第二十八話…すずかとデート

勇斗はなのは達にフェイトとデートしたことがばれ、なのは達ともデートする羽目になった。

その後勇斗をめぐる戦いが始まるうとしたら勇斗が「お仕置きしようか？」の笑顔で完全に沈黙した。

とりあえずフェイトは終わったので順番にすずか、はやて、アリサ、なのはの順番になった。

そして今日はすずかのデートの日。

すずか「勇斗君、今日はよろしくね♪」

すずかは、リムジンの窓から顔を出し勇斗に言った。

勇斗「さすがお嬢様だな。リムジンで迎えに来るなんてな。で、今日は何処へ行こうか」

勇斗は呆れながらリムジンに乗り、すずかに聞く。

すずか「うーん…、それじゃあ動物園にでも行こう？勇斗君」

勇斗「わかった、んじゃ行くか」

勇斗とすずかはリムジンで、隣町の動物園に向かった。

勇斗「こうして二人っきりのデートって初めてじゃないか？すずか」
すずか「そ、そうだね。／／／（なんか急に恥ずかしくなってきた
：／／／）」

すずかは顔を赤くしながら答える。

勇斗「ま、せっかくのデートだ。楽しもうか、すずか」
すずか「う、うん／＼／」

そんな話をしていると、動物園に着いた。

すずか「それじゃあ行こう、勇斗君！」

すずかはそう言い、勇斗の腕に腕を絡めてくる。

勇斗「そうだな、どこから回ろうか」

すずか「それじゃああのバスに乗って回ろう、勇斗君」

すずかはそう言い、ライオンを模したバスを指差した。

勇斗「（なのは達から聞いたが、ホント猫系が好きだなこいつ）あ、わかった」

そう言いバスに乗る。

すずか「わーっ！ねえ勇斗君見て！ライオン可愛いね♪」

勇斗「いつも見て思ったが本当に猫系が好きだな」

すずかはライオンを見ながらはしゃいでいる。周りから視線（主に男の嫉妬）を受けるがお構いなし。
そしてバスが止まる。

勇斗「降りるぞすずか」

すずか「え？う、うん／＼／」

勇斗はすずかの手を握り、バスを降りた。

勇斗にいきなり手を握られ、すずかはバスを降りる。

すずか（勇斗君の手…、大きいな…。それに暖かい…）

すずかは勇斗の手を握りながら、そんなことを考えていた。

すずか（…勇斗くん、夜の一族であるこんな私を受け入れてくれるなんて…、でもそんな勇斗君だからこそ私は好きになったんだよね…）

そんな様子のすずかに勇斗は声をかける。

勇斗「すずか？どうかしたか？」

すずか「ううん…、何でもない。さあ、行こう、勇斗君♪」

勇斗「そんなに急かすな。誰も逃げやしねえよ」

すずかはそう言い、勇斗の手を引きながら歩いていった。

勇斗とすずかは昼食を終え、ライオンの赤ちゃんの撮影会に来ていた。

すずか「見て見て勇斗君！！すごく可愛いよ♪」

すずかは満面の笑みを浮かべて、ライオンの赤ちゃんを抱きながら勇斗に言う。

勇斗「そうだな、可愛い顔をするもんだこいつ等は」

勇斗はそう言いながら周りにいるライオンの赤ちゃんを見る。
って言うか勇斗の方にライオンの赤ちゃんが多く懷かれてる。

すずか「…勇斗くんすごい人気だね…」

勇斗「まあ俺は動物の扱いに慣れてるからな」

そう言っただけライオンの赤ちゃんの顎を撫でる。

そのライオンの赤ちゃんは気持ちよさそうにする。

勇斗「そうかそうか、お前この撫で方がきもちいいんだな？ならこれもいいだろ？」

ライオンの赤ちゃん「ゴロゴロ…」

猫っぽい鳴きかたをするライオンの赤ちゃん（ネコ科の動物だけだね）。

ライオンの赤ちゃんにやさしく微笑む勇斗を見てすずか含む女性陣が胸キュンしたとかしないとか。

そうして、勇斗とすずかのデートは終わろうとしていた。すずかは歩いて帰りたいと言って、鳴海市の駅前まで来て降りた。そして、勇斗はすずかを家まで送っている。

すずか「今日はありがとう…、勇斗君。とっても楽しかった♪」
勇斗「そうか、それはなによりだ」

勇斗は嬉しそうな顔をする。

すずか「…ねえ勇斗君…、幸せは見つからない？」

勇斗「幸せ？…そうだな…、そもそも俺は、何が幸せかわからない…。だが、なのは、フェイト、はやて、アリサ…、そしてすずかと奏と過ごしていくと幸せが見つかるかもな」

すずか「…そう…、早く、見つかるといいね？勇斗君…」

勇斗「ああ…そうだな」

そして、すずかの自宅前に着いた。すると、すずかは勇斗に振り向き、言う。

すずか「勇斗君、ちょっと顔を下げてください？」

勇斗はこれを聞いて頭を掻く。

勇斗「ハア…分かった」

勇斗はすずかに言われるまま、顔を下げる。

すると、すずかは勇斗の両頬に手を添えて、キスをする。しかも、デープキス。

すずか「ん…、レロツ…、チュツ…」

勇斗「……………」

勇斗はすずかにされるがままにデープキスをされる。

そして、すずかの唇が離れる。

すずか「…私は、勇斗君が好き…。だから、なのはちゃんたちには負けない…。いつか、勇斗君のほうからキスしてね？それじゃあま

たね♪」

すずかはそう言いながら、自宅に帰っていく。

勇斗「…すずかのやつ…、意外と大胆だな…。控え目なやつだと思
ってたんだが…」

勇斗はやれやれとして自宅へ戻る。

その途中、

勇斗「まさかあの3人娘もやる気じゃないだろうな？」

更に不安が積っていくのであった。

くおまけく

奏「奏ちゃんの、お便り質問コーナー!!!では早速『カイザー』さ
んからよ。『どうも、カイザーです。』

早速質問です。勇斗の従えてる機械生物は色々いるみたいですが、種類はどれくらいですか？

そしてもうひとつ。フェイトの夢って・・・プツ・・・いったい・・・
プクク・・・何ですか・・・クククッ↑笑いをこらえてる』ああ、お兄ちゃんの従えている機械生物含んでいろいろ種類豊富だよ？虫型、人型、鳥型、インベーター型、大型、動物型、その他とね。あとフェイトの夢って言うのはもちろん少年少女の保育園…」

フェイト「違います！！私は子ども達に未来を与えるためにやるだけです！！」

奏「だそうだって。それじゃあまたね」

第二十八話：すずかとデート（後書き）

吸血姫と魔王って似合うと思わないか？

第二十九話：はやてとデート

すずかとデートした次の日の朝、はやてからメールが届く。10時に駅前待ち合わせと打ってあった。

そして、勇斗は30分前に待ち合わせ場所に来る。

待ってる途中、2人組の大学生くらいの女性達が勇斗に声をかけてきたが、断った。

待ち合わせ10分前になるくらいにははやてが来た。

はやて「勇斗君お待たせ!でももう来てたん?まだ10分前やで?」

勇斗「女性を待たせえるのは男としてよくないからな。だから早めに来たんだ。それじゃあ今日はどうする?」

勇斗ははやてに聞く。

はやて「そやなー、観たい映画があったし映画観ようか?勇斗君」

勇斗「そうだな、それじゃあ行くか、はやて」

はやて「そやね。行こう、勇斗君♪」

はやてはそう言いながら勇斗に腕を絡める。

勇斗「：フェイトといいすずかといい、年頃な女性は腕をからめるのが好きか?」

はやて「分かってへんな。腕をからめることはスキンシップの一つなんやで?」

勇斗「ほどほどにしとけよ」

はやては勇斗の腕を引きながら、映画を観に向かった。そして、映画館に着く。はやてが観たいと言っていたのは、ちょっと大人向け

の映画だった。

映画館内

勇斗とはやては、二人並んで映画を観ていた。はやては勇斗の横顔をチラリと見る。真剣な表情で映画を観ていた。

はやて（勇斗君、こういう映画でも退屈そうにしないなあ。…それにしても勇斗くん奇麗な顔しとんな。待ち合わせの時も女の人に声かけられてたし、やっぱモテるんやろうな…）

そんな様子に気づいた勇斗ははやてに声をかける。

勇斗「どうしたはやて」

はやて「う、ううん！何でもあらへんよ？／＼／＼」

はやては慌てて画面へ向く。

すると映画がバトルシーンに入った。

はやて（凄い迫力やなあ…勇斗君は…）

はやては勇斗の様子を見たが、先ほどと変わらない様子で映画を観ている。

はやて（あんな変化はないなあ…。…ちょっと手をつないでみるかな？）

はやてはそう思いながら、手すりにある勇斗の手を握った。すると、勇斗は特に何か言う訳でもなく、はやての手を握り返してきた。勇斗を見ると、変わらず映画を観ている。

はやて（こういう気遣いできるのも、モテる原因やろうな……。まあ、うちも惚れた一人やけど。／＼／＼）

そんな感じで、勇斗とはやては映画が終わるまで手をつないでいた。

勇斗とはやては、映画が終わったあと、昼食を食べてショッピングを回っている。

はやて「勇斗君、これ似合うかな？」

取り出したのは茶色のワンピース。

勇斗「茶色ならはやてに似合うやつだな」

はやて「え？あ、ありがとう／＼／＼／」

はやては顔を赤くする。

勇斗「さて次：ん？」

勇斗は一つの洋服を見つけた。
それは罪と大きく描かれた黒いシャツだった。

はやて「お？このシャツ勇斗君にぴったりやな♪」

はやては何気なく言う。

勇斗「罪…か…」

はやて「勇斗君？」

はやては勇斗の顔を覗き込むと、なんだか悲しそうな目をしている。

勇斗「・・・何でもない。次行くか」

はやて「・・・しゃーない」

勇斗とはやてはショッピングを楽しんだ。

海鳴市の公園

公園のベンチで勇斗はコーヒ―、はやてはポカ리를飲んでいる。

勇斗「なあはやて」

はやて「なんや？」

勇斗がはやてに声をかける。

勇斗「罪をもつ人間は…どう生きればいい？」

それを聞いたはやては絶句した。

はやて「な、なんや突然…」

勇斗「例え話だ。はやてに通ずることだけどな」

真剣な顔で言う勇斗。

勇斗「過去のはやては闇の書という闇に取り込まれた。なのは達のおかげで解決したが、シグナム達が人を傷つけたという罪がある」

はやての体が震える。

勇斗「だが罪から逃げろと言うわけじゃない。背負って前へ進むところそ人は強くなる。そうは思わないか？」

はやて「勇斗君…」

勇斗「周りが何と言おうがそんなもん放っておけ。お前はお前の信じる道を行けばいい。挫けそうになれば誰かに頼ればいい。はやて、お前は一人じゃないんだぞ」

勇斗はそう言いながら、はやての頭を撫でる。

はやて「…ありがとうな、勇斗君…。少し元気出たわ。」

はやては目の端に涙を溜めながらも、笑いながら勇斗に答える。

勇斗「…俺と比べりゃ、はやての方がまだ軽いしな」

勇斗はボソツツと呟くが、はやてに聞こえてしまった。

はやて「ちょいまち。今なんて言ったんや？」

勇斗「・・・俺とはやての背負う罪の違いのことだ」

勇斗の言葉にはやては言い辛そうでも思い切って聞いてみる。

はやて「ゆ、勇斗君はどんな罪を？」

勇斗「・・・幾多の人間に血を浴びた罪だ」

はやては絶句した。

人間の血を浴びた。つまり人を殺したということだ。

悲しそうな遠い目で空を見る勇斗。

勇斗「俺の世界では数多くの邪悪な心をもった人間どもがいる。無論そう言う人間は放置しておくといつか最悪なことをしてかすからな。：そうするとはいえ、魔物ならどうでも好きそうだが、人を殺るのはあまり気が進まない。魔王になっても人間の心が残っている証拠だな」

己の手を見て言う勇斗。

人間を多く殺めた勇斗はたくさんの血を浴びている。
それを聞いたはやては勇斗に抱きついた。

勇斗「はやて？」

はやて「勇斗君がどんな人であろうが勇斗君は勇斗君や。私達にも気遣わせてくれたんやしな、それが勇斗君なんや」

優しく勇斗に語りかけるはやて。

温かく包まれた勇斗は少し心が晴れたように感じた。

勇斗「：やれやれ、まさか自称未来の妻になる女から支えられるなんてな」

はやて「自称やない。これからなるんや。その証拠に」

はやてはベンチから立ち、まだベンチに座る勇斗の前に立つ。

勇斗ははやてを見上げる。次の瞬間、

はやて「…ん…♪」

勇斗「…」

はやては前屈みになり、勇斗にキスをした。そして、はやての唇が離れる。

はやて「私のファーストキスやで？それじゃあな、勇斗君♪」

はやては顔を赤くして微笑みながら、帰っていく。

勇斗「やれやれ、後先が思いやられそうだな。なのはもアリサもやっつきそうだな」

勇斗はこんな思いをあと二回も経験すると想像しながら帰宅した。

第二十九話：はやてとデート（後書き）

勇斗も奏も元は人間だったんです。だから罪の意識も出来るのです。後にはやてだけでなくなのは達も受け入れることになるでしょう。

第三十話：アリサとデート

はやてとデートの次の日、リビングで休んでいるとインターホンが鳴る。

なのは「はい！！どちら様ですかー？」

なのはが玄関に向かう。そして、黒いオーラを出しながら戻ってきて、勇斗に言う。

なのは「…勇斗君…、アリサちゃんが来たよ…」

勇斗「アリサか、ありがとな」

なのは「…どういたしまして…」

なのはが笑いながら返事をする。だが目が笑ってない…。勇斗はそれとなくフォローする。

勇斗「…なのは、あとでキスでもハグでもしてやるから我慢しとけ」
なのは「分かった勇斗くん！！／／／」

なのはは今度は顔を赤くして元気よく答える。

勇斗はしてやったりな顔になる。

勇斗「それじゃあ、行ってくる」

なのは「あ、うん。行ってらっしゃい。…明日は私に付き合ってもらうから…」

勇斗「わかったよ、じゃあな」

勇斗はそう言い、玄関を出た。そこにはアリサが仁王立ちしながら

待っていた。

アリサ「遅い！私を待たせるなんていい度胸じゃない…！！」

どうやらアリサはご立腹のようだった。

勇斗はすかさず言い訳を言う。

勇斗「すまないな、お前と出かけるのが楽しみでつい寝坊してしま
った」

アリサ「ふ、ふん、そう言うことなら許してやるわ…／／／」

そして、勇斗とアリサはリムジンに乗る。

勇斗「それで？アリサお嬢様は今日はどこへ行く気ですか？」

ちょっと紳士的に語る勇斗。

アリサ「なんか引つかかる言い方ね…。まあいいわ、新しく出来た
ショッピングモールに行くわ。」

勇斗「わかった、それじゃあ行こうか」

そうしてショッピングモールについた。

アリサ「それじゃ行きましょう、勇斗／／／」

アリサは顔を赤くしながらそう言い、勇斗の腕に抱きつく。

勇斗「…今日は1日お付き合いたしますよ、アリサお嬢様（この喋り方少し疲れそうだ…）」

勇斗とアリサは洋服売り場に来ていた。

勇斗「なんか欲しい服でもあるのか？」

アリサ「見てから決めるわ。」

勇斗「…王道派か。悪くない」

アリサは黒いワンピースを見ている。そして勇斗に聞いてくる。

アリサ「どう？勇斗。似合う？」

勇斗「似合う似合わないの二択なら似合うな。ていうか、お前はだいたい似合うだろ。可愛いから」

アリサ「か、可愛いとか言うな！／／／」

勇斗「そう怒るなって」

そして一通り買い物をしたあと、勇斗とアリサはカフェテリアで昼食を注文しようとしていた。

勇斗「俺はホットドックとアイスコーヒー。アリサは？」

アリサ「私はタマゴサンドとオレンジジュース」

ウェイトレス「はい！かしこまりました！ご注文繰り返します。ホットドックお一つにタマゴサンドお一つ、アイスコーヒーお一つにオレンジジュースお一つですね？少々お待ちください！」

ウェイトレスが離れていく。

アリサ「そういえば、勇斗と二人きりで出かけるの初めてね」

勇斗「そうだな、恋人同士のデートはいいのかな？」

小悪魔っぽい顔でニヤニヤ笑う勇斗。

アリサ「バツ！、馬鹿言ってるじゃないわよ！ゆゆゆ勇斗と私が恋人同士なんてどんとこい！って違う違う！寧ろ一緒にして！じゃない！」

アリサはパニックってしまった。

勇斗はやれやれとしてアリサを落ち着かせる。

そんなことを話していると、食事がきた。

ウェイトレス「お待ちしました。ごゆっくりどうぞ！」

勇斗「ああ、ありがとうな」

勇斗が微笑みながら言うと、ウェイトレスは赤くなって返事をする。

ウェイトレス「そ、それでは失礼します！／／／」

ウェイトレスはそそくさ行ってしまった。

ゲシッ！

勇斗「ッ！？」

アリサにすねを蹴られた。アリサは不機嫌そうな顔をしていた。

勇斗「痛いな。何するんだアリサ…」

アリサ「…足が滑っただけよ…」

そんな感じで昼食は終わった。そしてショッピングモール内を色々見て回る。

勇斗「悪いがアリサ、お手洗いで用を済ませたい」

アリサ「わかったわ、ここで待ってるから行ってらっしゃい」

勇斗「ああ、すぐ戻る」

そう言い、勇斗は御手洗いに向かった。

勇斗が御手洗いに行ったあと、アリサは近くのベンチで座って待っていた。

アリサ（ふう…、なんで私素直になれないのかしら？勇斗、か…。
最初はボランティアな人かと思えば別世界の魔王で、私達とは違う大きな経験をして、そして、いつの間にか好きになってた…。勇斗ってどんな女の子が好きなんだろう？ああもう！！なんか一人だと色々考えちゃう！！）

アリサが一人でそんなことを考えていると、3人組の男たちがアリサに声をかけてきた。

男1「もしかして彼女一人？だったら俺たちとお茶しない？」

アリサ「…間に合ってるわ…」

アリサは言うが、男達はしつこく言う。

男2「そんなつれないこと言わないでさあ、ちょっと付き合ってよ？」

アリサ「間に合ってるって言ってるでしょ？2回も言わないわからない程馬鹿なの？」

アリサがそう言うのと、男たちは態度を変える。

男3「このアマ、下手に出てれば調子乗りやがって!!」

男の一人がアリサの腕を掴む。

アリサ「痛い!!汚い手で触らないで!!」

アリサは掴んできた男にビンタする。

男3「いってえな!!このアマ!!」

男がアリサを殴ろうとする。

アリサ（助けて!!勇斗!!）

アリサは目を瞑りながら、心の中で叫ぶ。すると、

ガシッ!

男3「ぐっ!?!」

殴ろうとした男が誰かに掴まれるた。
掴んだ人物は勇斗だった。

勇斗「お前ら：俺の女に何してやがる：」
アリサ「勇斗！！」

勇斗が男達を睨み、アリサが駆け寄る。

男1「て、てめえ誰だ！？いきなりなにしやがる！！」

男2「関係ねえやつは引っ込んでろ！！」

勇斗はそれを聞いて言う。

勇斗「聞いてなかったのか？俺の女に何してくれてんだって。大体お前ら程度の奴じゃアリサどころか他の女共でも釣り合わん。サッサと出直してきな」

男1「こ、この野郎！！」

男たちは勇斗の言ったことに逆上し、殴りかかってくる。
が、勇斗は片手で男の拳を受け止めた。

勇斗「なってないな。お前の拳はその程度か？」

男1「な？」

勇斗「いいか？拳というものはこうするんだよっ！！」

男1「ゲビョッ！」

もう片方の手で男の顔面を殴り飛ばした。

勇斗「：次に手え出しやがったら命はないと思え。いいな」

男2・3「ヒ、ヒイイイイイイイイイイイ！！！！」

男達は勇斗とアリサから逃げだした。

その時周りから歓声の聲が上がる。

女性「凄いわねあなた！」

男性「実はあいつらここよくナンパが激しかった奴ら何だが、それをあっさり引かせたなんてすごいな」

周りから感謝の言葉を言われると、あることを思い出したかのような顔になる。

勇斗「アリサ、警備員とかくる前に逃げるぞ？」

アリサ「ちよっと！？／／／」

勇斗はアリサをお姫様抱っこしたまま駐車場まできた。そしてリムジンに乗る。

アリサ「もう…、恥ずかしかったわ…／／／」

勇斗「わりいな。そのわりに満更じゃなかったようだが…」

アリサ「そんなのほっときなさい！／／／／」

勇斗「はいはい・・・」

話していると、高町家前についた。勇斗はリムジンを降りる。

アリサ「…勇斗…、ちよっと待って」

アリサはリムジンの窓を開け、勇斗に声をかける。手招きしているので近づく。

勇斗はアリサがやろうと知ることを理解する。

勇斗「なんだ、アリ…！？」

勇斗が近づくと、アリサは窓から乗り出し、勇斗にキスをした。

アリサ「…ん…、チュッ…」

そして、アリサの唇が離れる。

アリサ「…助けてくれたお礼よ…、じゃあね！勇斗♪／／／」

アリサは赤くなりながらそう言うのと頭を引っ込めて、窓が閉まる。
そしてリムジンが走り去っていった。

勇斗「…アリサもか…本当に先が思いやられそうだな。・・・で？
そこで何してるなのは」

窓からなのは見ていた。

黒いオーラを纏って。

なのは「べつに？偶然勇斗君がアリサちゃんにキスするなんてね…」

目のハイライトが消えている。

勇斗「なら明日のデートはなs「いきます！」・・・素直でよろしい」

勇斗が言い切る前になのはが答えた。

女性の扱いが上手なのかどうなのかであった。

第三十話：アリサとデート（後書き）

意外と男儀のある行動でした。

凄いね。

第三十一話：なのはとデート（前書き）

さいごになのは。でもこの後にどうもイベントが…。

第三十一話：なのはとデート

なのはは勇斗とデートをするため自室で準備をしていた。

なのは（ジャンケンではみんなに負けちゃって最後だけど、やっぱり勇斗君とデート出来るのは嬉しいの♪）

そして準備していると、私服姿の勇斗が顔を出してきた。

勇斗「ずいぶん機嫌が良さそうだな？そんなに俺とのデートが好きか？」

なのは「だって私が大好きな勇斗君だもん。嬉しいよ」

なのはは嬉しそうに言う。

勇斗「そうか、なら気を付けた方がいいかもな」

なのは「？」

なのははわけが分からなかった顔をしたが、とりあえず気にしないことにした。

遊園地前

勇斗となのはは、共に家を出て、遊園地に来ていた。なのははいつもと違い、髪を下ろしている。

なのは「勇斗君、早く行こ♪」

なのははそう言いながら腕を絡めてくる。

勇斗「そうだな。何処行こうかな」

そしてジェットコースターを見て勇斗が言う。

勇斗「面白そうだな。あれに乗るか」

なのは「…うわぁ…、ちよつと怖そう…」

そして勇斗となのははジェットコースターに乗る。

なのは「…うう…、緊張するよぉ…」

そして、ジェットコースターがレールを登りつめ、降下する。

なのは「きゃあー!?!」

勇斗「…いつも空飛んでるくせに…」

勇斗はシド目でなのはを見る。

ジェットコースターから降り、なのははベンチで休んでいる。

なのは「ふええ…」

なのはは目を回している。そこに、勇斗が飲み物を差し出す。

勇斗「情けないなのは。これでも飲め。落ち着くぞ?」

なのは「ありがとう、勇斗君」

勇斗に礼を言って、なのはは受け取った飲み物を飲む。

勇斗「さて、次はどこに行くんだ？なのは」

なのは「それじゃあ次はあれに乗ろう！」

なのははそう言うと、メリーゴーランドを指を指した。そして、勇斗となのははメリーゴーランドに乗っていた。だが、

勇斗「…大胆にもほどがあるんじゃないか？」

なのは「だって、一度やってみたかったし♪」

勇斗はなのはをお姫様抱っこしたまま馬に乗っていた。周りの視線？勇斗はそんなの気にしない。

勇斗「はあ…、まあ今日はお前に付き合うって約束だからな。希望は出来るだけ叶えてやるよ、なのは」

なのは「ありがと♪」

その後、様々なアトラクションをまわった。その後、勇斗となのはは帰宅した。

そして夜、勇斗が自室で寝ようとしていると、なのはが来る。

なのは「勇斗君…、今日一緒に寝ていい？」

勇斗「…好きにしろ…」

なのは「やったー♪」

そして勇斗となのははベッドで並んで寝転がる。

なのは「今日は楽しかったね、勇斗君」

勇斗「そうだな、楽しい一日だったな今日は…」

勇斗がそう言うとなのはは急に勇斗に乗っかってくる。

なのは「…ねえ勇斗君、私って魅力無い？」

勇斗「…急にどうした…？」

なのは「勇斗君…、年頃の女の子と一緒に寝てるのに何も感じない？」

なのはが妙に色っぽく囁く。

勇斗「…なのは…」

なのは「…私は勇斗君が好き…。ずっと前から…。…もし、勇斗君が望むなら、私…」

なのはの言葉を聞き、勇斗は真剣な表情で答える。

勇斗「…なのは俺は人から外れた存在だ。何万年も生きて得たものと言えど仲間、とも、家族、そして今手に入れたのはお前達という存在だ。だから知らんが、俺はお前達が好きなのかもな…」

勇斗の言葉を聞いたなのはは、微笑みながら言う。

なのは「…勇斗君…。私、待ってるよ。勇斗君が答えを得るのを、

ずっと待ってる…。でも、これくらいはいいよね？」

なのははそう言うと、勇斗にキスをする。

なのは「…チュッ…、ん…、…はぁ…」

勇斗「…ずいぶんと強引なキスだな、身体に乗っかってするなんて…。」

なのは「…ふふ♪いつか勇斗君からしてね？」

勇斗「…考えてやる…」

勇斗はそう言って立ち上がる。

なのは「？何処行くの？」

勇斗「それはこれを見てからだ」

勇斗が扉を開けると、何とフェイト、はやて、アリサ、すずかがなだれ込んできた。

なのは「ふえ！？フェイトちゃんはやてちゃんアリサちゃんすずちゃん！？」

勇斗「大方俺となのはのデートのあと付けてきたんだろ？」

フェイト「え？いや、その…」

はやて「あははは…ばれたか…」

なのはは驚き、勇斗はため息を吐き、フェイトは誤魔化そうとして、はやては苦笑いを浮かべる。

アリサ「そんなことより！勇斗！順番とは言えなのはといいことしようだなんてそうはいかないわ！」

勇斗「そりゃお前が早とちりしやすい体質だからだ」

すずか「ゆゆゆ、勇斗君！わわわわ私ともつとででデート…」
勇斗「オーケイすずか、後で池に放り込んでやる」

勇斗は毒のある言葉で返す。

勇斗「全く、お前らというやつは落ち着きという言葉はないのか？」
はやて「確信犯が何いっとんのんや」

勇斗「…フンッ」

鼻で笑う勇斗。

すずか「ああああの勇斗君…／／／」

すずかが顔を真っ赤にして何か言いだそうとする。

すずか「わわわ私と…私達と●ロ……あっ！／／／」

勇斗「は？」

なのは・フェイト・はやて・アリサ「ッ！？／／／／／」

すずかのスッゴイ意外すぎる言葉に勇斗は哑然。なのは達は真っ赤の染まった。

勇斗「すずか…いくら俺のことが好きだからってさすがに行きすぎは駄目だぞ？」

すずか「いい、いやいやいや！別にそんなこと言ったつもりはなくて！ただ不本意で！…」

すずかは手をぶんぶん振って否定しようとする。

はやて「ヌググ…こうなったらあんま使うつもりはなかったん

「やけど……」

「え？ はやてなににする気なの？」

はやてが手を握つてあることをしようたくらむ。

はやて「それはな…勇斗君と《ピーーーーーー！（絶対自重）》することや！！／／／／／」

なのは・フェイト・アリサ・すずか「ツツ!!!!!!?」
／／／／／／／／／／

はやてが18歳未満お断りな言葉を言いやがってなのは達は顔を真っ赤っかに染めた。

勇斗「・・・お前ら？正気か？」

はやて「そんな言われてもうちらは初めてや……。けどな、だからと言って決めた事を丸投げするのは気が持たん！ 乗りかかった船や！ うちでよければ！」

なのは「な! ? はやてちゃんでも勇斗君は渡さないよ! ! 勇斗君! 私でよければ! 」

フェイト「なのも抜け駆けは駄目だよ！ 勇斗！ 初めてだけど私頑張るから！」

アリサ「お、男とアレするのはあたし抵抗があるけど…勇斗君となら腹くくってやるわ！」

「ゆ、勇斗君となら私なんだってやるよ！」

なのは達はもう腹くくつたらしい。

勇斗はハアっとため息を吐いて、

勇斗「全く、これじゃ5人も妻が出来そうだな」

そう言ってなのは達に向く。

勇斗「良いぜ。そう言ったんなら覚悟しておけよ？」

ニィッとSな笑みを浮かべてなのは達に近づいた。

第三十一話：なのはとデート（後書き）

次回はちよつとムフフなイベントが起きます。なので「これは止めてえええ!!」だと思ったら立ち去ることをお勧めします。

第三十二話：乱れし娘達と魔王（●）（前書き）

これから先はムフフエッチな表現あり！私は大人ですと言えない人は立ち去る方が宜しいです。

第三十二話：乱れし娘達と魔王（●）

勇斗「ハグ・・・」

なのは「ん・・・」

まずはじめに勇斗はなのはにキス。

舌と舌が絡み合い、離すと透明な糸が垂れ下がる。

同じくフェイト達にも同じことをする。

勇斗「・・・軽い攻めはどうも腑に落ちん。次はこっちを試すか」

5人娘「きゃっ！」

今度は5人の服をはぎ取った。（破ってません）

5人の見事なメロン（一名は微妙・・・）が露出する。

はやて「ちょいまちい！！何処が微妙やてっ！？」

勇斗「誰に向かって言ってるんだ？」

はやてが空想の存在に向けて怒鳴るが、勇斗が突っ込む。

勇斗「さて・・・」

ムニユッ

フェイト「ヒヤッ！／＼／＼／」

勇斗がフェイトの胸を掴む。

勇斗「ほう？これは将来大物になれそうじゃないか」

フェイト「い、ああ・・・／／／／／」

驚掴みでいじりまくる。

なのは「わ、私だって成長したんだよ！／／／／／」

アリサ「フェイトだけなんてずるいわ！／／／／／」

すずか「勇斗君、出来れば私も：／／／／／」

はやて「う、うちかって関西の根性見せたる！／／／／／」

なのは達も便乗してくる。

つーかはやて関西関係ないだろ…。

勇斗「それは構わんが、その前に…」

勇斗はなにもない場所に魔力で作ったナイフを投げる。

パシッ、パシッ、パシッ、サクッ、ピッ

刺さった人「ギアアアアア！！刺さったアアアアアアアアア！！
！」

悲鳴が聞こえた。

そこから奏、レフィア、レイナ、メイ、シーナの姿があらわれた。

メイリンの額には刺さったナイフがある。

そして奏はというと、血涙流して凄いオーラを流して言った。

奏「ギ~~~~ザ~~~~マ~~~~ラ~~~~！！！」

勇斗「オメエは落ち着け」

パシッ！

奏「イタッ！」

チョップを喰らって元に戻った。

奏「ってお兄ちゃん！！私…てか私達がいながら何でそんな奴らと
！！！」

奏は涙交じりに異議だし、なのは達は少しムツとなる。

勇斗「何だお前ら、さびしくて待ってられなかったのか？」

冗談交じりにぼやく。

シーナ「そうだな、あまりにも勇斗が構ってくれなくてさびしかったんだ」

勇斗「あっそう、だったら・・・」

勇斗は羽を広げて空間を作り出す。
すると勇斗が10人へと分裂した。

勇斗×10「やるんだったらこれくらいはしなきゃな？」

勇斗はSな顔をした。

奏はその顔を見て胸キュンしたとか。

なのは「ん…んん！」

奏「んゝ・・・」

なのはと奏はキスされ胸を触られながらいじられる。

フェイト「や・・ああ…」

シーナ「なさけ、ないぞ、フェイト」

フェイトとシーナは背後から胸を鷲掴みでいじられる。

はやて「あ…そこ…気持ちええ…／／／」

レフィア「勇斗、様の、指が…はうっ！！」

はやてとレフィアの秘部がグチュグチュといじられている。

アリサ「あ！、や！そんなとこいじっちゃ・・ひゃう！」

レイナ「勇斗の指が先っぽいじってるゝ」

アリサとレイナの秘部と乳首がいじられている。

すずか「ゆ、勇斗君…もつと奥お願いして言い？」

メイ「なかなか、といったところでしょうか…」

すずかとメイの秘部に勇斗の指が入れられている。

なのは「奏、ちゃん、たちは、いつも、ん、勇斗君、と、してるの？」

右胸と秘部をいじられながらなのはは奏に言う。
秘部の部分から少し濡れている。

奏「いつもじゃないけど、これも、愛の証なんだもん・・・チュッ？」

なのはと同じようにいじられている奏は勇斗に抱きついてキスする。

なのは「…わ、私だって…チュッ？」

なのはは負けじと勇斗にキスする。

奏「お兄ちゃんは立派だけどこっちも立派なんだよ？」

そう言って奏は勇斗のズボンのチャックを開け、18歳以下では見せられないアレを出す。

なのは（わぁ、おっきい・・・）

フェイト（アレが勇斗の…／／／／／）

はやて（奏ちゃん本格的やな…／／／／／）

アリサ（な、なんてデカさ…これも勇斗の…）

すずか（勇斗君の…素敵）

勇斗のアレをみたなのはたちは顔を赤くする。

奏「お兄ちゃんの…臭い・・・ぺろぺろ…」

勇斗のアレを舐める奏。

勇斗は奏の頭を抑える。

なのは「・・・ん？キャッ」

なのは達は誰かに押し倒された。

それはすでにアレのスタンバイが出来た勇斗達。

なのは「・・・良いよ勇斗君、私達を、愛してくれる?」

それを聞いた勇斗達は黙ってなのは達をいじり始める。

なのは「やあ・・・すっちゃ・・・ダメ・・・!」
奏「ウフフ・・・これおいしいよ・・・」

左胸は右手で掴まれ、右胸は勇斗が吸いついてる。

フェイト「:勇斗:これ気持ちいい?」

シーナ「私も負けていないぞ?」

フェイトとシーナは勇斗のアレを自慢の胸ではさんで動かしている。

はやて「・・・にがくて濃い:これが勇斗君の味:」

レフィア「ああ、これで勇斗様の色に染まる:」

はやてとレフィアは勇斗のアレを口に入れている。

アリサ「フフ・・・私のやり方なら気持ちいいでしょ勇斗」
レイナ「こするこする」

アリサとレイナは勇斗のアレを手だけでこすっぺいじる。

すずか「まだ入れないでね勇斗君:」

メイ「うう…まだ初めてなんです…」

すずかとメイは胸を揉まれながら勇斗のアレを秘部にこすられる。

勇斗「・・・もういじり合いは終わり、だ！」

女性陣「やああっ!!」

勇斗のアレが女性陣の秘部に入った。

ブチブチ

何かが破れる音が聞こえた。

勇斗「初めてなのか、無理しなくていいぞ？」

なのは「だ、大丈夫だよ勇斗君…思いっきりやっても」
勇斗「そうか、なら行くぞ」

激しく動かされる。

なのは「…うあ！」

フェイト「…そんな激しく…」

はやて「あ、頭がおかしくなっちゃう…」

アリサ「あっ…でも、んっ、これって…」

すずか「とても、あんっ、気持、いい…」

なのは達は気持ち良すぎたせいか目がトロンとしている。

奏「そりゃ初めての人は、あんっ？、そうなるのよ」

シーナ「フフ…勇斗よ。もっと胸をいじっていいぞ？」

レフィア「勇斗様…」

レイナ「勇斗のアレが中にいい〜:」
メイ「そ、そんな激しく、ひゃああ!」

こちらも気持ち良くなっている。

やがて胸をはげしく揉んだりキスしたり秘部をいじったりしている
と、

なのは「ああ…ゲ、限界…」

奏「気持ち良すぎて…我慢できない…?」

勇斗「奇遇だな?俺の方もそろそろ出そうだ…」
はやて「なら最後はみんな一気に…」

シーナ「思いつきり出してくれ」

勇斗「ならいくぞ」

女性陣「ハアハアハアあつ、ひう、あはっ?」

瞬時にはげしく動かされ、

女性陣「はあああああああああ!」

今まで以上の快感がなのは達を襲う。

勇斗「フツ…これで終わりだと思うなよ?」

勇斗は20人へと増えた。

女性陣「…よろしくお願いします」

女性陣はもっと快感を求める顔になった。

勇斗「…いいだろう」

女性陣「ハアハアハア、あ、あっ？」

そして午前3時までこのやりとりは続いた。

で…

女性陣「♪♪♪♪♪」

なのは達や奏達は勇斗に抱きついている。

勇斗「やれやれ、これじゃハーレムだな」

奏「そのハーレム作ったのどこの誰なの？」

勇斗「ハハハ…」

勇斗は笑いながらスルー。

なんだかんだいって彼も彼女達も辛せそうだった。

第三十二話：乱れし娘達と魔王（●）（後書き）

いかがでしたか？ 今度はちょっと事件があるかも？

第三十三話：聖王のクローン（前書き）

今度は聖王絡み、見てもよし。

第三十三話：聖王のクローン

ミッドチルダのビルの屋上

そこで黒いマントを纏い、ミッドチルダ中を眺めている黒き仮面の男・『暗黒の断罪者』ゼロである。

ゼロ「何といい景色だ。こう言う平和な町でも、どこかに犯罪を運ぶる事が存在するんだな…」

景色を見てそう呟くゼロ。

ゼロ「お前達はどう思うんだ？」

ゼロは振り向かず後ろにいる局員・・・否、最高評議会の局員に言う。

隊長「そうだな。貴様という悪をめっせなければ平和はこないだろう」

ゼロ「俺が悪と？」

隊長「その通り、貴様の存在があるから我々管理局に被害が及ぶ。つまり我々が正義で貴様が悪なのだ」

不敵に笑う局員隊長。

ゼロは苛立ちを覚える。

ゼロ「（・・・やはり、変えねばならんか。この腐った世界を…）悪いが俺は正義な奴とは捕まる義理はない！」

そう言ってマントを翻すと蝙蝠が局員たちを襲った。

局員「クソッ！」

ゼロ「じゃあな」

局員が蝙蝠をどかして進むが、ゼロはビルから落ちた。

そしてマントを羽に変え、ミッドを飛行していった。

途中「おいなんだあれ!？」とか「アレゼロだ!！」とか「暗黒の断罪者ゼロだ!！」とか「ゼロ様ですってっ!？」とか「ゼロ様くっ!！あたしを攫って行っく!！」など住民の声が聞こえた。

ミッドチルダの森

ゼロは森の中へ降りて、あたりを見渡した後、

ゼロ「出てもいいぞ」

っといったあと、魔物たちが現れる。

ウッドマン「ゆゑゼロ様、今回はどのようなことを？」

ゼロ「ミッドのあそこにまた違法研究があるとジェイルから依頼があつてな。今回は俺だけ行くわ」

エンプーサ「行っってらっしゃいませ」

魔物たちは敬礼してゼロはその場を去った。

山外れの研究所

ゼロ「さて、作業にかかるか」

ゼロはそう言ったあと中へと入っていった。

中へ潜入したゼロ。

そこでこの研究所の真意が明らかになった。

ゼロ「・・・『聖王養殖計画』：か」

聖王とは500年前の聖王、オリヴィエ・セーゲブレヒトのこと。
彼女の遺伝子を使って聖王を増殖しようと言うことだ。

ゼロ「…失敗数147…成功がひとつか…ならやることは一つだ」

ゼロは牢屋エリアへ向かった。

牢屋

ゼロが牢屋の場所へ来てみると、血の混じったにおいが漂っている。そこで第一牢屋の中には金髪でボロボロの布を纏い、赤と緑のオツドアイの女性がこちらを見ていた。

??? 「貴方あいつらの仲間じゃなさそうだけど…今更私に何の用？」

ギロリと獣のように睨む女性。

服の上から見えないが、相当ひどい扱いを受けたと見受けられる。

ゼロ 「…自由が欲しいか？」

??? 「え？」

ゼロ 「…自由に…明るい空へ飛ぶ世界が欲しいか？」

ゼロは女性に問いたです。

女性は考える。

??? (普通なら信用できないけど…この人は信用できそう…
・何でだろう)

女性は決意した。

??? 「欲しいわ」

ゼロ 「なら、己という敵、俺の、いや、俺達のために戦う覚悟はあるか？」

??? 「戦うわ。私の生きている理由があるのなら」

ゼロ 「いいだろう。契約だ」

ゼロの足元に魔方陣が展開される。

ゼロ「…ところで聞き忘れていたが名前あるのか？」

「???」「私が今考えた名前があるの。オリヴィアって名前をね」

ゼロ「オリヴィアか、いい名だな。行くぞ！」

オリヴィアに魔方阵が展開される。

ゼロ「古より蘇れし魔王、神道勇斗が命じる！汝と契約し、その身を我に捧げよ！」

オリヴィア「ツツツ!!!!!!」

オリヴィアは苦痛を覚えるが、耐える。

そして痛みが過ぎ去ったあと、大量の汗を流した。

オリヴィア「…何だろう…今までより力が強くなった気がする…」

ゼロ「それが契約の力だ」

オリヴィアは自分の手を見て何か違うと気付息、ゼロが答えると、警報が鳴り出す。

ゼロ「俺との契約で気付いたか…。行くぞオリヴィア」

オリヴィア「ええ、今までの借りをかえさせてもらおうわ」

黒いタイトスの様なバリアジャケットを着て、手をぽきぽき鳴らすオリヴィア。

ゼロ「なら、いくぞ！」

オリヴィア「ええ！」

ゼロとオリヴィアはそこから走った。

局長「こんなときに侵入者とは…何をしている！はやく持ち場を離れろっ！！」

局長が研究員たちに怒鳴り散らす。

オリヴィア「ならあなたは何処に行く気？」

局長「！？き、貴様は…！！？」

自分達が被検体として見てきたオリヴィアが目の前にいて驚く。

オリヴィア「覚悟しろ！これは私の数々の痛み、そして私の同胞たちを殺した者の分だ！！」

局長「ギャアアアッ！！！！」

オリヴィアの魔力の籠もったストレートパンチで局長は気を失った。

オリヴィア「フウ…すっきりした♪」

ゼロ「んで、この後どうすんだ？」

オリヴィア「んゝ、残りの奴ら全員集めてコツテリ絞り取ろうかとか♪」

ニコニコしながら言うオリヴィア。

ゼロはため息を吐く。

ゼロ「わかった。サキユバス共も喜ぶだろうから勝手にやってろ」

オリヴィア「ウフフ・・・」

こうしてここにいた人たち（ゼロは除かれる）はオリヴィアとサキ

ユバス達によって生氣も搾り取られました。

そして研究所破壊後、

ゼロ「さて、早く帰るか」

オリヴィア「そうね」

ゼロは自分の自宅へ帰ろうとし：

???「まちなさい！」

：たところを邪魔ものが現れた。

ゼロ（：俺が去ろうとしたところを邪魔する奴がいやがって…）

ゼロは苛立ち交じりで思い、

ゼロ（そして最悪な奴がいやがるとは…）

そして厄介な相手、高町なのはが目の前にいた。

（自己紹介）

（オリヴィア）

髪…赤みかかった金髪サイドテール

目…赤と緑のオッドアイ

服…聖王時のヴィヴィオと同じ

年齢…15歳

3サイズ…89／54／82

体重…壊された。

性別…♀

種族…聖王のクローン

魔力光…虹

好き…勇斗、勇斗の料理、仲良いみんな、楽しい時間

嫌い…時空管理局、権力者、勇斗を傷つける奴

性格…ヴィヴィオとほぼ同じ

レベル…3000（後に7500とアップ）

得意武器…拳（聖王の籠手）

スキル…聖王の鎧（絶対防御で無効化させる）

詳細…ある研究所でクローンとして生まれた女性。酷い実験を受けたせいで人間をねたんでいたが勇斗との出会いでそれが消え、勇斗とともに歩む道を選んだ（管理局達は恨んでいる）。

第三十三話：聖王のクローン（後書き）

なのはもハーレムの一員にしておくか…。

第三十四話：罨にはまる不屈の少女（前書き）

なのは、魔王化する。・・・ちよつとおもしろそうだ。

第三十四話：賢にはまる不屈の少女

ゼロとオリヴィアは研究所を破壊して外へでると、なのはと対峙してしまった。

ゼロ（・・・参ったな）

ゼロは頭を書きながら心の中で思い、オリヴィアは警戒している。

なのは「器物破損、および現行犯で逮捕します」

ゼロ「・・・お前一人でか？」

今いるのはゼロとオリヴィア、そしてなのはの三人しかない。

ゼロ「・・・いや、後ろに人がいるな」

なのは「!？」

ゼロが呟くとなのはは驚いた顔をする。

ゼロ「どうしてって顔してるな。だが教えんけどな」

なのは「・・・ならあなたを止めます」

ゼロ「・・・やってみな」

なのははレイジングハートを構え、ゼロは指で挑発する。

ゼロの手には刃の付いた銃が握られていた。

なのは「：アクセルシューター！」

レイハ《アクセルシューター》

なのは「シュート!!」

なのは20個のスフェアをゼロに放つ。

ゼロ「…フン」

ズダダダダダ！

ゼロは持つてる銃で撃ち落とした。

ゼロ「今度はこっちの番だ」

なのは「ッ！！？」

ゼロは瞬間移動の如くなのはに近づいた。
なのははとっさに防御の構えをとる。

バツ！

なのは「！？」

ゼロの左手がなのはの胸…心臓部あたりで止まった。

ゼロ「…もし俺が殺人鬼ならさっきのようにお前の心臓をえぐり出したかもしれない。だが…」

バリッ！

なのは「キャッ」

心臓部のバリアジャケットが破られた。

ゼロ「情けを受けるよりも過酷だと思うがな」
なのは「クッ」

なのはは胸を隠しながらゼロを睨む。

ゼロ「さてお前は…？」

何か気配を感じ取ったゼロ。

ゼロ「…悪いがこっちに来い」
なのは「え？ キヤアッ！」

ゼロがなのはの背後を回って捕え、その場から離れる。
なのはのいたところから魔力弾が当たった。

ゼロ「…ずいぶん早いご到着な奴らだな？ 最高評議会！」
隊長「なに、その女について行けば会えるんじゃないかってね」

屁理屈なことを言う最高評議会の局員隊長。
なのはは少しわけが分からないかのような顔をしている。

隊長「君ら諸共消えてもらおう。放て！」

隊長の命令と共に魔法が発射された。

ゼロ「捕まっている」

ダンッ！

ゼロはなのはを抱えて飛び上がった。

隊長「いまだ！」

飛んだところについて攻撃するが、それは幻影だった。

ゼロ「残念だったな。エアプレッシャー」

隊長「ぐああ！！」

ゼロの魔法で最高評議員達は地面に突っ伏した。

ゼロ「オリヴィア」

オリヴィア「行くよ、聖王玉！」

ゼロがオリヴィアを呼ぶと、上空で虹色の巨大な魔法が局員たちに向かって行って、爆発した。

晴れると局員たちはいなくなり、クレーターだけが残った。

ゼロ「さて、こいつをどうするかだな」

なのは「・・・・・・・・・・」

ゼロはなのはを見ると、信じられないかのような顔をしていた。

ゼロ「：シッ」

なのは「うっ！：」

首筋にチョップをかまし、なのはを気絶させた。

薄暗い洞窟

なのは「う…うん…」

ゼロ「目が覚めたか？」

焚火の明るい光でなのはが目を覚ます。

ゼロ「先に言っておくが余計なことはしないように身ぐるみは剥がさせてもらった」

なのは「っ！！？／／／／／」

ゼロの一言でなのはは裸になっている事に気付き、顔を赤くする。

なのは「…私をどうする気？」

ゼロ「何もしない…と言えば少し違うかもしれないが」

なのははゼロを警戒しながら聞き、ゼロは答える。

なのはは次の質問を言う。

なのは「…じゃあなたはあそこでなにをしていたんですか？」

ゼロ「…『聖王養殖計画』の破壊だ」

ゼロの答えを聞いてなのはは驚愕した。

ゼロ「お前の想像通り、古代ベルカの聖王・オリヴィエ・セーゲブレヒトのクローンを作りだす計画をしていたんだ。そして唯一の成功体が彼女・オリヴィアだよ」

オリヴィア「……………」

オリヴィアは黙って炎を見ている。

ゼロ「そこでそれを無に帰して去ろうとしたらお前らが現れた。これだけだ」

ゼロはまだ話を続ける。

ゼロ「せっかくだから教えてやる、お前が付く管理局の上の奴らの正体をな」

そして管理局の目的、数々の違反行為、上層部の思惑などを話した。

なのは「そんな・・・」

なのはは絶望したかのような顔になる。

ゼロ「言っておくが表ではお前は行方不明とされた。戻ったところでやつらに殺されるのがおちだ。だから選択を与える。“あの場に戻る”か、“俺達と来る”かだ」

なのはは考えた。

あの場に戻ることは自ら自殺しに行く物。

そしてはやてやフェイトにも迷惑がかかる。

そして後者の方は悩んだが、なぜだか知らないが“信用してもよい”と思われる。

なのは「・・・分かりました。あなたに着いて行きます」

なのはの決意ある眼がそう言い聞かせた。

ゼロ「クツクツクツ・・・いいだろう、ならば契約しよう！古より蘇れし魔王、神道勇斗が命じる！汝と契約し、その身を我に捧げよ！」

なのは「え？勇斗……くうつ……！！……？？」」

なのはの体全体に激痛が走った。

治まると、いたみも長年の疲労もウソみたいになくなった。

なのは「体が軽い」

勇斗「そうだ、お前は俺と契約したからな」

ゼロは仮面を外して勇斗になり、言う。

なのは「まさか、今までのゼロさんも、あの時薬を渡したのも全て
勇斗君が？」

勇斗「その通り、さて、契約した時点で素晴らしいもんが手に入っ
たぞなのは？」

なのははそれを聞いて首をかしげる。

勇斗「…なぜかお前の称号が『魔女女王神』になっていることだ」

なのは「・・・ふえ？　・・・・・・・・・・ふええええええええええええええええ！！！？？」

なのはありえないことに驚きを隠せない。

勇斗「どうだ？魔王になった感想は？」

なのは「ちつとも良くないよ!!」

なのはは勇斗に怒る。

オリヴィアもさすがにそれはないだろうと同情の目で見える。

勇斗「…だが俺と一緒に出来るかな？」

なのは「はっ！？その手があったか！」

勇斗の一言になのは手をぽん！とした。

なのは「勇斗君！私は勇斗君の一人前のお嫁さんになるよ！」

オリヴィア「お嫁さん！？だったら私も！！」

勇斗「お前らは…」

勇斗は争い合う2人を見ながら少し笑う。

＼おまけの紹介＼

＼高町たかまちなのは＼

髪…栗毛サイドテール

目…蒼（魔王モードでは赤）

服…白から黒に変わっただけ・ファイターフォーム（聖王ヴィヴィオと同じバリアジャケット）へ変形できる（自由に変えられる）

3サイズ…88／55／83

体重…桃色の閃光が…

性別…♀

種族…魔女王神

魔力光…桜色（魔王モードでは赤黒）

好き…勇斗、友達、ケーキ作り

嫌い…管理局、孤独、無茶なやり方をする人

性格…基本しっかり者。魔王になってからドS思考が出るようになったとか

レベル…9999

レイジングハート

得意武器…杖

スキル…絶対零度（その目で睨まれたら心も体も冷え切ってしまう）

絶対なる無（ありとあらゆる力や技や能力を無にする。固有結界だろうと魔法だろうと必殺技だろうとかき消す）

詳細…勇斗と契約して大きな力を手に入れたのは。魔王になったことは最初は嫌がったものの時がたつにつれ満更じゃなくなっていく。

第三十四話：罌にはまる不屈の少女（後書き）

魔王なのはのご誕生。．．．いいな。

第三十五話：魔王神なのは噂

時空管理局本部

そのある部屋のベットの上で座って落ち込んでいるフェイト。
そこにはやてがやってきた。

はやて「ここにおったんかフェイトちゃん」
フェイト「はやて…」

元氣なくフェイトが声を出す。
無理もない、なんせ親友のなのはが指令を受けてから行方不明にな
っているのだから。

はやて「フェイトちゃん、これは言いづらい事なんやけど…なのは
ちゃんが受けた任務にゼロが現れたとの事や」

フェイトはそれを聞いて驚愕した。
おそらく途中に現れたゼロがなのはを攫って今も監禁していると、
そう思った。

はやて「管理局は全面的にゼロをたたくつもりやけど…フェイトち
ゃんはどうすんの？」

はやて自身ゼロは犯罪者だが、どうも腑に落ちないと心から訴えて
いる気がするのだ。
フェイトは応える。

フェイト「ゼロの動向も気になるけど、私はなのはを助ける！」

はやて「よく言ったフェイトちゃん！ならやることは一つや！」
フェイト「うん！（待っててね、なのは）」

フェイトは親友を思いながら駈け出した。

一方その親友なのはというと、

なのは「…全然齒ごたえが無いの。すっごくつまらないの」

拍子抜けな顔で半殺しにした局員たちを見ている。

オリヴィア「そっちは終わったみたいね」

なのは「まあね」

オリヴィアがやってきて同意する。

その手には傷だらけの女性局員がいる。

なのは「なにそれ？」

オリヴィア「戦力増加」

なのは「・・・」

オリヴィアの答えになのはは怪しい笑みを浮かべる。

なのは「だったらちよっと…やっちゃおう？」

オリヴィア「ええ、やりましょう」

なのはとオリヴィアは気絶している女性を、犯シ始メタ。

女性「・・・・・・・・／／／／／」

なのはは後ろから女性の秘部を、オリヴィアは胸を犯す。
その時女性の体が反応して顔が赤くなる。

どんだん犯られていくごとに女性は体を疼かせていく。

やがて女性は、飢エタ獣ノヨウニ赤イ目ヲ光ラセタ。

なのは「さて、あなたはこの人達の処分をお願いね？」

女性「：はい／／／／／」

何かに甘える声が女性から出た。

なのは「で、次の標的はターゲットは：あれかな？」

なのはの視線の先にはいかにも怪しそうな建物が一つあった。

破棄された研究所

なのはとオリヴィア、そしてなのは達の奴隷になった女性3人がいた。

周りをくまなく調べると、隠し通路を見つけた。

なのは「ここだね。オリヴィア」
オリヴィア「せゝのっ!!」

ドゴーン!!!

拳で扉をぶっ壊した。

なのは「なんか荒っぽいけどとりあえず、お仕置きしなきゃね…」

なのはは魔王でも凍えるような笑みを浮かべた。

オリヴィアや女性三人はなのはの笑みに震えていた。

なんだかんだで潜入して、

研究員「き、きさま「はいごめんね」ウゴッ!?!」

中にいた研究員全員捕まえました。

なのは「こんなに管理局^{バカ}がいたんだね…」

オリヴィア「もうこいつ等は馬鹿以外何者でもないわ」

なのはとオリヴィアは捕まっている研究員たちを見て恨みごもった目で見える。

局長「くっ! 『冷笑の魔王』めえ!」

なのは「…もうそんな二つ名回ったんだ…」

局長の言った冷笑の魔王とは、全てを凍えさせるかのようななのはの笑みからその二つ名が付いたらしい。

??? 「運命がお前を魔王に導かれたのか？」

なのは「イヤ絶対それはないと思いますよシーナさん」

後ろから女性の声が聞こえてなのははふりかえって否定する。

その女性は自称勇斗の妻になる女・シーナである。

実は勇斗から管理局のことを聞いたので協力することになったそう
だ。

知っているのは彼女含め奏、レフィア、レイナ、メイ、蓮牙、聖華
である。

シーナ「…まあどちらにしろ、こいつらにいいものをくれてやるか。
お前を除いてな」

局長「アガバァッ!!」

シーナは局長をけり潰した。

シーナ「さて、魅惑の誘惑臭」

シーナがなんか呪文を唱えるとピンク色の煙が全体を覆う。
すると研究者達の様子が一変する。

シーナ「さて、どんな味が楽しめるのやら…」

なのは「頂こうか」

オリヴィア「ウッフ、頂きまゝす」

少女達吸収中…

こうしている間に研究者達はどんどん精気を吸い取られていく。

そして醜いものへと姿を変えた。

??? 「・・・フーツ・・・」

体がほぼ裸だが筋肉質で、身につけているのは白いふんどしと罪と書かれた白い布のかぶり物（前が見えるために穴があいている）だけである。

精気を吸われた男達の末路、罪男族の存在。

??? 「：フフフ」

逆に女性の方は真っ赤な目に水着の様なものとマントを着ているだけである。

こちらと同じく生気を吸われた女性達の末路の存在、淫女族。

オリヴィア 「人間が魔物化って：ある意味すごくない？」

シーナ 「まあそう言うな。我々に干渉した影響で寿命が長くなっただけ良いではないか」

魔物と化した元研究員たちに唾然とするオリヴィアに、シーナがフオローする。

局員 「こ、これは一体どういうことだ？」

声の聞こえた方を向くと、遅れてきた最高評議会の局員達が来た。

なのは 「よろこんで？この子たちは私達の一員になったの」

局員 「おのれ！！小娘の分際で！！」

なのは 「そう、ちょうど良かったから最後にこれを見せようか？」

なのはの背中から巨大な悪魔の羽が現れる。

なのは「…冥王消滅波」

ドオオオオ
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
！
！！
！！！
！！！！

局員たち「ぎゃあああああああああああああああああああ
ああ!!!!!!!!!!!!」

一端羽がなのはを包んだ後、開くと同時に邪悪なる波動が局員たちを襲った。

直撃を受けた局員たちは肉も血も残らず消えていった。その余波で周りの木々が吹き飛ばされたが。

「…これが完全なる力だ」

とある暴君のセリフをアレンジした名言を行ったのは。

シーナ「…いや、これはやり過ぎだろ…」

オリヴィア「さすがと言うべきか、怖いと言うべきか……」

シーナとオリヴィアはなのはの技に冷や汗を流す。

なのは「何か言った? (ニツコリ)」

シーナ・オリヴィア 「ナンデモナイデス」

笑顔のなのは（だが目が笑ってない）をみて2人は片言で答えた。
そんなわけで2人は勇斗のいる魔帝界へ戻った。

のだが……

勇斗「いくら始めてとはいえ森ごとぶっ飛ばす奴が何処にいる？」

勇斗がいい笑顔でなのはを正座させていました。

なのは「い いやでもあの時は「O☆SHI☆OKIだ」に、に
やあああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああ！！！！！！！」

なのはOSHIO☆KIされました。
（笑）
そして軽くトラウマが出来た。

第三十五話：魔王神なのはの噂（後書き）

なのはの強さは勇斗 $\geq$ なのは $\parallel$ 奏なかんじで。

第三十六話：襲撃者の末路（前書き）

今回ちょっと長いです。管理局VS魔帝界軍。まあ結果は見えてるけどね♪

第三十六話：襲撃者の末路

魔帝界

なのは「フニャ〜〜・・・」

気の弱い猫のようになってるなのは。

なぜかって？ 前回勇斗にお仕置きされたからだ。

聖華「だ、大丈夫ですか？」

蓮牙「はっはっは！ 勇斗に怒られたか？」

なのは「笑い事じゃないです〜」

聖華は心配し、蓮牙が笑い、なのはは突っ込む。

なのは「ちょっと派手にやってしまっただけなの」

勇斗「そう言う口ぶりはこの口なのか？」

なのは「いひゃひゃひゃひゃ！」

後ろから勇斗がなのはの頬を抓らせる。

奏「ウフフ、いい気味ね。ま、勇斗お兄ちゃんの妻にふさわしいのはこの私って決まってるから」

なのは「（ムカツ！）奏ちゃんは血縁があるでしょう？ 勇斗君の妻になるのは私だよ？」

奏「なんですって？ 猫野郎」

なのは「やるの？ クソ野郎」

その後低レベルな争いが始まった。

勇斗は「何やってんだこいつ等…」とジト眼で見続けていると、外から騒ぎが聞こえる。

勇斗「なんだ？」

奏「え？何？」

奏も喧嘩をストップして外を見る。

なのはは人だかりの中で見覚えのある人たちを見つけた。

なのは（あれってまさか…）

魔帝界・地獄広場

中央に4つの鎌を土台にドクロの壺のオブジェがある人場で、

管理局員「よく聞けお前達！これからこの世界は我々時空管理局が管理する！」

管理局がこの魔帝界を支配する（と魔物たちは思っている）と宣言したのだ。

ガーゴイル「はっ？なにいてんだこいつは？」

ゾンビ「あいつら頭いかれてんじゃねえのか？それとも知らないだけか？」

ガーゴイル「言えてるな」

別のところでこんな会話がある。

ティアマト「なんじゃ貴様らは？」

邪龍族上位ランク・ティアマトが代表でやってきた。

管理局員「話の分かる奴だな。よく聞け。この世界は我々時空管理局の方に基つき管理世界へ認定させる」

ティアマト「・・・・・・・・・・」

管理局員「したがってこの世界は我々が取り仕切ることになった「帰れ」な？」

ティアマト「ここは貴様らの様なならず者が来るところではないわ」

ティアマトの指摘に管理局員の男はイラッと来た。

管理局員「な、ならず者だと？ 貴様！ 我々管理局をならず者とぬかしたな！！」

ティアマト「ならず者以外になにある？ というか我々が領地に無断で入り込む奴なぞならず者で十分だ」

バーバリアン「その通りだな？ ってか殺らせろや」

モスマン「ギィギィ！」

グリフォン「出てけよ人間。さっさと帰れ」

住人全員「帰れ！ 帰れ！ 帰れ！ ×10」

住人達は否定的である。

管理局員「き、貴様ら！ 我々を否定すると「ドラゴンノヴァ！」 んなっ！？」

ティアマトの口から炎の塊が発射されて何もないところで爆発した。

提督「アリカーシャの連絡が取れんだと？」

局員「ハイ、おそらく住人と思われし魔物に殺されたのでしょう」

提督は頭を抱えた。

そのほかなんにんかの提督がいて、そこにリンディ、クロノ、はやて、フェイト、ヴォルケンリッターのメンバー達が座っていた。

すると、

局員「！？提督！アリカーシャが向かった世界の住人からメッセー
ジが届いたとの事です！」

そのことに全員がざわついた。

提督「うむ、回せ」

提督の指示にモニターを出す。

画像が悪いが、人の姿が見える。

「??? 「愚かな虫けらめ、我らの領地に無断で侵入するなど…」

その人物の声からだだならぬ威圧が含まれている。

提督「貴様は何者だ！」

「??? 「我は世界の王者なり。貴様らも侵入した愚かな愚者のよう
になりたくなければ去れ」

これは警告だ。死にたくなかったら二度と干渉するなという意味合
いがこもっている。

クロノ「待て」

????「ん？」

クロノ「我々管理局は管理しなければ秩序が見いだせないのだ。だから「勝手にしゃしゃり出て自分の都合を押し付けるな。だから周りに空気を読めないクソガキと呼ばれるのだ」クソガ…ッ!？」

空気の読めないクソガキと呼ばれてショックを受けるクロノ。

????「この世界の秩序は世界ノ王である我が握っている。貴様らのような世界の神気取りな奴に秩序を変える気はない」

提督「貴様！我々管理局を愚弄するか！」

????「…そうか。話の分からない奴には…」

するとモニターから青い手が出てきた。

提督「な、なんだ？」

周りが驚く。

そいつは原始人な服装に4メートルある巨体、一つ目に一本角に棍棒を持つ邪鬼族・ギガンテスである。

????「ギガンテス、その馬鹿に鉄槌を」

ギガンテス「グッフッフ・・・」

棍棒をトントンして提督に近づく。

提督「ま、待て！私を殺せば提督殺害犯罪に！」

ギガンテス「俺達魔物にそんなんつうようしねーよ」

棍棒を振り上げて提督…

ガシャンッ！！

…の座っていた場所をたたき壊した。

ギガンテス「フン！」

提督「あ…ああ……」

ギガンテスは踵を返し、提督は啞然とした。

その時黒魔道士が現れて時空ゲートを開いてギガンテスと黒魔道士は中に入り、時空ゲートは消えた。

??? 「少々手荒だが、次に干渉する気なら…」

——コワシテヤルヨ——

それを言ったあとモニターは消えた。

周りは激しくざわつき、はやて達は不安が広がった。

で…

なのは「どうだった勇斗君？」

勇斗「一応釘をさしといた。さて、あいづらはどう動くか…」

すると影夜が現れる。

影夜「魔帝界上空にゲートアウト反応あり。時空管理局の物と思われる戦艦が200機出現とのことです」
勇斗「…馬鹿だ馬鹿だと思っていたが本当に馬鹿だな…これから起こるのは惨劇しかないのにな…」

魔帝界上空

艦長「いいか！これから作戦を遂行する！」

戦艦の大群の中のリーダー機・アーディアの司令塔の艦長の男が叫ぶ。

艦長「同胞機・アリカーシャを襲った脅威はこの世界そのものなのだ！だから貴様らも生き延びて、見事作戦を成功させてほしい！」
局員たち「おお〜〜！！！」

局員たちは手をあげて叫ぶ。

彼らは今からこの世界を管理下に置くので魔物たちを一掃するつもりなのだ。

はやて「…今一納得しかねるんやけどな…」
フェイト「私もそう思うけど…今は作戦に集中しよ？」
シグナム「そうです主、戦いは目の前にあるんです」
ヴィータ「なに、あたし等がいれば十分だよ」
シャル「うまくいくといいんですけど…」

ザフィーラ「……………」

リイン「怖いです…」

リインフォース「心配するな。私も怖い」

はやて達は不安ながらも作戦に参加する。

なぜ彼女達がここにいるかというと、アーディアの艦長から一緒に来てほしいとの命令でここにいるのだ。

そして彼女たちだけじゃなく、

オリアナ「うう…緊張するな…」

ラクイーン《しっかりなさってくださいマスター》

緊張気味で震えているオリアナ・ベリアンとそのデバイス・ラクイーンがいた。

彼女もはやてと同じくここにいるとの事。

オリアナ「だってここの魔物たちはめっちゃ強いってことでしょ？
更にはこの世界の収める王がいるってことだし出くわしたらどうしようって…」

緊張の理由は魔王のこと。

エンカウントすれば間違いなく一撃でやられる。

すると、

局員「艦長！広場付近に生体反応あり！映像出します！」

一人の局員が叫んでモニターを出す。

映ったのは黒い仮面とマントをした男。

艦長「あ、あれは…ゼロっ!？」

そのことに局員全員が驚愕と動揺をし、フェイトに至ってはなのを攫った相手として認識していた。

するとゼロが両手を広げると、後ろに大きな魔方陣が現れた。

はやて「!?! あれは召喚魔方陣!!」

艦長「いかん! 何か出る前に止めろ!!」

局員「はい!!」

艦長の命令で外に待機してた局員たちがゼロの元へ向かう。
そして魔力弾を放って止めようとしても、もう遅かった。

局員たち「うわああああああああああああ!!!!!!」

魔方陣から大きな翼が出現して局員たちを吹き飛ばした。

そして、漆黒の体を持つ竜、バハムートが出現した。

バハムート「グルウウオアアアアアアアアアアアアアア!

!!!!」

バハムートの雄叫びが魔帝界中を響かせた。

魔物「オオオオオオ~~~~!!」

それに反応した魔物の軍団が現れた。

妖霊族、魔翔族、猪人族、プリニー族、珍茸族、人狼族、夢魔族、猫娘族、妖精族、魔蛇族、鳥人族、屍族、魔騎士族、魔獣族、水魔族、人魚族、魔族、邪龍族、邪鬼族、殺人機族、魔道巨人族、樹

巨人族、銃魔神族、罪男族、淫女族、死龍族、魔虫族等さまざまな魔物の軍団が姿を現した。

局員「ま、魔物出現！こ、これは…およそ5000以上！！」

艦長「な、なんという数だ！だ、だが我々にはアルカンシエルをもって「ドゴッ！！」な、なんだ！？」

局員「ああ！！アルカンシエルが！！」

飛行系の魔物がアーディアに搭載されているアルカンシエルを壊している。

他にも戦艦に張り付いて次々と撃沈させている奴もいる。

艦長「…ええい！！こうなったら…八神二等空佐！フェイト執務官！ベリオン一等空尉！直ちに魔物の軍勢を駆逐せよ！」

はやて「え？あ、はい！了解しました！」

艦長はやてではやて達に命令する。

はやて達はあつけにとられたがすぐに返事して出動した。

艦長「全部隊！彼女達を援護するのだ！！」

局員たちは艦長の命令に援護に向かう。

魔帝界上空

はやて達はバリアジャケットを着て外へ出るも、驚愕するほどの光

景を目にした。

落ちていく戦艦、魔物の多すぎる数、やられていく局員たち、一方的に管理局が押されている。

はやて「まずいっ!! みんな! 助けるで!」

フェイト・シグナム・シャマル・ヴィータ・リイン・リインフォース
「了解!^{です}!!」

オリアナ「りよ、了解!」

はやてが状況を判断してフェイト達に号令し、フェイト達は応える。

フェイト「(はやての魔法が完成するまでここは守ろう!) ハーケンセイバー!」

ガーゴイル「グオオオオオオオオオ!!」

金色の魔力刃を飛ばし、ガーゴイルを切り倒した。と思ったら、

ガーゴイル「イッテエなこのやろ!!」

腕に切り傷が出来ただけだった。

ハーピー「撃ち落としてやる!」

フェイト「!？」

ハーピーがフェイトに爪でひっかいてきた。

フェイトはギリギリでかわす。

フェイト「この場を離せば」

ハーピー「待てー！ー！！」
フェイト「え？早いっ！？」

いったん離れようとしたらハーピーがフェイトと同じ速さで追いかけてきて驚く。

だがそのせいで前方のファフニールに気付かなかった。

ファフニール「ウガァ！」

フェイト「きゃあっ！」

ファフニールに叩き落とされるフェイト。

しかし偶然下にいた罪男族のおかげで地面に激突せずに済んだ。

フェイト「いったた・・・あっ！」

起き上がろうとすると、猫っぽい帽子をかぶった盗賊がバルディッシュを盗んだのだ。

しかし後ろから罪男族の一人がフェイトの肩を掴む。

罪男族「これ以上抵抗するなら命はないと思え」

フェイト「・・・・・・・・・・」

フェイトはキッと睨むも、バルディッシュは盗まれ周りは魔物だらけ。とても勝てる見込みはない。

シグナム「紫龍一閃！！」

すると上から一つの閃光が墜ちてきた。

直撃後爆発して魔物軍は吹き飛ばされた。

爆破地点にいたのはシグナムだ。

フェイト「シグナム！」

シグナム「どうしたテストタロッサ、油断するとはらしくないな」

皮肉な言い方をするシグナムだが、

???「フンヌハアアアアア！」

シグナム「ツツ！！？」

後ろから黒い鎧を身にまとったモンスター、魔騎士族のオーディンだ。

オーディン「どんな強者の匂いがあると思えば、こんな小娘か？」

シグナム「心外だな。私は女だが腐っても騎士だ。私を小娘かどうかは実力を確かめてから言うのだ」

オーディンはシグナムと一目見てつまらなさそうなことを言い、シグナムは反論してレヴァンティンを構える。

オーディン「確かにそうだな。なら私の力がどれほど強いか教えてやろう」

大きな剣構えて威圧するオーディン。

シグナムはオーディンの放つ威圧に汗を流す。

シグナム（なんという威圧、これほど強い敵は初めてだ・・・）

オーディン「おい貴様、お得意の必殺技を出して来い。我も必殺技で返そうではないか」

オーディンがシグナムの必殺技を出せと要求。

シグナムは驚くも、目の前の強敵に使わざるを得ないと予想した。

シグナム「いいだろう、レヴァンティン！」

レヴァンティン「ja!」

ガシユン×3

レヴァンティンから3回カートリッジをロードし、剣に炎が纏う。

オーデイン「ほう？いい剣を持ってるな。なら応えてやろう！」

オーデインはシグナムのデバイスを評価し、懷からオーデインの持つ剣・ダークブレイドを取り出す。

シグナム「紫龍一閃!!!!」

オーデイン「闇龍一閃!!!!」

両者の必殺技が炸裂して大爆発が起こった。
そして煙がはれると動かない2人、いや、構えを解いたオーデインと膝をつくシグナムがいた。

シグナム「私の負けか…」

オーデイン「ああ、まだ抵抗する気なら…」

オーデインの剣がキラリと光る。

シグナム「…もう抵抗する力はない」

オーデイン「懸命な判断だ。もうそろそろ終わりだろう」

戦艦はアーディア以外すべて落とされ、アーディアは虫型モンスター

ーに覆い尽くされ、はやてとリインフォースは飛行モンスターに囲まれ、ヴィータもシャルもザフィーラもモンスターに囲まれ、オリアナに至っては苦手なモンスター満載でへたり込んで涙目で降参している。

バハムート「貴様らは牢獄いきだ。地獄を味わうんだな」

バハムートはそう吐き捨てた後魔方陣の中へ消えた。

結果、管理局は惨敗へと終わった。

第三十六話：襲撃者の末路（後書き）

次回はなんだかムッフエツチなイベントが起こりそうだ…。

第三十七話：囚われたエース達（●）（前書き）

ムフフエツチな表現が含まれます。

自身がない人は見ない方がいいです。

第三十七話：囚われたエース達（●）

魔帝界・魔王城・地獄地下

男「うぎやあああああ！！！！」

男2「た、助けてくれエエエえ！！！！」

ゾンビ「オオオオオ〜〜・・・」

地下施設のとある施設で局員だった男達がゾンビから逃げている。
その施設の名は腐屍地獄というもの。

女「いやあああああ〜〜！！！！」

女2「いやっ！ああっ！お願いやめ、ああんッ？」

罪男族「フーツ、フーツ！」

別のところでは局員だった女性達が罪男族に犯されている。
ちなみにフェイト達はそこにいない。

アーディアにいた局員たちは捕まり、その艦長は悪あがきでサンド
ワームに喰われたそうだ。

生き残った局員たちははこの地獄地下で拷問の様な事を受けられて
いるのだ。

地獄地下・秘密の牢獄

そしてフェイト達のいる場所はこの秘密の牢獄だった。
ザフィーラは別のどこにいるらしい。

はやて「…偉い情けなく捕まってしもうたな私達…」

シグナム「実力の差が違いすぎたのです」

ヴィータ「くっそー！デバイスがありゃこんな檻ぶっ壊せるのに！
！」

落ち込み気味にはやてが呟くとシグナムが同意する。

ヴィータはオリの鉄格子を持って文句を言う。

彼女達のデバイスは捕まった際どっかに持っていていかれたようだ。

???「持ったとしても壊れることはないぞ。オリハルコン合金だから」

フェイト・はやて・オリアナ（！？このこえは！）

聞き覚えのある声にフェイト、はやて、オリアナは声のした方へ向くと、

勇斗「よう、お前ら」

勇斗が手をあげて挨拶していた。

フェイト・はやて・オリアナ「勇斗（君）（様）！！・・・え？」

3人は驚いて勇斗に言うフェイトとはやてとオリアナが顔を合わせる。

オリアナ「今勇斗様に呼び捨てと君づけ！？」

はやて「そっちこそ様付けってどういうことなんや」

オリアナ「勇斗様は勇斗様よ！勇斗様！貴方の妻になるオリアナです！」

勇斗「…剣の山に連れてやろうか？」

オリアナ以外全員（黒っ！？腹の中黒っ！？）

オリアナに言葉に中に癪に障る単語が合った為拷問に連れ出そうか
と言い出したらはやて達は勇斗の腹黒さに突っ込む。

フェイト「そ、それにしても何で勇斗がここに？」

勇斗「そのことはもう一人着てからだ」

話の趣旨がずれたためフェイトが代表して聞くと勇斗が待ったをかけた。

なのは「呼んだ勇斗君？」

フェイト・はやて・シグナム・ヴィータ・シャマル・リイン・リンフォース

「なのは（ちゃん）（さん）！？」

現れた人物が何と行方不明になっていたなのはだった。

フェイト「な、なんでなのはが？」

勇斗「それについては俺が説明しよう」

勇斗は説明する。

管理局、上層部の存在、違法研究、なのはのことなど話した。
それを聞いたフェイト達は信じられないような顔をしている。

フェイト「そんな…、じゃあすべて管理局が？」

勇斗「そうだ、なのはもそれに巻き込まれた。で、お前達はどうするつもりだ？」

ヴィータ「どうするってなんだよ？」

勇斗「管理局に戻って俺と戦うか。それとも、俺と共に戦うかだ」

フェイト達は驚いた。

オリアナ「ハイはい！私は勇斗様にお供します！」

オリアナが迷わず勇斗側に着いた。

勇斗「…お前の性格上そう来るんじゃないかと思っていたが…まあいい。お前らはどうする？」

フェイト達はしばらく考え、そして決断した。

フェイト「勇斗と一緒にいて何か救えることがあるのなら、私は勇斗のどこに行くよ」

はやて「管理局より勇斗君の方が信用できるな」

シグナム「私は主はやてと共に行こう」

ヴィータ「あたしもだ。べ、別に勇斗と一緒にいたいわけじゃないからな」

シャマル「私も手伝います」

リインフォース「私を救ってくれたんだ。恩を返した方がいいな」

リイン「ですう！」

勇斗「ふむ、いいだろう、なら・・・契約しよう」

少女達契約中…

そしてフェイト達はなのはと同じく契約された。

変わった事と言えば今までよりも力が湧きあがったところ、だが特にヴィータはムチムチグラマーボディにまで変わっていた。出ることは出て何ともスタイル抜群だ。当の本人は大喜びした後お礼を言った。

はやて「もしかして勇斗くなのはちゃんとあれでもやったんか？」
なのは「ブーッ！！？」

はやての何げない一言になのはが吹いた。

はやて「あれ？ホンマか？」

なのは「そ、そんなわけないよ！！（やったけど）」

なのはは否定するが、実際オリヴィアとやりに来た経験あり。

オリアナ「ほう？なら勇斗様のアレは私の物よ！」

三人娘「させるかアアアアア！！！」

勇斗「お前らは…」

オリアナが勇斗に近づくとここに便乗してなのは達もやってきた。

オリアナ「ああ？くうっ、ああん？勇斗様と一つになったみたい？」

勇斗のアレがオリアナの秘部に入れられ激しく動かされているオリ

アナ。

なのは「あああ？そんなに激し、んあ！」

フェイト「ああ！勇斗お？」

はやて「激しい？激しすぎるで？」

シグナム「こ、こんなに、激しいのは、あんっ？初めてだ」

ヴィータ「ゆ、勇斗のアレが？…奥に当たってえ…？」

シャマル「や？ああ？胸がいじられてアソコもいじられてえ…？」

リインフォース「うああ？気持ちいい？」

なのは達もオリアナと同じく激しく腰を動かされている。

ちなみにリインは罪男族に連れて行かれた。子供には早いと。

キスをして、胸をはげしく揉み、激しい動きでなのは達は快感を覚える。

なのは「ああっ？だめっ？もう限界…んはああ！！…？」

フェイト「勇斗、あああ！！…？」

はやて「っあ、でる！でるうう？」

シグナム「も、もたん！、うあああ？？」

ヴィータ「勇斗の、うあ？アレが中にい！？」

シャマル「もう、だめええ？」

リインフォース「うはああああ！！…？」

オリアナ「い、イクウウ？？」

絶頂を超えた。

抜くと秘部から白い液体だ出る。

勇斗「十分楽しんだか？あとはあいつらにやらせるか」

女性陣「あ…」

勇斗が離れたらなのは達はものさびしそうな顔をする。

部屋の奥から罪男族、淫女族、スライム族、触手魔族が現れる。

なのは「はああああん？気持ちいいいいい？？」

仰向けに倒されて、罪男族にはげしく腰を動かされるのは。

フェイト「す、吸わないでエエ？」

胸と秘部にスライムの触手がくっついて吸われるフェイト。

はやて「うちの胸さばき舐めんなや？」

はやては淫女族の一人の胸を揉み解していた。

後ろに淫女族がはやての胸を揉み、秘部を舐める奴もいる。

シグナム「激しいっ！もっと、握ってくれ？」

激しく胸を揉まれ腰を動かされるシグナム。

ヴィータ「あたしだって負けてないぞ？」

馬乗り状態のヴィータが胸を揉まれながらも腰を動かしている。

シャマル「ん、んん！、んんん？」

シャマルの口と秘部に罪男族のアレが挿される。

リインフォース「そ、そんなにすうな、あう？」

淫女族によって胸を吸われて秘部をいじられているリインフォース。

オリアナ「はぁぁん？激しいよお？」

前方と後方から罪男族のアレが中に挿れられているオリアナ。
そんなことがよく続いて行った。

数時間後…

顔立ちがすっきりつるつるになったのはたちは今ミーティング会場（外にいる）にいる。

勇斗「で、管理局はお前達の生存している事が知ると一応やってきて抹殺するんだろうな」

なのは「一応って…まあそうだけど」

苦笑いするなのは。

勇斗「だからこそ、俺が先導に立って管理局…いや！ミッドチルダを革命せねばなるまい！」

勇斗は立ち上がる。

勇斗「皆の者！今こそわが魔界族すべてで忌まわしき愚者の巣窟、ミッドチルダに畏れを教えてやろうではないか！」

魔物軍「グオオオオオオオオ~~~~~!!!!!!」

魔物軍の雄叫びが響き渡る。

勇斗「向こうから犯罪組織と呼ばれるだろうがそんなものは没だ。
だから俺達はこの部隊を形成する！」

魔界革命軍団・ダークナイツだ！

そして4年後、新たな戦いが始まろうとする。

第三十七話：囚われたエース達（●）（後書き）

申し訳ありませんが更新を一時ストップします。

ネタを整理して置きますので大体1か月開くと思います。

次回はStrikersの時期！楽しみに待っていてくれ！

第三十八話：始められる物語（前書き）

お久しぶりの投稿です。

時期はストライカーズ！

では始め！！

第三十八話：始められる物語

ミッドチルダの噂

『ねえ知ってるかいあの噂』

『それってあの組織のこと？』

『ああ、例のあの英雄が建てた組織だぜ？』

『私その人見たの！すっごくカッコよかったわ！』

『でも管理局はアレを危険視してるって』

『アレの何処が危険なんだ？管理局は』

『そうよ。あの人の部隊に入りたいわ！』

『管理局よりあっちの方が人気あるぜ！』

『私実はあそこに入る予定なの』

『まじか！？今度紹介してくれ！』

『きゃー！愛しのあの人に会える〜♪』

『よっしゃ！みんな行こうぜ！』

『『魔道警部隊・ダークナイツ』へ！！』

20XX年 ミッドチルダ・第五地区のはずれの施設・ダークナイツ

??? 「ココがダークナイツ…」

??? 「うう・・・緊張してきた…」

入口に前で眺めるオレンジのツインテールの少女と、緊張している青いショートでハチマキのボーイッシュな少女がいた。

??? 「で、でもやってきたからには頑張らないと！だよねティアナ！」

ティアナ「そうね。やるしかないわスバル」

青髪少女スバルは、相棒のオレンジ髪の少女ティアナと一緒に中へ入ろうとする。

アイアンナイト「おうおうストップだ！」

すると門番のアイアンナイトが止める。

アイアンナイト「オメェらここになににきた？」

ティアナ「私達はこの部隊に入るんです」

アイアンナイト「志望者か？なら1階の待合室で待ってけ。扉開けるから」

スバル「あ、ありがとうございます」

ダークナイツ入団志望者と分かったアイアンナイトは門を開けてスバルはお礼を言って中に入った。

ティアナ「えっと待合室…あった」

ティアナが待合室を探しているとそれを見つけ中に入る。
するとたくさんの人がいた。

スバル「うわ！こんなにいっぱい!?」

ティアナ「さすがダークナイツ：4年しか経ってないのにこんな人
気があるのね…」

スバルはあまりの人の多さに驚き、ティアナは感心する。

入団志望者「ん？お前らもここに入るのか？」

スバル「え？あ、ハイそうです」

入団志望者「そうか、けど俺も負けないぜ？」

入団志望者「私だって一番を目指すのよ」

入団志望者「僕も！」

入団志望者「ワシもじゃ」

入団志望者達は気合十分らしい。

???「あの・・・」

すると子供の声が聞こえた。

赤髪ツンツンヘアーの少年とピンクの髪の少女がいた。

エリオ「はじめまして、僕はエリオ・モンディアルと言います」

キャロ「わ、私はキャロ・ル・ルシエです。そしてこっちはフリー
ドリヒ」

フリード「キュック」

ティアナ「私はティアナ・ランスター。分かるように希望者よ」

スバル「私スバル・ナカジマ、仲良くしようね」

4人は仲良くなる。

??? 『皆様方、本日お集まりいただきありがとうございます』

するとモニターに女性が映る。

その女性はレフィアだ。

レフィア 『本日はダークナイツ入団試験日。優秀な方が入れるこの試験を乗り越えることをお望み申し上げます。四人でチームを組み、合格を目指してください。では第一試験場のグラウンドへお待ちください』

そう言ったあとモニターが消えた。

ティアナ達が悩んでいると、ほとんどがすでに決まっていた。

ティアナ 「・・・どう思う？」

スバル 「うーん、この子たちと組むってのは？」

エリオ 「僕はそれで構いませんが・・・」

キャロ 「私も」

ティアナ 「まあ何でもいいわね」

とりあえずティアナ達のチームも決まった。

レフィア 『チームが決まりましたらはこの中に番号をお取りください。それでは一番の方・・・』

数時間後・・・

レフィア『続いては64番の方、第一試験場のグラウンドへお待ちください』

ティアナ「やっと思達ね…」

ティアナ達の出番がやってきた。

ダークナイツ・第一試験場グラウンド

やって来たティアナ達は試験官の女と対面する。

試験官「フフツ、試験官を舐めていたら痛い目にあうわよ」
ティアナ「ご忠告ありがとうございます」

ティアナ達はそれぞれバリアジャケットを着る。

試験官「フフツ、威勢がいいわね。では試験開始よ」

試験官が言った後魔方阵が展開される。

そして邪霊族のゴーストが10体現れる。

試験官「あなた達の合格はそのゴースト達の撃墜よ。5分以内に来るかしら？」

スバル「やります！そのためのこの試験に来たんですから！」

スバルが代表に言って気合満々のようだ。

試験官「いい心がけね。では試験開始！」
ゴースト「キーー！！」

試験官の号令と共にゴースト達も答えた。

まず3体のゴーストがファイアを飛ばす。

ティアナ達はそれを避けた。

ティアナ「スバル！」

スバル「オッケー！」

ティアナが叫ぶとスバルが答える。

スバル「リボルバーシュート！！」

右手のリボルバーナックルが回転し、ゴースト3体に向けて発射。
ゴースト3体は倒された。

エリオ「ハア！デヤアッ！！」

エリオがストラーダ出ゴースト1体を切り捨てる。

ゴースト「キキキツキツキ！」

2体のゴーストがファイアを唱えてスバルたちに向かう。

ティアナ「クロスファイヤーシュート！！」

ティアナがオレンジの魔力弾でファイアをすべて撃ち落とし、2体のゴーストを倒す。

キャロ「ブースト！」

キャロが魔法でスバルとエリオの能力が上昇した。

エリオ「これで！！」

スバル「いけえええええええええ！！！！！！」

スバルとエリオの連携で残り4体のゴーストが倒された。

試験官「3分45秒！おめでとう！合格だよ！」

それを聞いたスバルたちは大喜びした。

試験官「では、正式的にようこそ！ダークナイツへ！」

数時間後…

スバル「ついにやったねティア！」
ティアナ「分かったからひつつくのは止めなさい」

試験に合格して正式にダークナイツの一員になったティアナ達。
スバルが甘えるように引っ付いてティアナがはがす。

ドン！

スバル「いた！」

すると誰かにぶつかった。

ティアナ「スバル！？」

???「ほう？誰かと思えば見覚えのある奴じゃないか」

スバルは男の声に驚いたような顔になる。
そして見上げると、

勇斗「あれから泣き虫癖は治ったか？スバル」
スバル「ゆ・・・うと・・・さん？」

スバルを救ってくれた恩人で憧れの一人、神道勇斗だった。

第三十八話：始められる物語（後書き）

先にいますが、更新スピードが適当になっていきます。

それでもいいのですが。

第三十九話：憧れた者達

ダークナイツ・スバルとティアナの部屋

スバル「ウツヘツヘツ」

スバルは枕を持ってニヤついている。

ティアナ「そんなに嬉しかったの？あこがれの人に会えるの？」

スバル「当たり前だよ。私の憧れである勇斗さんに会えてうれしかったんだもん」

呆れ交じりに言うティアナにそう返すスバル。

ティアナ（ま、あたしも人のこと言えないけどね…）

かく言うティアナも実は勇斗の憧れを抱いていたのだ。

ティアナ回想

ティーダ（『黒き判決者』ブラックジャッジメントって知ってるかティアナ？その名の通り

黒き衣を着た奴なんだ！どんな犯罪者でも一瞬で裁きくだすことか
ら付いたらしいんだが俺は一度その人を見たんだ。あれはかっこよ
かったな。俺も何時かあんな感じになって立派な執務官になってや
るぜ！ティアナもあの人のように強くなって目標までいこうか！）

幼きティアナ（うん！！）

回想終了

ティアナ（…なんだか懐かしく思っちゃったわね…）

ティアナは一人こんなことを思った。

スバル「ねえティア、この後予定あるかな？」

ティアナ「うーん、ないわね。暇だからどっか立ちよってもいいかしら？」

スバル「賛成！」

スバルは喜んで外に出ようとすると、

シュン！ポフツ？

スバル「ニュ！」

???「ホエ？」

ティアナ「あ！」

スバルの顔が入ってきた女性の胸に入り、ティアナが驚く。

その女性は腰まである白金の女性、そして勇斗の妹・奏である。

奏「一応どんな子たちが来たかと思ってきたら意外と懐かしい子じゃない」

スバル「この声…もしかして奏さん？」

奏「うん、久しぶり」

そのままの状態でスバルと奏が話をする。

スバル「はい！奏さん久しぶりです！」

奏「そういいながら蹲るのやめなさいよ！くすぐったいしいいけど」

胸の中に埋まりながら言うスバルに、少々抱擁する奏。

ティアナ「ってスバルいい加減離れなさい！」

さっきまで嘔然としていたティアナが復活して引きはがす。

奏「何よう、じれったいわね（久しぶりねティアナ）」

ティアナ「いえとんでもないです（こちらこそ奏さん）」

表では上司と部下の関係で言うが、念話では仲よさそうに話し合う。

奏「ところで二人とも暇なの？私も暇だし一緒に行く？」

ティアナ「い、いいんですか？」

奏「いいのいいの、せっかくだから遊びましょ？」

スバル「やったー！」

ティアナ「うるさいスバル！」

ばしっ！

スバル「いったーい！」

喜ぶスバルをはたくティアナ。

奏はニコニコと笑っていた。

ミッドチルダ・グラナガンのとあるファミレス

奏「フンフンフ~~~~ン♪」

スバル「元気いいですね」

奏「まあね。お兄ちゃんとデート出来たらもったいいのにな」

鼻歌歌う奏は願望を漏らす。

奏「ところでスバルとティアナは何時もパートナーやってたんでしょ？」

ティアナ「腐れ縁がたっだしいですね」

スバル「ティアひどいよ!」

奏がそう言えばと思い出して言うと言とティアナがしれっとした顔でいい、スバルが涙目と言う。

奏「アハハハ! 仲良し凸凹コンビね」

ティアナ「凸凹は余計です!」

そう笑い合いながらも仲良くしていく。

スバル「それにしても勇斗さんってみんなからすれば英雄ですね」

奏「その通り!! 何を隠そう! お兄ちゃんには全知全能な存在であとは・・・」

数時間後…

奏「・・・こんな時間になっちゃった」

奏はバツの悪そうな顔をする。

時刻は今夕暮だ。

奏「じゃあね二人とも。楽しかったわ」

スバル「こちらこそ。奏さん」

ティアナ「ではこれで・・・」

そしてそれぞれ持ち場に帰った。

????

??? 「己え…忌々しい奴らめ…」

どこかで男の声が聞こえる。

まるで嫉妬のこもった声だ。

??? 「真の正義がどちらか上かはつきりさせてやる！」

戦乱の波がたって行く。

第三十九話：憧れた者達（後書き）

もつとネタを作らなければ…。

第四十話：襲撃の魔族

ミッドチルダの超外れの場所

フェイト「ここにも違法研究所があったんだね…」

シーナ「で、どうするつもりだ？」

ある建物の前でフェイトとシーナとその他の魔族が見ている。
彼女等は勇斗の指令で違法研究所の排除を命ぜられたのだ。

フェイト「もちろん、片っ端からかたずけるだけだよ」

シーナ「それはのった！」

フェイトの言葉に乗ったシーナ。
任務とは別の何かもあるが…。

??? 「グフ・・・」

研究員らしき男が切られ倒れる。
切ったのはシーナだ。

シーナ「こんなものか？ つまらないな」

つまらなさそうに吐くシーナ。

フェイト「後で楽しもうとしてるのに？」

シーナ「まあな」

フェイトの指摘にシーナは悪びれもなく言う。

シーナは時々この後に（別の意味の）ニャンニャンすることがあるのだ。

フェイト「ともかく、奥へ行きましょう」

シーナ「楽しめるものがあればいいがな」

奥地

???「・・・・・・・・・・」

緑色の顔に目はなく舌がただれ背中から無数の触手が生えている者がいた。

それも二体。

シーナ「ほう？これは面白そうだ。改造生体だろうな」

フェイト「ひどい…」

シーナは興味ありそうな目で見るが、フェイトはかわいそうに思う。すると二体の改造生体（以下、グリード）が瞬時にフェイト達の後ろに回った。

フェイト・シーナ「!!」

襲いかかるグリードからシーナは捕まる前に躲し、フェイトは真・ソニックフォーム姿で離れる。

グリード「グルル・・・」

グリードは2人うを見て涎を垂らす。
まるでうまい餌を見ているように。

シーナ「ほう・私達をおいしそうな餌を見たに見えるな」
フェイト「呑気に言ってる場合ですか！」

推測するシーナに突っ込むフェイト。
そうこうしている間にグリードは行動を開始した。

まずシーナのこのグリードは背中中の触手を先に出す。
だがシーナがその触手を全て切り落とすが、すぐに再生しまた襲う。

シーナ「面白い！、もっと私を楽しませろ！」

シーナは愉快そうな顔をしてグリードを見る。
鋭い爪や長い舌でシーナに攻撃しようとするがことごとくかわされる。

だがグリードはそこで終わる器ではない。
グリードがつ目で引っ掻こうとしてシーナが上へ飛び上がる。
その時背中中の触手が彼女を捕えた。

シーナ「ほう？少しはやるな」

囚われているのも関わらず、平然としているシーナ。

グリードをよく見ると、男の象徴が出ている。

シーナ「私を犯す気か？・・・なら、私を楽しませてみる」

シーナは特に臆せず、グリードを挑発する。

乗ってるのか乗ってないのか分からないが、グリードがシーナを犯し始めた。

舌で口の中を舐め、両手で胸を弄り、あれで腰を振って刺激させる。

シーナ「あん、いいテクニクだ。気持ちいいが勇斗の方が一番だな」

シーナは犯されているにもかかわらず、平気なふるまいをする。

シーナ「だか私とてサキユバス夢魔だ。やられるよりやる方が好きだな」

と背中から悪魔の羽をのぞかせる。

シーナ「いただきます」

犬歯を立ててニヤリと笑った。

フェイトサイド

こっちではもう一体のグリードと対峙している。

音速の早さできるも触手はすぐに再生するが、それ以外は違う。左手が切り落とされて再生の様子がない。

フェイト「（再生しない。つまり・・・）ハアアアアアア！！！！」

ズバッ！

グリード「ゴボォッ！！・・・」

グリードは切られて撃退された。

フェイト「さて次は……………もう終わったんですか？」

シーナ「すぐにな」

フェイトの前に艶めいたシーナがいる。

すでに干からびたグリードがいるが。

シーナ「フウ、やはり勇斗の方が一番おいしかったな」

フェイト「そこは同意します」

フェイトは肯く。

シーナ「さあ、もうここにはようはない。すぐに勇斗分を補給する！」
フェイト「渡しません！！」

シーナとフェイトはダッシュで戻った。

余談だが、帰ってすぐ勇斗はいなかったので、部屋の前で10時間も待ったらしい。

第四十話：襲撃の魔族（後書き）

訓練シーンを書こうかな。次回。

第四十一話：勇斗の特訓

ダークナイツ訓練場

そこで数多くのダークナイツ員達が立っていた。

その中にダークナイツ員のスーツを着たスバル、ティアナ、エリオ、キャロ（＋フリード）の4人と1匹もいる。

ダークナイツ員達は全員揃ってビシッ！と並んでいる。

ある台の上で勇斗が立っており、その周りに奏達もいる（なのは達は犯罪者なので表舞台に出ていない）。

勇斗「フ、フフフフフ・・・詰まっているな。心身共々詰まっているな！」

ダークナイツ員達「オッス！詰まっています！」

笑う勇斗にダークナイツ（スバルたち含む）は敬礼する。

勇斗「皆の物！自体は今由々しきもの！その由々しきものを破壊する物は誰だ！？」

ダークナイツ員達「神道勇斗総帥です！！」

勇斗「そして、違法研究や殺人をしたものが裁かれるのはなぜだ！？」

ダークナイツ員達「罪を犯したからッスー！！！！」

勇斗「そうだ！！罪を持つ物は許されざる存在だ！だが逆に罪の中には善も存在する！」

勇斗は続ける。

勇斗「そして、今日はお前達に俺の特製の訓練法を行う。しっかり

ついてくるがいい！」

そんなわけで特訓が開始されたのだが。

奏「あっち以上に多くない？」

シーナ「私もそう思うな」

レフィア「なぜ皆さんあちらに…」

レイナ「女性比率多いね」

なぜか勇斗サイドに女性の比率が多い。

ちなみにそれぞれレベルがあり、

レイナがC、レフィアがB、シーナがA、そして勇斗がSレベルに分けられている。

つまり勇斗の方が史上最強の弟子みたく地獄が待っているにもかかわらずなぜが女性陣が多く集まった。

理由は勇斗様に罵られたいか勇斗様に接近したいかなど分かりやすいことだ。

勇斗「・・・お前ら：ホントに訓練する気あるのか？」

女性陣「ハイ！もちろんです！」

絶対別の目的で来た女性陣。

ちなみにティアナ、スバル、エリオ、キャロは自分の意思でこっちに来た。

勇斗「・・・まあいい、来たからには…容赦はしないぞ？」

勇斗はパチンと指を鳴らすと、魔方阵から魔道巨人族のゴーレムが現れる。

ただ胸部の部分にターゲットマークがある。

勇斗「あのターゲットを破壊出来たら合格だ。頑張ってけよ」

女性陣（あれ？死亡フラグ？）

心の奥から後悔の念を抱くが、

勇斗「ま、怪我したら俺が直してやんぞ」

女性陣「イヨッシャアアアアアアアアアア！」

勇斗の一声に気合が入った。

そしてすぐに試合が始まると同時に人が変わったかのように女性陣がゴーレムに攻撃する。

男達は少しついていけない状況だ。

そこ、それ訓練になってるのかというツツコミはなしの方向で。

勇斗「沢山相手をするのは面倒だからな」

ゴーレムとバトっている女性人を見ながら言う。

ちなみに目の前にはティアナ、スバル、エリオ、キャロがいる。

勇ろ 「本当の訓練はここからだ」

そして勇斗は魔方阵を出してあるモンスターを出した。

赤い目に6本足で長い尻尾の虫と機械が合わさったかのような奴だ。

勇斗「『ネルビラを3体すべて撃破』アドバイスは連携を極めろ！」

始め！」

ネルビラ「ギィエアアア……！」

試合開始と同時にネルビラが行動を開始した。

第四十一話：勇斗の特訓（後書き）

・・・だんだんネタ詰まりになってきた…。

第四十二話：フォース・ザ・フォーメイション

ネルビラ「ギャル！」

まずネルビラからの攻撃。

大きな爪でスバルたちを狙う。

スバルたちはそれをかわす。

ティアナ「クロスファイアシュート！！」

ティアナが弾幕を作る。

ネルビラ達はその隙間に避けると、

スバル「リボルバー！シュート！！」

エリオ「サンダー！エイジ！！」

スバルとエリオが得意技でネルビラを一体撃破。

勇斗「なかなかやるな。だが本領発揮はここからだ」

勇斗はそういうと、ネルビラは仲間がやられたことに興奮する。

ティアナ「気をつけて、何をするかわからないわ」

スバル「だったらまかせて！」

ティアナ「あ！こら！」

スバル「うおおおおおおおおお！！！！」

スバルが思いっきり突っ込んでくる。

するとネルビラがしっぽを重ね合わせ、ハンマーのように振った。

スバル「うわ！」

スバルは紙一重でかわす。

更に入れ替わってはまたハンマーみたいに攻撃。
これはかわせないのでガード。

ティアナ「（凄い連携力ね……。ならそれを崩すことね！）スバル、クロスシフト、エリオとキャロは援護をお願い！」

スバル「おう！」

エリオ・キャロ「はい！」

勇斗（連携崩しと来たか。いい判断だ）

動きを変えた彼女らに勇斗は笑う。

まずスバルとエリオが先行に攻める。

ネルビラは連携攻撃で2人同時にし止めようとする。

だがティアナがキャロの補助魔法で強化された攻撃を発射。

ネルビラはそれを弾くもスバルとエリオの攻撃を受けてしまう。

ネルビラ「ワガアアアアア！！」

ネルビラは怒りで攻撃が激しくなる。

スバル「ドオオオオオオッセイ！！」

スバルが襲いかかるネルビラを拳で撃ちあげた。
そしてネルビラのとこまで飛んで、

スバル「リボルバーーーーー！！メテオッ！！！！」

ドゴッ！！

撃たれた拳がネルビラを隕石の如く墜落した。
すでに満身創痍だ。

エリオ「サンダーインパクト！！！！」

トドメと言わんばかりにエリオが雷を纏いながら槍をぶん回し、槍を投げると1000万ボルトの雷が衝撃を作った。
ネルビラは動かなくなった。

勇斗「合格だ」

勇斗はニヤリと笑った。

そして訓練終了。

勇斗「この場にいる全職員に次ぐ！よくぞ我が修行に耐え抜いた！
これからはどの敵にも屈しない一流の戦士となってくれ！ただし！
屁まして失敗する様なことがあったら再教育が待っていることを肝
に銘じておけ！」

ダークナイツ員「イエッサー！！」

勇斗「良い返事だ！さあ行くぞ！」

全員「おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

マントを翻して勇斗らは歩きだす。

その姿は兵士と共に歩く王となれ。

第四十二話：フォース・ザ・フォーメイション（後書き）

ね、ネタが尽きてしまった…。

というわけでこの話は終わります。

ご視聴ありがとうございました。（誰か続きを書いてもいいですけど…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6923r/>

魔王と聖王と不屈の魔法少女

2011年10月3日23時10分発行